

2019年度 博士論文

母娘関係が娘のアイデンティティ形成に与える影響

——量的・質的アプローチ——

指導教員 大野 久 教授

立教大学大学院 現代心理学研究科

心理学専攻 博士課程後期課程

赤木 真弓

目次

第1章	序論	1
1.	本研究の背景	1
2.	母娘関係についての研究	2
1)	親子関係	2
2)	母娘関係	4
3)	母娘関係の類型化	5
3.	アイデンティティ研究の手法	6
1)	質問紙調査	6
2)	面接法	7
3)	伝記研究法	8
4)	体系的折衷調査法	9
4.	本研究の目的	10
5.	研究の構成と内容	11
第2章	母娘関係尺度の作成とクラスタ分析による母娘関係分類	14
1.	問題と目的	14
2.	方法	17
1)	調査対象	17
2)	手続き	17
3)	尺度	17
3.	結果	19
1)	母娘関係項目の因子分析	19
2)	基本統計量	21
3)	相関分析	21
4)	クラスタ分析	22
4.	考察	26
5.	今後の課題	30

第3章	伝記分析：マーガレット・ミッチェル	32
1.	問題・目的	32
2.	方法	37
3.	結果・考察	37
1)	母の性格と養育態度	38
2)	母娘関係の特徴	39
3)	フォークロージャーとしての特徴	40
4)	アイデンティティ拡散の様相	41
5)	モラトリアムへの移行の阻害要因	43
6)	作家としてのアイデンティティ形成	44
7)	その後のアイデンティティの様相	46
4.	総合考察	46
5.	今後の課題	49
第4章	伝記分析：アガサ・クリスティー I	56
1.	問題・目的	56
2.	方法	57
3.	結果・考察	58
1)	養育環境と母娘関係の特徴	58
2)	青年期のアイデンティティの様相	61
3)	高い基本的信頼感が育んだアイデンティティの感覚	63
4.	総合考察	64
5.	今後の課題	65
第5章	伝記分析：アガサ・クリスティー II	70
1.	問題・目的	70
2.	方法	72
3.	結果・考察	72
1)	理想通りの結婚と小説家としての成功	73
2)	夫婦生活の破たん	74
3)	失踪事件から離婚へ	75
4)	成人期の母娘関係	76

5.)	「基本的信頼感」と「基本的不信」のバランス	77
4.	総合考察	79
5.	今後の課題	82
第6章	「伝記資料定量化分析法」構築の試み	89
1.	問題と目的	89
2.	方法	91
3.	結果	92
1.)	マーガレット・ミッチェルについての評定結果と根拠	94
2.)	アガサ・クリスティーについての評定結果と根拠	97
3.)	ミッチェル, クリスティーの該当クラスタ	101
4.	考察	105
5.	今後の課題	108
第7章	比較分析：M・ミッチェル& A・クリスティー	110
1.	問題・目的	110
2.	方法	111
3.	結果と考察	111
1.)	ミッチェルとクリスティーの生育環境の比較	111
2.)	青年期のアイデンティティの様相の比較	113
3.)	母娘関係の比較	116
4.)	有能感の様相についての比較	118
4.	総合考察	121
5.	今後の課題	123
第8章	全体総括	124
1.	本研究結果の総括	124
2.	本研究の成果	126
1.)	母娘関係を測定する尺度の開発と母娘関係の類型化	126
2.)	量的・質的アプローチによる, 一般性, 個別性の両面からの分析	127
3.)	質問紙調査と伝記研究法を組み合わせた方法論構築の試み	128
4.)	漸成発達理論の対概念における否定的感覚の必要性についての検証	128
3.	今後の課題と可能性	129

引用文献	131
関連文献	139
謝辞	140
付録	142

第1章 序論

1. 本研究の背景

一卵性母娘（信田, 2008）や友達母娘というような、母親と娘の密着した関係が注目されるようになって久しい。実際、母親と娘が、友達のように買い物や旅行をする姿を見かけることも多く、友人といるより、母親といるほうが楽しい、という話もよく耳にする。このような母娘関係は、近年の高学歴化、非婚・晩婚化が原因とされるが、一卵性母娘という言葉は昭和の歌手、美空ひばり母娘から始まったと言われ、終生の付き人だった女性も、「一卵性母娘だとよく言われましたが、たしかにおふたりの絆の強さは計り知れないものがありました。考えておられることもほとんど一緒だったんじゃないでしょうか」（関口, 2019）と述べている。したがって、このような密接な母娘関係は、現代だけの現象ではないように思われる。

その一方で、母親との関係に成人後も苦しむ娘の問題がしばしばクローズアップされている。我が国では、社会的に成功した女性が母親との葛藤を告白するケースも多く、『母がしんどい』（田伏, 2012）、『解縛：しんどい母から自由になる』（小島, 2014）など、有名人が母親との長年の確執を告白する本も数多く出版され、共感する女性も多いという。彼女たちの母は、いわゆるインナーマザー（斉藤, 2008）として娘の人生を支配しているように思われる。インナーマザーとは、大人になっても心の中を支配する「母親の残像」のことである。「こうすれば愛してあげる」という条件付きの愛をちらつかせながら、子を自分の意のままにしようとする母は、子を抑圧し、子の心の中にいつまでも過酷な批判者として存在するため、子は大人になっても自分を責め続けるようになるという。

アメリカでも、Forward（2013 羽田 訳 2015）が、子どもを精神的に追い詰める親を毒親、特に母親を毒母として問題提起している。実際、ハリウッド映画の中には「Carrie」（1976）、「Black Swan」（2010）、「GONE GIRL」（2012）など、精神的に破たんしていく娘を生み出した原因として、娘を思い通りにしようとする母親を描いて話題となった作品も多くみられ、母娘関係に内包する問題は、時代や文化の違いを超えた普遍的なものであるように思われる。

また、母親との密着が強い場合であっても、支配一服従の母娘関係ではなく、仲のよい友達のような母娘関係であれば、問題はないように思われるが、必ずしもそうではないとい

うとらえ方もある。たとえば、心理学者の信田さよ子氏が監修し、密着した母娘関係をテーマにしたNHKのドラマ「お母さん、娘やめてもいいですか」（2017）では、仲のよい友達母娘であったはずが、実は娘のほうは、無理して母の好みに合うようにふるまうようになっていたことで次第にストレスを感じていく姿が描かれた。これに対して、自分も同じだ、よくわかる、という視聴者からの反響が番組のホームページに数多く寄せられたという。

このようなことから、母娘関係は一元的に理解することのできない、非常に複雑な関係であると推察される。

さらに、こうした密接で複雑な母娘関係は、娘の人格形成、アイデンティティ形成に影響を与えると推測されるが、その関連性について検証することは、女性の発達を知る上で重要であると考えられる。しかし、母娘関係については、幼少期からの関係性を見る必要があることや、関係性そのものが変化するものであること、母親は娘にとってロールモデルであるとともに、個として自立するために分離しなければならない矛盾した存在であること（Chodorow, 1978 大塚・大内共訳, 1981）、など様々な観点を考慮しなければならず、画一的な調査や分析では、その本質がみえてこないと考えられる。

したがって、母娘関係と娘のアイデンティティの関連について検証するためには、方法論についても検討し、多角的に分析する必要があるといえるだろう。

2. 母娘関係についての研究

1) 親子関係

青年期は、子どもから大人への移行期である。Erikson（1959 西平・中島 訳 2011）は漸成発達理論において、青年期は親への依存から脱して自立¹した成人になる時期であり、発達的にはアイデンティティの獲得が重要なテーマになるとしている。つまり、親子関係は、青年期に再構築され、その関係性がアイデンティティ形成に影響を与えると考えられる（Grotevant & Cooper, 1986）。

青年期における親子関係については、これまで、様々な視点で研究されている。まず重視されたのは、親からの自立のために、親から分離する必要性についてである。Blos（1967）は、幼児期の分離・個体化モデル（Mahler, Pine & Bergman, 1975 高橋・織田・浜畑訳 1981）

¹ 自立（independence）は親離れ・独立を表す言葉であり、自律（autonomy）はes（id）を自我がコントロールするという意味合いが強い概念であるが、自立と自律はともに多義的、多次元的概念として扱われており、同義語のように扱われる場合もある（平石, 2014）。

をもとに、青年期を「第2の個性化の過程」と名付け、青年が親の影響から分離し、心理的に独立する過程を示している。また、西平（1990）は古典的概念である「心理的離乳（Hollingworth, 1928）を第一次から第三次までの3段階に分けて説明し、さらに、落合・佐藤（1996）は5段階に分けて説明した。いずれも、親との分離から、親との関係を再構築していく過程を示している。

その後、親との安定的な結びつきを維持しながら自立していく、という考え方から、親との結合を重視する立場が登場し（Lamborn & Steinberg, 1993; Allen, 2008）、親との分離を重視するのか、結合を重視するのか、ということが論点になってきた。しかし、これは、「分離モデル」が分離の健康な面を重視し、結合を不健康とするのに対して、「結合モデル」は結合の健康な面を重視し、分離を不健康とするため、論点が合わなかったのではないかと推察される。例えば、Steinberg & Silverberg（1986）が親からの情緒的自律を測定する尺度を用いて、年齢とともに健康な指標としての自律性が高まるとしたのに対して、Beyers & Goossens（1999）は、情緒的自律の高さが抑うつの高さに繋がることを示した。これは一見、結果の不一致のようであるが、分離の健康な側面と不健康な側面の影響の違いであると推察できる。これらを踏まえて平石（2014）は、昨今は分離と結合の両方が重要である（Grotevant & Cooper, 1985）とする「統合モデル」が主流になっているとし、分離と結合を対立概念として捉えない考え方を示している。このことは、渡辺（2004）が、依存概念を否定的意味での「依存」と肯定的な意味での「絆」に分け、青年期の娘の母親への依存意識と絆意識は分離されないとしているように、一つ概念には健康な側面と不健康な側面があり、その両方に着目する必要があることを示していると考えられる。

小高（1998）は、青年の親への態度・行動についての研究を行い、「親への親和志向」と「親からの客観的独立志向」の2つの下位尺度を用いて親子関係を4類型に分け、それぞれのタイプと心理的離乳の段階について論じているが、「親への親和志向」と「親からの客観的独立志向」の両方が高いタイプが、親を対等な人間として認知し、より親と高次な関係にある「第2次心理的離乳」の段階に対応しているとしており、これは「統合モデル」における分離と結合の両方が重要ということを実証していると考えられる。

つまり、青年期においては、幼少期から築いてきた親との結合と、独立した個人になるための親からの分離がどのように機能するのかということが、アイデンティティ形成にとって、重要なテーマになると考えられる。

2) 母娘関係

親子関係の中でも、母娘関係は、相互依存と情緒的結びつきが他のどの関係より見られ、心理的距離が近い (Fischer, 1991; 高木・柏木, 2000) とされている。Josselson (1973) は、48名の女子大学生への面接調査で、女性はアイデンティティ形成において、重要な他者の反応に依存することを示し、さらに、その後の研究では、重要な他者の中でも、青年期の家族との関係が重要であるということが見出されている (Gilligan, 1996; Jordan, 1997; Josselson, 1994)。そして、女性のほうが男性よりも親の影響を強く受け、さらに父親よりも母親の影響が強い、とされることから (Kroger, 1999)、娘が母親から受ける影響が最も強いと考えられる。また、水本 (2015) は母親への親密性が娘の精神的自立にどのような影響を与えるのかについて検証し、母親が無条件に自分の情緒的欲求を受け入れてくれるという安心感は、母親との信頼関係の構築を促し、娘の適応的な自立を支える、と推測している。そして、このような母親と娘の強い結びつきは、成人期にも変わらないとされる (Josselson, 1996; 渡辺, 2004)。さらに、Rastogi (2002) は、母親と娘との関係性をはかる尺度として、結合、相互依存、ヒエラルキーへの信頼からなる The Mother-Adult Daughter questionnaire (MAD) を作成し、母親との関係における親密性、依存性、分化との関係を分析した結果、家族の中での分化は MAD の 3つの下位尺度と相関がみられなかったことから、娘は自律し、分化していてもなお、母親にアドバイスを求め、ヒエラルキーを信頼している場合がある、という可能性を示した。

その一方で、青年期は親への依存から脱して自立した成人になる時期であることから、青年期の娘の母親との関係は、アンビバレンツにならざるを得ないとされる。つまり、娘にとって最初のロールモデルが母親であることから、母親に同一化することが必要となるが、自立して個としてのアイデンティティを手に入れるためには、同一化から脱し、分化する必要がある、という難しさをはらんでいるからである (Chodorow, 1978 大塚・大内共訳 1981; 橋本, 2000)。

したがって、前述したように、青年期の自立については、親との分離と結合の両方が重要であるとする立場が主流になっているとされているが (平石, 2014)、母親と娘に関しては、非常に複雑な状況をはらんでおり、女性はその葛藤の中で自立を模索する難しさに直面することになると考えられる。

3) 母娘関係の類型化

このように、複雑で、多様性を含んだ母娘関係についての有効な分析手法として、類型化を試みた研究がみられる。

実験的手法としては、Kerpelman & Smith, (1999) が、母娘のペアに対して課題を与え、母娘関係と娘のアイデンティティについての母、娘、それぞれの認識を測定した結果を用いて、母娘関係を4つに分類し、娘の健康的なアイデンティティを促進するパターンと阻害するパターンを示している。興味深い手法であるが、複雑な母娘関係を理解するには、情報が限定的である。

次に、質問紙を用いた分類としては、田中(1993)が、親子関係を受容性と統制性の程度の組み合わせで8タイプに分類して、アイデンティティとの関係を分析した結果、母娘関係においては、受容的自律型がアイデンティティ発達の程度が高く、拒否的自律型と拒否的統制型のタイプで低くなることを見出し、受容性が高いほどアイデンティティの達成度が高いことを示した。さらに、受容性が高いほど、漸成発達理論における各発達段階の達成度も高くなり、統制性が弱いほど(自律性が高いほど)「自律性」と「勤勉性」が高くなるとしている。

また、藤田・岡本(2010)は「母への肯定的感情」「母の支配」「過去の対立・葛藤」「母への依存」の4つの下位尺度を用いてクラスタ分析を行った結果、母子関係のタイプとして「従属群」「希薄群」「依存群」「離反群」の4つを見出した。各群の割合から、「依存群」が一番多く、「依存群」の中にはネガティブな意味での依存に陥っているものが含まれる可能性があるとしている。しかし、精神的健康やアイデンティティ達成度などが測られていないため、どの群の精神的健康度が高いかなどはみえてこない。

さらに、水本・山根(2011)は、母娘関係を「母親との信頼関係」と「母親からの心理的離乳」の2つの軸でとらえ、その高低によって、娘が捉える母親との関係を「密着型」「依存葛藤型」「母子関係疎型」「自立型」に類型化する「母子関係4類型モデル」を提唱している。このモデルは、母子関係を分離と結合の組み合わせによって分析できるという点で特徴が理解しやすく、分離と結合の両方が高い「自立型」が自尊感情、自律性、主体的自己が高いという結果になっている。

このように、母娘関係をその特徴の組み合わせによって分類したうえで検証することは、アンビバレンツさを含むとされる母娘関係を分析するうえで、有効な方法であると考えられる。しかし、従来の研究では、精神的不健康に関連すると考えられる具体的な関係性まで

はみえてこない。

3. アイデンティティ研究の手法

1) 質問紙調査

アイデンティティという概念は, Erikson (1959 西平・中島訳 2011) が漸成発達理論において提唱した概念である。漸成発達理論では, 生涯発達を8段階に分類し, 第1段階: 基本的信頼感 対 基本的不信 (Basic Trust vs. Basic Mistrust), 第2段階: 自律 対 羞と疑惑 (Autonomy vs. Shame, Doubt), 第3段階: 自主性 対 罪の意識 (Initiative vs. Guilt), 第4段階: 勤勉 対 劣等感 (Industry vs. Inferiority), 第5段階: アイデンティティ 対 アイデンティティ拡散 (Identity vs. Identity Diffusion), 第6段階: 親密 対 孤立 (Intimacy vs. Isolation), 第7段階: ジェネラティヴィティ 対 停滞 (Generativity vs. Stagnation), 第8段階: インテグリティ 対 嫌悪と絶望 (ego integrity vs. disgust, despair) という主題を漸成発達理論図 (epigenetic chart) の対角線上に示している。² その中で, 第5段階である青年期の発達主題が「アイデンティティ 対 アイデンティティ拡散」であることから, アイデンティティは青年期の発達を理解するために重要な概念と考えられる。

アイデンティティを測定する試みとしては, 様々な尺度が開発されており, 我が国では Rasmussenの自我同一性尺度日本語版(宮下, 1987), Rosenthal, Gurney, & Moore (1981) の Erikson Psychosocial Stage Inventory (EPSI) の日本語版(中西・佐方, 2001), さらに, 12項目版(畑野・杉村・中間・溝上・都筑, 2014), Ochse & Plug の Erikson and Social-Desirability Scale の日本語短縮版 (S-ESDS) (三好・大野 久・内島・若原・大野 千里, 2003) など, 邦訳版の開発のほか, 下山 (1992) のアイデンティティ尺度, 谷 (2001) の多次元自我同一性尺度 (MEIS) など, 独自のアイデンティティ尺度も作成されている。尺度を用いた質問紙調査は, 大量データを取ることが可能で, 量的な指標が得やすく, 他の尺度との関連を検討しやすいという利点があることから, こうしたアイデンティティ尺度は多くの研究に用いられている。しかし, アイデンティティという概念については, Erikson (1959 西平・中島訳 2011) が, 「<自分自身の内部の斉一性と連続性> (心理的な意味における自我) を維持する能力が<他者にとってその人がもつ意味の斉一性と連続性>と調和するという確信から発生するとし, 「A sense of Identity」という言葉を使っているよう

² 漸成発達理論の各発達段階の日本語訳について, 本研究では, Erikson (1959 西平・中島訳 2011) に準じて統一した。

に、具体的な行動ではなく、抽象的な「感じ方」であり、さらに無意識に感じている面も含んでいる。それに対して、質問紙では、被験者の意識的な部分しか測定できないことから、アイデンティティについて、質問紙調査だけで分析することには限界があると考えられる。

2) 面接法

量的調査では測りきれないアイデンティティ研究については、質的研究が注目される。質的研究については、2014年にAPAの新しい学術誌として“Qualitative Psychology”が刊行されている。また、APAの記事中でもDeAngelis (2013) が、Josselsonの「社会科学は、質的研究を受け入れるだけでなく、それが文脈的で、複雑で、他の手法では困難な、人々に関する事象を明らかにすることができるので、質的研究を追求し始めている。」という言葉を紹介しているように、昨今非常に注目されている領域といえる。質的研究の長所としては、対象者一人についての情報量が非常に多いこと、具体性を把握できること、行動、態度、意識の意味の把握ができること、研究者が事前に想定していなかった知見が示されることにより、新たな仮説生成の可能性があること、などがあげられ、短所としては、サンプル数の少なさ、データを直接比較することの困難さがあげられる (大野, 2014)。

質的研究で最も一般的な手法は面接法であろう。Eriksonのアイデンティティという概念を発展させたMarcia (1966) は、半構造化面接を実施して、アイデンティティ・ステータスを測る方法を考案し、個人のアイデンティティの状態を、「危機」(職業やイデオロギーに関する選択肢に関して思案した時期)と「コミットメント」(職業やイデオロギーへの積極的関与)の2つの側面から、4つのステータスに分類した。具体的には、危機を経験しコミットメントもしている「アイデンティティ達成 (Identity Achievement)」, 危機を経験しておらずコミットメントしている「早期完了 (Foreclosure)」, 危機を経験している最中でコミットメントしようとしている「モラトリウム (Moratorium)」, 何のコミットメントもしていない「アイデンティティ拡散 (Identity Diffusion)」の4類型である。Marcia の手法は、Eriksonの理論を実証的な観点から検討したという意味で大きな貢献をしており、その後、様々な修正が試みられている (Grotevant & Cooper, 1981; 杉村, 2001)。

面接法は質問に対する回答だけではなく、対象者を観察することができるため、対象者の内的世界を把握することに優れており、対象者の主観的な世界をその背景も含めて把握できることから、無意識の領域も含んだ、抽象的な「感じ方」であるアイデンティティの様相を把握するためには、有効な手法であると考えられる。しかし、1~2時間程度の面接時間

で得られる情報には限界があり、面接の時点で回顧的にとらえられる過去は現在構成された過去である、という課題が残る。

それに対して、何年にもわたって面接を実施する質的縦断研究は、多くの、変遷する情報が得られる。Josselson (1996) は女性を対象にした面接調査による縦断研究で、青年期以降のアイデンティティ・ステータスの発達プロセスについて検討し、青年期のフォークロージャリーは、親への強い愛着がそのまま保持される形での人間関係の形式の中に身を置き、そこで安定を得るという特徴を見出した。杉村 (2001) は、女子大学生31名に対して、Ego Identity Interviewを拡張した面接を、3つの時点 (3年生前期・4年生前期・4年生後期) で実施し、関係性の観点から見たアイデンティティ形成のプロセスについていくつかの実証的な証拠を提出している。また、山岸 (2005) は7年間の縦断研究で2つの時期に生育史を書かせてその変化を分析し、さらに、その後面接調査を実施して、母親認知の変化について検証している (山岸, 2009)。このような質的縦断研究は、アイデンティティの変遷をみるために大変価値があると考えられるが、長期にわたって被調査者を追いつけることが非常に困難であり、生涯にわたっての調査は実質不可能といえる。また、昨今は個人情報に対する守秘義務が厳しく求められることから、面接法そのものの制約が増えていることも事実である。

3) 伝記研究法

面接法の問題を解決する質的研究のひとつとして、伝記研究法がある。伝記研究法は、一般に歴史上の人物などの伝記資料に基づいて、その人物の生涯発達を研究する方法をいう。Eriksonは、Maxim Gorky, Adolf Hitler, William James (Erikson, 1950 仁科訳 1977), Sigmund Freud (Erikson, 1964 鱸訳 1971), Martin Luther (Erikson, 1958, 西平訳 2002), Mahatma Gandhi (Erikson, 1969 星野訳 1973), Thomas Jefferson (Erikson, 1974 五十嵐訳 1979) など、数多くの伝記資料の分析を手がけており、その後の漸成発達理論の構築に活用したと考えられる (大野, 2011)。その後、海外における伝記資料を用いた研究は、これまで少なかったが、昨今では、Josselson (2013) が、心理学者のMurrayとそのパートナーであるMorganの関係性について、2人の伝記を用いて分析を試みるなど、質的研究における伝記の有用性が注目され始めている。一方、我が国においては、西平 (1981a, 1981b, 1990, 2004) が、Erikson (1959 西平・中島訳 2011) の心理歴史的方法をモデルとして、夏目漱石、ボードレールなど、多数の人物に関する分析を行い、伝記研究の方法として、個別

分析、比較分析、主題分析の枠組みを作り上げた（西平, 1983, 1996）。その後、大野（1996）が研究手法として確立し、ベートーヴェンの自我に内在する回復力について、個別分析の手法に基づいて検証した論文を発表している。また、三好（2004）は、個別分析として、谷崎潤一郎の否定的アイデンティティ選択について検証し、さらに、比較分析として、谷崎潤一郎と芥川龍之介の有能感の比較から、有能感がアイデンティティに基づいた生産性にどのように影響するのかということについて示した（三好, 2006）。実証研究が、独立変数を統制した結果の従属変数によって仮説を立証する、行動の予測であるのに対し、伝記研究は、生育史と結末が固定されている。それをつなぐのが心理学的仮説であり、それは複数存在する。その中から蓋然性の高い解釈を見つけていく研究が伝記研究法である（大野, 2008）。

大野（2008）は伝記研究法の利点として、十分に吟味された信頼性の高さ、一人の人物についての情報量が非常に多いこと、一生涯の時間的展望の中で読み取れること、歴史的・社会的背景が明確であること、公共性が高く、守秘義務への配慮が不要であること、をあげている。これらは、面接法の欠点をクリアしており、特に、一生涯の資料が得られることは、斉一性と連続性が重要とされるアイデンティティについて理解するために大変有効な手法であると考えられる。ただし、資料の出典が明らかにされた、信頼性の高い伝記を複数用いることが必要で、分析には手間のかかる手法である。

以上のように、面接法や伝記研究法などの質的手法は、文脈的で、複雑で、他の手法では困難な事象を明らかにすることができるという長所があるが、サンプル数が少なく、特に伝記研究法は、基本的にN=1であるため、一般法則として論証するための工夫が必要であると考えられる。

4) 体系的折衷調査法

アイデンティティ形成について理解するためには、量的な指標を用いた分析と、質的な手法による文脈的分析の両方が重要であると考えられる。

Allport（1968）は多くの人に共通して測定できる共通特性から人格を研究しようという「次元的」立場と、人格共通特性がどのように組み合わせられてその人らしさを構成しているかという「形態生成的」立場の両方が重要であると述べ、その両方の方法を折衷する必要性を論じた。この立場を体系的折衷主義という（大野, 2011）。

こうした考え方を継承して久世（1978）は、青年の行動発達を予測するために、一般性を

把握する統計的方法と、個別性を把握する事例研究の 2 つの方法を交互に組み合わせて研究を進める「3 段階分析法」を提唱している。

さらに、大野（1983a, 1983b, 1984）は体系的折衷主義の考え方に基づいて、青年期の充実感について一連の研究を行いながら、量的・質的方法を交互に繰り返し知見を補完していく方法としての「体系的折衷調査法」を確立した（大野, 2011）。

体系的折衷調査法は、自我発達の領域で多数のサンプルから得た数量データを分析することにより、一般的法則性を明らかにしようとする量的研究と、個別の少数データを分析することにより、具体的な知見を明らかにしようとする質的研究の長所、短所を検討し、それを補完的に折衷することでより科学的な知見を得ようとする手法である。具体的には、質問紙調査（次元的分析）と面接調査（型態生成的分析）を用いる。まず研究テーマを測定する次元について質問紙調査を行い、次に調査協力者を高得点群、中得点群、低得点群に分類して、各群に該当する調査協力者に対して面接調査を実施することで、質問紙調査による一般性の把握が、日常の具体レベルでも妥当なものか、個別的には、研究テーマである共通特性とその人の個人特性がどのように関連し機能しているかを明らかにする。体系的折衷調査法を用いた研究としては、若原（2003）、三好（2003）、茂垣（2005）、などがあり、また、応用として、面接者の選定にクラスタ分析による分類を用いている研究もみられる（山田・岡本, 2008；藤田・岡本, 2010）。

以上のように、量的研究法と質的研究法の長所、短所を相互補完する体系的折衷調査法は、複雑かつ無意識の領域を含んだ、アイデンティティの感覚を把握するために、非常に有効な研究手法であると考えられる。ただし、先述した、面接法の限界についての課題は残されている。

4. 本研究の目的

本研究では、娘のアイデンティティ形成にポジティブな影響を与える母娘関係とネガティブな影響を与える母娘関係について分析する。特に、母娘関係は他の親子関係よりも近いとされること、昨今、母娘関係の密着が注目されていることから、結合が強い母娘関係に着目し、母親との結合の強さが娘の精神的健康に与える功罪について検証することを目的とする。そのための手法として、まず、青年期における多様な母娘関係について、娘の精神的不健康に繋がると推察される具体的関係性を測る項目を加えた尺度を作成して、母娘関係を類型化して検討する。次に、母親との結合の強かった人物について、伝記資料を用いた質

的分析を行うことで、生涯発達の視点から理解を深める。さらに、量的研究と質的研究を相互補完的に用いる体系的折衷調査法を発展させ、質問紙調査(量的研究)に、伝記研究法(質的研究)を組み合わせた新たな研究法を構築することを試みる。

5. 研究の構成と内容

本研究は、序論から全体総括までの全8章で構成される。

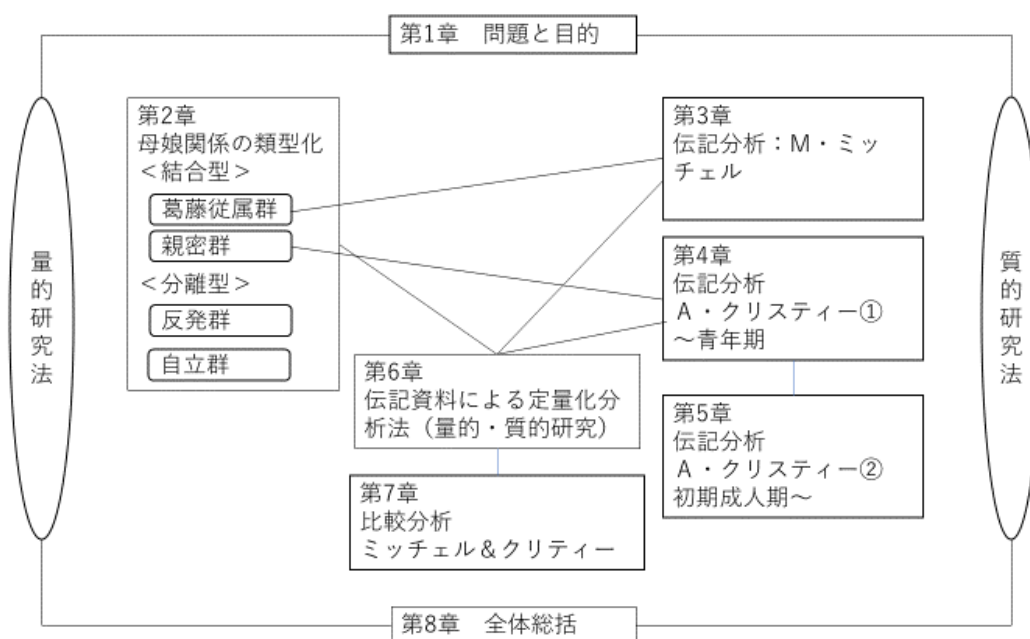


Figure 1-1 本研究の構成

以下が各章の概要である。

第1章

本研究の背景を述べるとともに、親子関係、特に母娘関係とアイデンティティ形成についての先行研究を概観した。さらに、アイデンティティ研究についての方法論を取り上げ、その特徴と課題について言及した。

第2章

母娘関係と娘のアイデンティティ形成、精神的健康との関連について、大学生の女性を対象にした質問紙調査を実施する。母娘関係を多角的に検証するために、娘の精神的不健康

に繋がると推察される具体的関係性を測る項目を加えた多次元尺度を作成し、その下位尺度を用いて母娘関係を類型化することで、娘の健康的なアイデンティティ形成を促進する母娘関係と阻害する母娘関係について、量的に検証する。

第3章

青年期に、フォークロージャーからアイデンティティ拡散にアイデンティティ・ステータスが退行した事例として、アメリカの作家、マーガレット・ミッチェルの伝記資料を用いて質的に検証し、その要因を、母娘関係の特徴から分析する。また、分析にあたっては、第2章のクラスタ分類の中で、該当すると推察される群の典型として検証し、量的研究の結果を質的研究で補完することを試みる。

第4章

母親との親密な関係を基盤にして、青年期に健康的なアイデンティティを形成した事例として、イギリスの作家、アガサ・クリスティーの母娘関係の特徴と発達の様相について、伝記資料を用いて質的に検証する。また、分析にあたっては、第2章のクラスタ分類の中で、該当すると推察される群の典型として検証し、量的研究の結果を質的研究で補完することを試みる。

第5章

アガサ・クリスティーについて、初期成人期以降の様相を伝記資料を用いて質的に検証する。生涯発達の視点から分析することで、青年期までに顕在化しなかった問題について遡及的に明らかにするとともに、親密な母娘関係が娘のアイデンティティ形成に与える功罪について検証する。

第6章

質問紙調査と面接調査を用いて、量的研究と質的研究を組み合わせる「体系的折衷調査法」(大野, 2011) の考え方にに基づき、質問紙調査と伝記研究法を組み合わせた「伝記資料定量化分析法」の構築を試みる。具体的には、第2章の質問紙調査で用いた、母娘関係尺度の各項目について、マーガレット・ミッチェル(第3章)とアガサ・クリスティー(第4章)の伝記分析の結果から、対象者が青年期に回答したと想定して評定し、その結果を、クラスタ分析で得られた4群と比較して、該当する群を推定するという手法を試みる。質的データを定量化することで、量的手法と質的手法を連携させることが可能になると考えられる。

第7章

マーガレット・ミッチェルとアガサ・クリスティーの個別分析を受けて、さらに分析を進

める、伝記分析の枠組みとしての比較分析を行う。具体的には、青年期のアイデンティティの様相の違いを生んだ母娘関係について比較することで、母娘関係が娘のアイデンティティ形成に与える影響について検証する。また、比較に際して、第6章で評定した数値を用いることで、比較分析の蓋然性を高める。

第8章

本研究における研究知見を総括し、娘のアイデンティティ形成に母娘関係が与える影響について考察する。最後に、本研究の理論的、方法論的可能性と課題について述べる。

第2章 母娘関係尺度の作成とクラスタ分析による母娘関係分類³

母娘関係を多角的に検証するための多次元尺度を作成し、大学生の女性を対象にした質問紙調査を実施する。その結果を用いて母娘関係を類型化し、母娘関係の分離と結合の様相を明らかにすることで、娘の健康的なアイデンティティ形成を促進する母娘関係と阻害する母娘関係について検証する。

1. 問題と目的

Erikson (1959 西平・中島訳 2011) は漸成発達理論において、青年期は親への依存から脱して自立した成人になる時期であり、発達的にはアイデンティティの獲得が重要なテーマになるとした。また、アイデンティティは青年期だけの問題ではなく、それまでの各発達段階の主題の肯定的方向での解決が、後の発達段階の主題の解決に肯定的に働くとし、特に、永続するアイデンティティは、最初の乳児期の基本的信頼感がなくてはそもそも存在することができない、と述べている。つまり、児童期までは、基本的信頼感をベースに、親との結合の中で各発達段階の主題の解決に取り組むと考えられるが、青年期になると、成人として親から自立した存在になろうとするために、親との分離という問題が生じてくると考えられる。

したがって、青年期において、幼少期から築いてきた「親との結合」（以下、結合）と、独立した個人になるための「親からの分離」（以下、分離）がどのように機能するのかについて多角的に検証することは、親子関係がアイデンティティ形成に与える影響をみるために有意義であると考えられる。特に、基本的信頼感の獲得に最も影響を与えるとされる母親との関係性 (Erikson, 1959 西平・中島訳 2011) を分析することは重要であろう。

そこで本章では、親子関係の中でも、相互依存と情緒的結びつきが他のどの関係より見られ (Fischer, 1991) , 心理的距離が近い (高木・柏木, 2000) とされる母娘関係を対象にし、その関係性の具体的な影響を把握するために、娘のアイデンティティの様相、および精神的健康との関連について分析する。母親との関係において、息子の場合は愛着 (結合) が

³ 本章は下記の論文の内容をもとに加筆・修正を行ったものである。
赤木真弓 (2018) . 母娘関係が娘のアイデンティティ形成と精神的健康に与える影響—母娘関係尺度の作成を通して—発達心理学研究, 29(3), 114-124.

ジェンダーアイデンティティ獲得の妨げになるのに対し、娘の場合は母親を最初のロールモデルとし、その愛着関係から「女性性」を獲得することになり、分離が妨げとなるとされる（Gilligan, 1993）。また、Chodorow（1978 大塚・大内共訳 1981）は「女の子が母親に同一化し、同一化するよう期待されるのは、大人の性役割を学ぶためであり、同時に女の子は成長して自己を独立した個人として感じるに十分なだけ分化しなければならない」とし、そこにアンビバレントな状況があることを示した。橋本（2000）も「娘は個としてのアイデンティティを手に入れるためには母との同一化から脱しなければならないが、性同一性を確立するためには母との同一化が不可欠という難しさをはらんでいる」としている。つまり、娘はその葛藤の中で自立を模索する難しさに直面することになると考えられる。

このような母娘関係と娘の自立、アイデンティティ形成について類型化して検討することは、より具体的な人格を把握するために有効な手法であると考えられる。水本・山根（2011）は、女子大学生を対象にした調査で「母子関係における精神的自立尺度」を作成した。この尺度は「母親との信頼関係」と「母親からの心理的離乳」の2つの下位尺度からなり、前者が母親との結合を、後者が母親からの分離を測定していると考えられる。水本・山根（2011）はこれらの下位尺度を2軸として、娘が捉える母親との関係を「密着型」「依存葛藤型」「母子関係疎型」「自立型」に類型化する「母子関係4類型モデル」を提唱している。このモデルは、母子関係を分離と結合の組み合わせによって分析できるという点で特徴が理解しやすく、分離と結合の両方が高い「自立型」は自尊感情、自律性、主体的自己が高いという結果になっている。水本・山根（2011）はさらに、各類型とアイデンティティ・ステータスとの関係を分析し、分離と結合の両方が高い「自立型」に加え、結合が低く、分離が高い「母子関係疎型」も、予測と異なりアイデンティティ達成のステータスを示したことから、母親からの心理的離乳が自我の発達と関連する指標であるとしている。しかし、母親との結合がアイデンティティ形成に関連しないととらえることには疑問が残る。分離と結合の健康な側面の高低だけで分析していることによる限界といえるであろう。

母娘関係の不健康な側面については、マーガレット・ミッチェルの伝記分析（第3章）のための事前分析から、母親への強い従属、母親からの押しつけ、および母親への劣等感を感じていることが、娘のアイデンティティ形成にネガティブな影響を与える可能性が見出された。それを現代の一般青年に当てはめて検証することは有効であると考えられる。しかし、従来の研究では、そのような、精神的に不健康に関連すると考えられる具体的な関係性を測定する尺度が作成されていない。

そこで本章では、母親との分離、結合について多角的にとらえるために、母親からの押しつけや母親に対する劣等感などの精神的不健康に繋がると推察される項目を加えた多次元尺度を作成して母娘関係を検討する。

次に、Erikson (1959 西平・中島訳 2011) の漸成発達理論においては、生涯発達が8段階に分類され、各発達段階ごとに固有の発達主題が漸成発達理論図 (epigenetic chart) の対角線上に示されている。これは、それぞれの発達段階が次の発達段階の基礎になり、前の段階の主題を解決することで活力が生まれ、次の段階に進む準備が整い、次の段階の活力が生成しやすくなる、ということを示しているにとらえられる (三好, 2011)。したがって、第1～第4段階の主題の達成度が第5段階 (青年期) のアイデンティティ統合に大きな影響を及ぼすと考えられる。

そこで本章では、第1～第5段階の「基本的信頼感」「自律性」「自主性」「勤勉性」「アイデンティティ」の達成度をOchse & Plugが作成した質問紙の日本語短縮版 (以下、S-ESDS ; 三好他, 2003) を用いて測定する。

さらに、精神的健康を測定するため、まず、Rosenbergの自尊感情尺度邦訳版 (山本・松井・山成, 1982) を用いる。自尊感情について、三好他 (2003) は、各発達段階の達成度との関連を示し、また、水本・山根 (2011) は、娘の自尊感情と母親との信頼関係に関連性を見出している。次に、青年期の信頼感とは、「基本的信頼感」にその基礎が形作られると考えられるが、青年期の感情に焦点を当てた信頼感を測定するために、基本的信頼感に属する項目を除外した「信頼感尺度」 (天貝, 1993) を用いることとする。この尺度は「自分への信頼」「他人への信頼」「不信」の下位尺度からなる。さらに、主体的ではなく「～すべき」という縛られた志向性を測るために、超自我型・自我理想型尺度の下位尺度「べきの専制」 (茂垣, 2005) を用いる。Herney (1950) は「べきの専制」を“～すべき”という観念にとらわれ頑なになることであり、精神的不健康さと関連するとしている。また、茂垣 (2007) は「べきの専制」の強い娘は、母親に対して肯定と否定のアンビバレンツな感覚を示すという興味深い結果を見出している。最後に、他者からの否定的評価に対する恐れを測定するために、Fear of Negative Evaluation Scale日本語短縮版 (以下、FNE ; 笹川他, 2004) を用いる。FNEは社会不安研究で頻りに用いられる尺度であるが、加えてKoydemir-Özden & Demir (2009) は親の厳格さ・管理はFNEの高さに関連するとして、親の影響を示唆している。そこで、本研究では、自尊感情、自分への信頼、他人への信頼の得点が高いことを精神的健康とし、不信、べきの専制、FNEが高いことを精神的不健康として検証していくこと

とする

以上のことから、本章では、母娘関係について、娘の精神的不健康に繋がると推察される具体的関係性を測る項目を加えた多次元尺度を作成して、クラスタ分析によって母娘関係を類型化することを第 1 の目的とし、母娘関係の分離と結合の様相を分析することを第 2 の目的とする。3 番目に、マーガレット・ミッチェルの伝記分析のために事前に実施した資料分析から導き出された、「母親との関係において従属、押しつけ、劣等感を感じることは、娘のアイデンティティ形成、精神的健康にネガティブな影響がある」という仮説を検証することを目的とする。

2. 方法

1) 調査対象

首都圏4年制大学生の女性。有効回答数の299名（平均年齢は19.43歳、 $SD=1.11$ ）を分析対象とした。調査には男性（180名）も含まれていたが、今回は母親と娘の関係进行分析するため、女性のデータのみを用いた。

2) 手続き

2016年7月、授業中に質問紙を配布し教示を行い、その場で回答を求めた。

3) 尺度

① 母娘関係尺度

母娘関係を測定するために「母親関係尺度」（藤原・伊藤, 2007）の下位尺度「母への支え」「過去の対立・葛藤」「母の支配」「母への信頼」「母への依存」、 「母子関係における精神的自立尺度」（水本・山根, 2011）の下位尺度「母親との信頼関係」「母親からの心理的分離」などを参考にしながら、精神的不健康に繋がると考えられる具体的な関係性に関する項目を追加して、独自に項目を作成し、予備調査⁴の結果と青年心理学、生涯発達心理学を専門とする心理学研究者4名による検討を経て、25項目を用いた。さらに、後述の因子分析の結果採用された21項目を母娘関係尺度とした（Table 2-1）。

⁴ 赤木（2016, 未発表）の修士論文で実施。

② 発達主題の達成度

漸成発達理論における、第1～第5段階の発達主題の達成度を測定するために、S-ESDS（三好他, 2003）を用いた。測定結果は回答時の発達主題の達成度（以下達成）を示すが、Erikson（1959 西平・中島訳 2011）は、発達における各発達段階の主題の肯定的方向での解決が、後の発達段階の主題の解決に肯定的に働くということから、第1～第4段階の達成度が第5段階（青年期）のアイデンティティ統合に大きな影響を及ぼすとしている。第1段階「基本的信頼感 対 基本的不信」（以下，“基本的信頼感”）は「私の未来は明るいと思う」など7項目、第2段階「自律 対 恥と疑惑」（以下，“自律性”）は「私は必要以上に人に申し訳ないような気がする（逆転項目）」など7項目、第3段階「自主性 対 罪の意識」（以下，“自主性”）は「自分の望みをかなえるためなら、あえて冒険してもよい」など7項目、第4段階「勤勉 対 劣等感」（以下，“勤勉性”）は「自分に能力があると思う」など7項目、第5段階「アイデンティティ達成 対 アイデンティティ拡散」（以下，“アイデンティティ”）は「私は、私であることに誇りを感じている」など7項目から構成される。

< 精神的健康を測定する人格関連項目 >

③ 自尊感情

「Rosenbergの自尊感情尺度邦訳版」（山本他, 1982）を用いた。この得点が高いほど、自己を肯定的にとらえ、高く評価していることを示す。「少なくとも人並みには、価値ある人間である」など10項目から構成される。

④ 信頼感

「信頼感尺度」（天貝, 1995）を用いた。この尺度は「自分への信頼」（項目例：「私は、自分自身を、ある程度信頼できる」）、「他人への信頼」（項目例：「一般的に、人間は信頼できるものだと思う」）、「不信」（項目例：私はなぜか人に対して疑り深くなってしまう）の3つの下位尺度からなる合計18項目で構成される。

⑤ べきの専制

「～すべき」という縛られた志向性を測るために、超自我型・自我理想型尺度の下位尺度「べきの専制」（茂垣, 2005）を用いた。この尺度は「私は自分の中に『こうしなければいけない』という声にしたがって生きている」など5項目から構成される。

⑥ 否定的評価に対する不安

「FNE日本語短縮版」（笹川他, 2004）を用いた。日本版FNE（石川他, 1992）は他者からの否定的評価に対する不安を測定する尺度で1因子30項目から構成されている。日本語短縮版は「自分がどんな印象を与えているのかいつも気になる」など12項目から構成されている。

以上について、非常にそうだ=5, かなりそうだ=4, どちらとも言えない=3, あまりそうではない=2, まったくそうではない=1, の5件法で回答を求めた。

3. 結果

1) 母娘関係項目の因子分析

母娘関係項目に関しての因子分析（最尤法, プロマックス回転）を実施した。固有値の減衰状況および因子解釈の概念的妥当性から, 5因子が妥当であると考えられた。因子負荷量が.30に満たない項目, および複数の因子に高い負荷量を示した項目を削除して21項目を採用し, 再度因子分析（最尤法, プロマックス回転）を行った結果をTable 2-1に示した。なお, 回転前の累積寄与率は61.48%であった。項目内容から, 第1因子を母親の人としての温かさや能力に対する肯定的な評価を示す因子として「母への肯定的評価（以下, “肯定的評価”）」（項目例: 「私は母を誇りに思う」）と命名した。第2因子は母親への従属度合いの認識を示す因子として「母への従属（以下, “従属”）」（項目例: 「私は何かを決めなければならない時, 母の意見に従ってきた」）と命名した。第3因子は, 柔軟性に欠ける母親からの押しつけを感じることにについての認識を示していた（項目例: 「母は自分の考えを押しつけることが多い」）。そのため「母からの押しつけ（以下, “押しつけ”）」と命名した。第4因子は母親に対する劣等感を示す因子として「母への劣等感（以下, “劣等感”）」（項目例: 「私は母に対してしばしば劣等感を感じる」）と命名した。第5因子は母親との親密さを示す因子として「母との親密な関係（以下, “親密な関係”）」（項目例: 「私は母に何でも話せると感じる」）と命名した。

なお, Table 2-1に示した21項目を母娘関係尺度と呼ぶ。

Table 2-1

母娘関係尺度の因子分析結果

	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
第1因子: 母への肯定的評価					
私は母を誇りに思う	.91	.02	-.04	.02	-.01
母は愛情豊かな人だ	.90	-.08	.18	-.07	.13
私は母を尊敬している	.86	.03	-.11	.05	-.05
母は思いやりがある	.82	-.05	-.08	-.02	.00
母は私をいつも気にかけてくれた	.77	-.12	.21	-.13	.12
母は優れた人間だと思う	.75	.15	-.08	.11	-.10
母は温かみのある人だ	.73	-.03	-.01	-.02	.15
母は立派な生き方をしている	.69	.08	-.18	.02	-.16
第2因子: 母への従属					
私はこれまで母にずっと従順だった	-.03	.87	-.10	.01	-.13
私は何かを決めなければならない時、母の意見に従ってきた	.06	.76	.15	-.20	.14
私は生き方について、自分の意見より母の意見を優先してきた	-.09	.70	.09	.01	.14
母に否定されると不安になる	.08	.50	-.07	.17	.05
第3因子: 母からの押しつけ					
母は自分の考えを押し付けることが多い	-.02	.21	.69	.04	-.04
母は柔軟性に欠ける	-.09	-.01	.69	-.08	-.01
私は母を重荷に感じることもある	.07	.02	.61	.16	-.16
母の言うことは間違っていることが多い	-.06	-.11	.60	.11	.00
第4因子: 母への劣等感					
私は多くの点で母に引け目を感じる	.09	-.03	.06	.83	-.03
私は母に対してしばしば劣等感を感じる	-.08	-.08	-.01	.70	.18
私は母を見ていると自信を失う	-.08	.07	.17	.60	.00
第5因子: 母との親密な関係					
私は母によく相談をした	.08	.12	-.01	.07	.73
私は母には何でも話せると感じる	.08	.03	-.26	.12	.63

因子間相関

	因子1	因子2	因子3	因子4
因子2	.22			
因子3	-.58	.20		
因子4	-.08	.41	.25	
因子5	.56	.20	-.38	-.17

2) 基本統計量

母娘関係尺度の下位尺度, および発達・人格関連尺度の α 係数, 平均値, 標準偏差を Table 2-2 に示す。また, α 係数からすべての尺度に十分な信頼性が示された ($\alpha = .74 \sim .94$)。

Table 2-2

	α	M	SD
母への肯定的評価	.94	4.13	0.79
母への従属	.80	2.60	0.90
母からの押しつけ	.80	3.07	0.95
母への劣等感	.76	2.34	1.04
母との親密な関係	.79	3.60	0.90
基本的信頼感	.77	3.20	0.65
自律性	.79	2.85	0.72
自主性	.74	3.16	0.65
勤勉性	.80	2.97	0.67
アイデンティティ	.74	3.00	0.63
自尊感情	.87	2.87	0.67
自分への信頼	.82	3.40	0.68
他人への信頼	.79	3.50	0.61
不信	.81	2.90	0.80
べきの専制	.80	3.02	0.76
FNE	.92	3.47	0.75

* 下位尺度の項目の平均値の合計を項目数で割った値

各尺度の α 係数と平均値* (SD)

3) 相関分析

母娘関係尺度の下位尺度間相関と発達・人格関連尺度との相関については Table 2-3 に示した通りである。その中で特徴的なことは「肯定的評価」と「親密な関係」に正の相関 ($r = .606, p < .001$), 「劣等感」と「押しつけ」に正の相関 ($r = .404, p < .001$) があったこと, さらに「肯定的評価」と「親密な関係」は, 「基本的信頼感」, 「自律性」, 「勤勉性」, 「アイデンティティ」, 「自尊感情」, 「自分への信頼」と正の相関を示したのに対し, 「劣等感」と「押しつけ」は同様の下位尺度に負の相関を示したことである。一方, 「従属」は全ての母娘関係尺度の下位尺度と強い正の相関 (「肯定的評価」 $r = .209$; 「押しつけ」 $r = .450$; 「劣等感」 $r = .331$; 「親密な関係」 $r = .289$, いずれも $p < .001$) があったが, 発達・人格関

連下位尺度とは有意な相関係数の数が少なかった。これは、従属が高い場合に、発達、人格的な健康さに関連する尺度の得点が高い群と得点が低い群が同程度に存在する結果と考えられ、このことから母親への従属には、能動的従属と受動的従属が存在するのではないかと推察される。

Table 2-3

母娘関係尺度の下位尺度間相関と発達・人格関連尺度との相関

	肯定的評価	従属	押しつけ	劣等感	親密な関係
母への肯定的評価					
母への従属	.209 ***				
母からの押しつけ	-.387 ***	.450 ***			
母への劣等感	-.115 *	.331 **	.404 ***		
母との親密な関係	.606 ***	.289 ***	-.293 ***	-.019	
基本的信頼感	.339 ***	-.084	-.350 ***	-.263 ***	.241 ***
自律性	.255 ***	-.147 *	-.373 ***	-.227 ***	.226 ***
自主性	.281 ***	-.056	-.143 *	-.058	.131 *
勤勉性	.284 ***	-.169 **	-.330 ***	-.250 ***	.221 ***
アイデンティティ	.293 ***	-.140 *	-.394 ***	-.299 ***	.263 ***
自尊感情	.261 ***	-.105	-.332 ***	-.286 ***	.232 ***
自分への信頼	.364 ***	-.039	-.234 ***	-.214 ***	.230 ***
他人への信頼	.402 ***	.062	-.163 **	-.127 *	.242 ***
不信	-.254 ***	.141 *	.380 ***	.366 ***	-.172 **
べきの専制	-.037	.256 ***	.201 ***	.092	.068 **
FNE	-.037	.162 **	.248 ***	.073	-.096

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

4) クラスタ分析

母親と娘の関係における多様性を分析するために、母娘関係尺度の下位尺度を用いてクラスタ分析を行った。各下位尺度の合計得点を平均 0、標準偏差 1 の標準得点に変換した上で、平方ユークリッド距離を元にしたクラスタ分析 (Ward 法) を行い、クラスタの特徴を最もよく表す 4 クラスタを採用した。さらに、各クラスタの尺度得点の平均値と標準偏差、尺度得点の標準得点について、クラスタ間での分散分析を行った結果の F 値、効果量 (η^2)、および Tukey の HSD 法による多重比較の結果を Table 2-4 に示した。クラスタ分析に投入した母娘関係尺度の下位尺度はすべて $p < .001$ で有意差がみられ、発達・人格関連尺度は「自主性」と「FNE」が $p < .05$ 、他は $p < .001$ の有意差がみられた。

さらに、各クラスタの特徴をみるためのプロフィールを Figure 2-1 に示す。1 群は他群に比べ「肯定的評価」と「親密な関係」が有意に低く、2, 3 群に比べ「押しつけ」と「劣等感」が有意に高かった。これにより、1 群を母親のプレッシャーを感じつつ、母親を否定し、離反しようとしている「反発群」と命名した。2 群は他群と比較して「親密な関係」が有意に高く、「肯定的評価」は3 群とは有意差がなく、1, 4 群より有意に高かった。さらに「従属」が1, 3 群より有意に高いことから、2 群を、母親を高く評価し、母親と親密な関係を持って従属している「親密群」と命名した。3 群は「肯定的評価」が2 群と並んで高いが、「親密な関係」は2, 4 群より有意に低く、「従属」「押しつけ」「劣等感」が他群に比べて有意に低いことから、母親を評価しつつも母親から分離している「自立群」と命名した。4 群は「従属」「押しつけ」「劣等感」が他群に比べて有意に高かった。一方、「肯定的評価」は1 群より有意に高いが、2, 3 群より有意に低く、中程度の結果となった。同様に「親密な関係」は1, 3 群より有意に高いが、2 群より有意に低く、中程度の結果となった。これにより4 群を、母親に対する評価や親密さよりも、母親からの押しつけや母親への劣等感の強さによって母親に従属している「葛藤従属群」と命名した。各群の割合は「反発群」が 23.7%、「親密群」が 40.2%、「自立群」が 16.1%、「葛藤従属群」が 19.9%であった。

次に、発達主題の達成度を測定する S-ESDS の尺度（基本的信頼感、自律性、自主性、勤勉性、アイデンティティ）、および人格関連の尺度（自尊感情、自分への信頼、他人への信頼、不信、べきの専制、FNE）についてみると、「基本的信頼感」「自律性」「勤勉性」「アイデンティティ」「自尊感情」「自分への信頼」は、「親密群」と「自立群」がそれぞれ「反発群」および「葛藤従属群」より有意に高くなった。また、「他人への信頼」は「反発群」が他群より有意に低く、「べきの専制」は「葛藤従属群」が他群より有意に高かった。さらに「FNE」は「葛藤従属群」が「自立群」より有意に高かった。また、S-ESDS の第 1～第 4 段階の主題達成の得点が高い「親密群」と「自立群」は、第 5 段階のアイデンティティが高く、一方、第 1～第 4 段階の主題達成の得点が低い「反発群」「葛藤従属群」はアイデンティティが低いことから、第 1～第 4 段階の主題の達成度が第 5 段階のアイデンティティ統合に大きな影響を及ぼす（1959 西平・中島訳 2011）ことが示された（Table 2-4）。以上の、各クラスタの発達・人格関連のプロフィールを Figure 2-2 に示した。

Table 2-4
各クラスタの比較検討

	1.反発群 <i>n</i> =69		2.親密群 <i>n</i> =117		3.自立群 <i>n</i> =47		4.葛藤従属群 <i>n</i> =58		F 値	η^2	多重比較
	<i>M</i>	(<i>SD</i>)	<i>M</i>	(<i>SD</i>)	<i>M</i>	(<i>SD</i>)	<i>M</i>	(<i>SD</i>)			
<母娘関係尺度>											
母への肯定的評価	3.06	(0.63)	4.58	(0.39)	4.53	(0.46)	4.22	(0.47)	157.82***	.39	1<4<2,3
母への従属	2.71	(0.69)	3.15	(0.69)	2.11	(0.60)	4.11	(0.53)	92.84***	.24	3<1<2<4
母からの押しつけ	3.29	(0.61)	2.42	(0.43)	1.96	(0.59)	3.81	(0.54)	152.29***	.38	3<2<1<4
母への劣等感	2.68	(0.73)	2.15	(0.69)	1.67	(0.74)	2.84	(1.06)	25.43***	.05	3<2<1,4
母との親密な関係	2.52	(0.86)	4.39	(0.57)	3.15	(1.14)	3.62	(1.09)	72.56***	.19	1<3<4<2
基本的信頼感	2.95	(0.61)	3.37	(0.54)	3.43	(0.76)	2.97	(0.64)	12.07***	.01	1,4<2,3
自律性	2.61	(0.62)	3.03	(0.68)	3.12	(0.82)	2.52	(0.61)	12.35***	.01	4,1<2,3
自主性	3.01	(0.57)	3.18	(0.58)	3.38	(0.81)	3.09	(0.68)	3.28*	.00 a)	1<3
勤勉性	2.82	(0.54)	3.10	(0.63)	3.27	(0.80)	2.68	(0.58)	10.64***	.01	4,1<2,3
アイデンティティ	2.78	(0.52)	3.21	(0.56)	3.23	(0.78)	2.67	(0.53)	16.69***	.02	4,1<2,3
自尊感情	2.70	(0.57)	3.04	(0.61)	3.07	(0.76)	2.56	(0.64)	9.96***	.01	4,1<2,3
自分への信頼	3.08	(0.68)	3.59	(0.58)	3.57	(0.71)	3.27	(0.70)	10.52***	.01	1,4<2,3
他人への信頼	3.17	(0.56)	3.64	(0.51)	3.67	(0.70)	3.51	(0.58)	11.14***	.01	1<2,3,4,
不信	3.22	(0.68)	2.64	(0.73)	2.63	(0.89)	3.22	(0.74)	14.64***	.02	2,3<1,4
べきの専制	2.93	(0.75)	2.98	(0.77)	2.83	(0.67)	3.31	(0.77)	4.29***	.00 b)	1,2,3,<4
FNE	3.48	(0.60)	3.43	(0.73)	3.29	(0.96)	3.72	(0.71)	3.25*	.00 c)	3<4

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

a) 多重比較における効果量 $d = .45(1 \times 3)$, b) $d = .49(1 \times 4)$.43(2×4) .67(3×4), c) $d = .52(3 \times 4)$

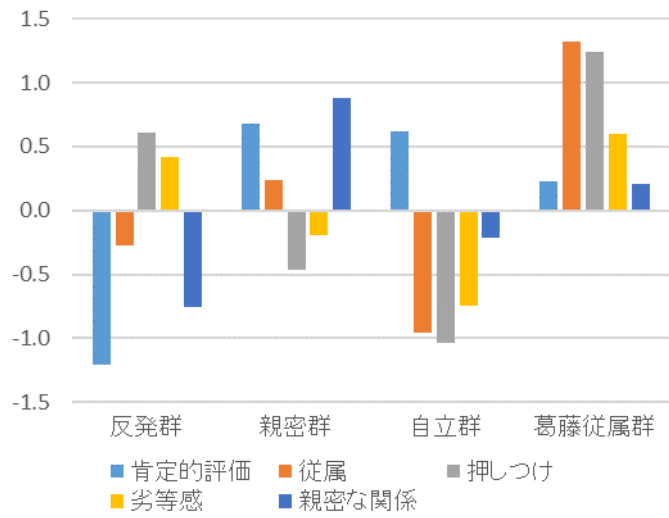


Figure 2-1 クラスタ別プロフィール

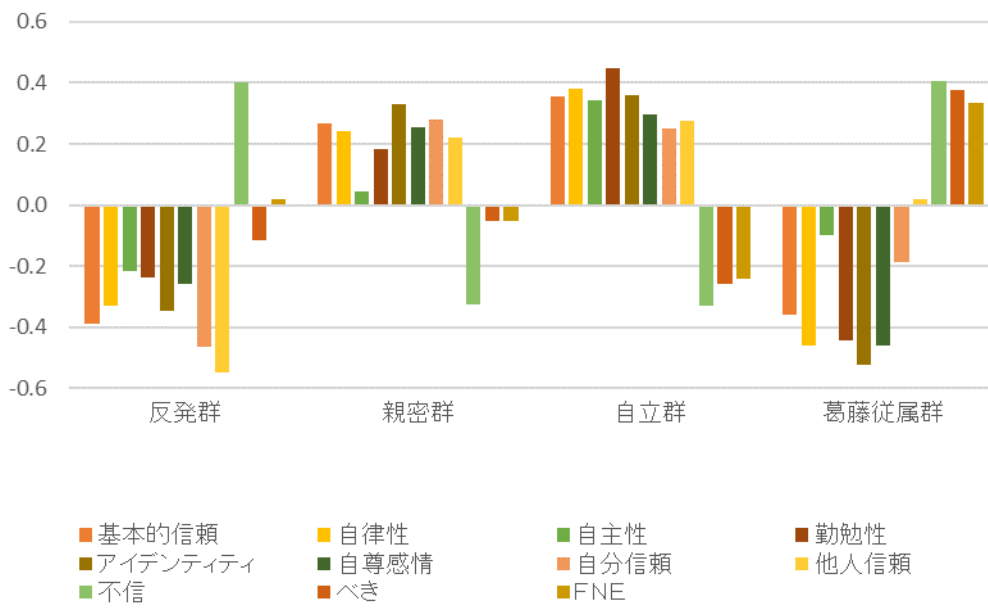


Figure 2-2 クラスタ別発達・人格関連プロフィール

4. 考察

相関分析の結果、母娘関係尺度の下位尺度のうち、強い正の相関があった「肯定的評価」と「親密な関係」はどちらも娘の健康な発達、人格形成との関連がみられた。同様に強い正の相関があった「押しつけ」と「劣等感」はどちらも娘の不健康な発達、人格形成との関連がみられた。一方、「従属」は他の母娘関係尺度の下位尺度とすべて強い正の相関を示す一方で、発達・人格関連尺度との有意な相関が少ないという特徴的な結果となった。このことは、母親への従属に能動的従属と受動的従属が存在する可能性を示唆している。

そこで、母娘関係の質的な特徴をさらに検証するために母娘関係尺度の下位尺度を用いてクラスタ分析を行った結果、「反発群」「親密群」「自立群」「葛藤従属群」の4つのクラスタに分類された。「反発群」は押しつけ、劣等感が高く、肯定的評価、従属、親密な関係が低いことから、母親を否定し、母親と距離を置いていると考えられる。「親密群」は肯定的評価、従属、親密な関係が高く、押しつけ、劣等感が低いことから、高く評価している母親と非常に親密な関係を維持し、能動的に従属していると考えられる。「自立群」は肯定的評価が高く、従属、押しつけ、劣等感、親密な関係が低いことから、母親を評価しつつも適度な距離感を保ち、自立していると考えられる。最後に「葛藤従属群」は肯定的評価、親密な関係がやや高いが、一方で、従属、押しつけ、劣等感が非常に高いことから、母親との関係において葛藤を抱えていると考えられる。

以上のことから、まず、「従属」と「親密な関係」の2指標の両方が低かった「自立群」と「反発群」は母親との分離が高い群と考えられる。両群を精神的健康の観点に着目して分析すると、「自立群」は、押しつけ、劣等感が非常に低く、自尊感情、信頼感が高いことから、健康な分離タイプと考えられる。一方、「反発群」は母親を否定し、母親と距離を置いているにもかかわらず劣等感が高いという点に矛盾が見られる。また、自尊感情、信頼感が低いことから、「反発群」は劣等感を振り払うための逃避的で不健康な分離タイプと考えられる。

次に、「従属」と「親密な関係」の2指標の両方が高かった「親密群」と「葛藤従属群」は母親との結合が高い群と考えられる。両群を精神的健康の観点に着目して分析すると、「親密群」は、押しつけや劣等感が低いこと、さらに自尊感情、信頼感が高いことから、健康な結合タイプと考えられる。一方、「葛藤従属群」は、押しつけと劣等感による強迫的な従属が窺われ、自尊感情、信頼感が低く、べきの専制、FNEが高いことから、不健康な結合タイプと考えられる。

ちなみに、相関分析で推察した 2 種類の従属については、「親密群」が能動的従属、「葛藤従属群」が受動的従属に該当すると考えられる。

さらに、各群のアイデンティティの様相をみると、「自立群」と「親密群」は、アイデンティティ達成が高かった。両群は分離タイプと結合タイプで母娘関係の在り方は異なるが、精神的に健康である点で共通している。逆に、アイデンティティ達成が低かったのは「反発群」と「葛藤従属群」であった。この両群も分離タイプと結合タイプで母娘関係の在り方は異なるが、精神的に不健康であるという点で共通している。

本研究の分類を、母親との分離と結合という観点で水本・山根（2011）の分類と比較した結果を Table 2-5 に示す。分離が低く、結合が高いのは本研究の「親密群」と水本・山根の「密着群」であった。本研究では、アイデンティティ・ステイタスを測定していないが、母親に能動的な従属をしている「親密群」は、フォークロージャーである可能性が高いと考えられる（第 5 章では、親密群の典型と考えられるクリスティーがフォークロージャーとして、高いアイデンティティの感覚を示している）。したがって、水本・山根の「密着群」とアイデンティティの様相は似ていると考えられる。逆に、分離が高く結合が低いのは、本研究の「反発群」と水本・山根の「母子関係疎型」であったことから、同じ分類と考えられるが、アイデンティティについては、「反発群」が低かったのに対し、「母子関係疎型」はアイデンティティ達成ステイタスを示していた。

次に、水本・山根（2011）が分離、結合ともに高い「自立型」、分離、結合ともに低い「依存葛藤型」を見出しているのに対し、本研ではどのクラスタも分離か結合の片方が高くなるという結果となった。これは、水本・山根が分離と結合について、健康的な側面だけを測定しているのに対し、本研究では、不健康な側面も測定している違いによるものと考えられる。本研究の「自立群」の結合の低さは、不健康な結合に繋がると考えられる「従属」「押しつけ」「劣等感」という項目が低いことが原因であると考えられ、水本・山根の「自立群」についても、不健康な結合は低くなる可能性があるだろう。また、水本・山根の「依存葛藤型」の結合は低かったが、愛着類型では「恐れ型」が多いという結果になっていることから、回避しつつも、依存的親密性を求めているものも多いと分析しており（水本・山根, 2011）、これは不健康な結合をうかがわせる。

さらに、水本・山根は 分離、結合ともに高い「自立型」と分離が高く結合が低い「母子関係疎型」がアイデンティティ達成ステイタスを示したことから、心理的分離（分離）が自我の発達と関連する指標であるとしているが、母親との健康的な結合(信頼関係)の高低が自我

発達に関連しないという解釈には疑問が残る。本研究では分離が高くても、押しつけや劣等感を強く感じている場合（「反発群」）はアイデンティティ達成が低く、逆に分離が低くても、押しつけや劣等感を感じていない場合（「親密群」）はアイデンティティ達成が高いことが示された。母娘関係を具体的に捉えることで、分離と結合の健康さと不健康さを含んだ検証をすることができ、より包括的な分析が可能になったと考えられる。

Table 2-5

水本類型との比較

タイプ	分離	結合	精神的健康	アイデンティティの様相
赤木 親密群	×	○	健康	アイデンティティ高群
水本 密着型	×	○	—	フォークロージャー
赤木 葛藤従属群	×	○	不健康	アイデンティティ低群
水本 依存葛藤型	×	×	—	拡散
赤木 反発群	○	×	不健康	アイデンティティ低群
水本 母子関係疎型	○	×	—	アイデンティティ達成
赤木 自立群	○	×	健康	アイデンティティ高群
水本 自立型	○	○	—	アイデンティティ達成

* アイデンティティの様相については、赤木はアイデンティティ達成の高低で水本はアイデンティティ・ステータスで測定している。

さらに、分離と結合が対立概念ではないという点で、本研究の結果は「統合モデル」（平石, 2014）と共通すると考えられる。「統合モデル」では分離と結合のバランスが重要であるとされているが、本研究では、個人によって分離か結合のいずれかが優勢となり、いずれの場合も、それが健康的であればアイデンティティ達成に繋がる、という具体的な結果を導き出すことができた。また、両方が高いタイプが見出されなかったことは、母娘関係における分離と結合にアンビバレントな部分がある（Chodorow, 1978 大塚・大内共訳 1981）ことを示しているといえるだろう。

最後に、各群をさらに多角的に分析する。

はじめに、「自立群」は健康な分離タイプと考えられるが、基本的信頼感が高く、母親を肯定的に評価し、親密な関係もやや低い程度であることから、健康な結合も中程度みられると考えられる。次に、「親密群」は健康な結合タイプと考えられるが、従属が平均より高く、また、精神的な不健康を測る指標である、べきの専制、FNEがそれほど低くなかったこ

とから、結合の不健康な側面である依存傾向（渡邊, 2004）が含まれている可能性が示唆される。つまり、どちらも健康な特徴を示した「自立群」と「親密群」であるが、この2つを比較すると、分離が発達的变化であるのに対して、結合が幼少期から築かれた比較的安定して変化しにくい指標である（水本・山根, 2011）ことによる影響がみられる。つまり、「自立群」は幼少期からの健康な「結合」を基盤に青年期に分離するために、依存のような「結合」の不健康な面は生まれにくく、健康な自我発達が進行すると考えられる。それに対して「親密群」は幼少期から築かれた母親との信頼関係を維持し、その安心感の中で自我形成が進行するため、分離の傾向が生まれにくく、逆に依存のような「結合」の不健康な面が生まれる可能性がある。「親密群」は本研究の結果で最も人数が多く、その特徴は昨今増加しているとされる一卵性母娘（信田, 2008）と言われるような仲よし母娘に合致すると考えられるが、もし不健康な結合がその後拡大すれば、娘の自立を妨げる可能性もあるだろう。

さらに、「反発群」は不健康な分離タイプと考えられるが、母親を評価せず、親しくないと思っているにもかかわらず、押しつけや劣等感を感じていることから、母親から分離しきれないジレンマを抱えていると考えられる。

最後に、「葛藤従属群」は不健康な結合タイプと考えられるが、従属が非常に高いことに比べると肯定的評価、親密な関係はやや高い程度であることから、従属しているものの、母親の圧力から逃げようとする分離への希求があると考えられる。この状態が続けば、大人になっても心の中を支配するインナーマザー（斉藤, 2004）のように、成人期以降も娘にとって大きな葛藤に繋がる可能性があるであろう。

以上のように、母娘関係と娘のアイデンティティ形成、精神的健康との関連を検証するにあたり、健康な側面だけでなく、不健康な側面も含めて分析することによって、分離や結合を状態としてとらえるだけではなく、その質に目を向けることが可能になり、より多面的で包括的な検証に繋がったと考える。

具体的には、娘のアイデンティティ形成、精神的健康に影響するのは、母親からの押しつけと、母親への劣等感であり、両方が低い場合は、母親との結合と分離のどちらが強くても、健全なアイデンティティ形成、精神的健康に繋がり、逆に両方が高い場合は、母親との結合と分離のどちらが強くても、アイデンティティ形成の困難さ、精神的不健康に繋がるといことが示された。一方、母親への従属については、予測と異なり、能動的従属であれば、健全なアイデンティティ形成、精神的健康に繋がる、という結果となった。このことから、「母親との関係において従属、押しつけ、劣等感を感じることは、娘のアイデンティティ形

成、精神的健康にネガティブな影響がある」という仮説に対して、押しつけと劣等感の効果については支持された。なお、従属に関しては支持されなかった。

最後に、本章をまとめると、母娘関係が娘のアイデンティティ形成、精神的健康に与える影響を検証するにあたり、母娘関係のポジティブな側面だけでなく、ネガティブな側面も含めた項目を入れた「母娘関係尺度」を開発し、その下位尺度を用いて母娘関係を類型化することで、以下のことが示された。

- (1) 母娘関係は、4タイプに類型化され、母親との分離・結合、娘の精神的健康の視点で分析すると、「自立群」（健康な分離型）、「反発群」（不健康な分離型）、「親密群」（健康な結合型）、「葛藤従属群」（不健康な結合型）となった。
- (2) アイデンティティ達成、および精神的健康を示す得点が高い「自立群」、「親密群」は母親からの押しつけ、母親への劣等感が低く、両方の得点が高い「反発群」、「葛藤従属群」は、母親からの押しつけ、母親への劣等感が高かった。つまり、娘のアイデンティティ形成、精神的健康にとって重要なのは、母親との分離か結合かということではなく、母親に対して、押しつけや劣等感といったネガティブな感情を持たない母娘関係である。
- (3) 娘の母親への評価の観点からみると、母親への肯定的評価はアイデンティティ形成、精神的健康にポジティブな影響を与えると考えられるが、母への評価が高く、押しつけや劣等感も高い「葛藤従属群」では、母親に対する評価がアイデンティティ形成、精神的健康に繋がらない。
- (4) 娘の母親への従属の観点からみると、母親への従属には能動的従属と受動的従属があり、「親密群」にみられる能動的従属はアイデンティティ形成、精神的健康にポジティブな影響を与え、「葛藤従属群」にみられる受動的従属はネガティブな影響を与える。

5. 今後の課題

以上のように、本章では、母親との親密性を特徴とする「親密群」と母親を認めつつも分離している「自立群」が高いアイデンティティ達成を示したが、調査対象が社会に出る前の大学生であることを考慮する必要があるであろう。特に「親密群」は、母親への依存が窺われるため、母親に認められた価値観と社会的な価値観との間に齟齬が起きたときに、自律的に対処できるのか、健全なアイデンティティや精神的健康を維持できるのか、ということが懸念されるが、本章の結果からは見えてこない。また「反発群」や「葛藤従属群」が発達の変化として「自立群」もしくは「親密群」へ移行する可能性があるのか、あるとすれば

どういう要因によるのか、ということをはっきりさせることも今後の課題である。そのためには縦断的な研究や質的な手法を取り入れ、発達的变化という視点で可能性を検証する必要があるであろう。この課題については、第3章、第4章、第5章において、伝記資料を用いて検討する際、より多面的な考察を行う。

第3章 伝記分析:マーガレット・ミッチェル⁵

——葛藤従属群における母娘関係と娘のアイデンティティ形成の特徴——

第2章では、大学生女子を対象にした質問紙調査によって母娘関係を4つのクラスタに分けて、それぞれのクラスタの特徴を検証したが、どのような母娘関係が、どのように娘のアイデンティティ形成に影響を与えるのか、また、なぜそのような母娘関係が形成されたのかについては明らかになっていない。そのような意味の把握のためには、生涯発達の視点から検証する必要があると考えられる。そこで、本研究の第3章～第5章では、母娘関係が他の親子関係よりも近いとされ、さらに昨今、母娘関係の密着が注目されていることから、4クラスタのうち、結合タイプの母娘関係である「葛藤従属群」と「親密群」に着目し、伝記研究法による検証を試みる。

まず、本章では、「葛藤従属群」の特徴を持つと推測される作家、マーガレット・ミッチェルの伝記分析を行う。

1. 問題・目的

本章で分析するマーガレット・ミッチェル（以下、ミッチェル）は、1900年生まれのアメリカの作家で、世界的ベストセラー小説『風と共に去りぬ』の著者である。ミッチェルは、幼少期から書き溜めた数多くの小説がノートに残っている（Eskridge, 2010）ことから、非常に文学的関心が高く、才能も豊かであったと推察される。しかし、小学校のころから母が「あなたはアメリカでは数少ない女医になるという未来があるのよ」と言い聞かせ、ミッチェルも将来について質問されると「大きくなったらたってお医者さんになる」と答えていたという。そして、女学院時代にも友人に、「ウイーンへ行って、フロイトについて医学を勉強してから、アトランタで医院を開業するのが夢だ」と語っている（Edwards, 1983 大久保訳 1986）。そして、母の勧めで北部の進歩的なカレッジに進学するのであるが、ミッチェルが18歳の時に母がインフルエンザで急死し、それをきっかけに、ミッチェルはカレッジを退学してしまう。その後は目標を見失い、拡散に陥って、後に「1919年から1922年までの間が、自分にとってもっとも不幸な時期だった」（Walker, 1993 林訳 1996）という状態が

⁵ 本章は下記の論文の内容をもとに加筆・修正を行ったものである。

赤木 真弓（印刷中）. 娘のアイデンティティ形成を妨げる母娘関係の特徴——マーガレット・ミッチェルの伝記資料の分析から—— 青年心理学研究, 31(2)

続いている。

以上のことから、ミッチェルのアイデンティティ形成、および青年期のアイデンティティ拡散に対して、母の養育態度を中心とした母娘関係が鍵になっていたのではないかと考えられる。第2章では、母娘関係についてのクラスタ分析の結果、「反発群」「親密群」「自立群」「葛藤従属群」の4類型を見出した。さらに、得られた類型について、分離と結合、および精神的健康の視点で分析した結果、「自立群」が健康な分離タイプ、「反発群」が不健康な分離タイプ、「親密群」が健康な結合タイプ、「葛藤従属群」が不健康な結合タイプであることが示された。また、アイデンティティ達成が高かったのは「親密群」と「自立群」で、どちらも母からの押しつけ、母への劣等感が低かった。逆に、アイデンティティ達成が低かったのは「反発群」と「葛藤従属群」で、どちらも母からの押しつけ、母への劣等感が高かった。ミッチェルの場合、母との結びつきが強く、母からの押しつけや母への劣等感も強かったこと、青年期にアイデンティティが拡散していると考えられることから、「葛藤従属群」に該当すると推察されるため、その特徴と照らし合わせて、母娘関係の問題点を伝記研究法により明らかにしていきたい。

さらに、アイデンティティについては、その斉一性と連続性が重要とされる (Erikson, 1959 西平・中島訳 2011) ことから、ミッチェルについても、初期成人期以降のアイデンティティの発達をみることは、青年期のアイデンティティの解釈に有効だと考えられる。Kroger (2018) は、Erikson がアイデンティティの斉一性と連続性の重要性を説きながら、具体的なことに触れていないことに言及し、回顧法による語りの記述を研究することによって、アイデンティティがどのように成人期の課題に統合されていき、また成人期の課題によって包含されていくのかということを示そうとした。しかし、情報量、客観性という意味で限界があり、回顧するということがかかえる非常な困難さについては、Kroger (2018) も指摘している。それに対して、本研究で用いる伝記研究法は、Erikson (1958, 西平訳 2002) が『青年ルター』で試みた心理歴史的方法をモデルとして、西平 (1983, 1990) が分析の枠組みを完成し、大野 (1996) によって継承された質的研究手法であり、全生涯を展望した視点が持てるため、アイデンティティ研究には特に有効な手法とされている (三好, 2014)。面接調査に比較して、N=1 という制約があるが、典型として対象理解を深めることができる。大野 (2008) は、「典型とは個のケースでありながら、多くの人が共感的に理解でき、人間の心理力動を説明できるようなクリアな具体例であること、かつそのケースの個別性を失わずに語られるものである」としている。さらに、伝記研究法においては、その

資料が重要となるが、ミッチェルについては、兄を始めとする親族や同僚、知人など、身近な人物への綿密な取材と資料に裏付けられた、複数の伝記が出版されていること、青年期の日記、友人への手紙など、心の葛藤を綴った貴重な一次資料が残っていることなど、分析対象として有効な人物と考えられる。

次に、ミッチェルのアイデンティティの特徴をアイデンティティ・ステイタス理論 (Marcia,1966) からみると、幼少期から青年期前期まではフォークロージャーとしての特徴が見られ、青年期後期にアイデンティティ拡散 (以下、拡散) に変化しているにとらえられる。そして、初期成人期以降、後述するように、不安定さを抱えつつも作家としてのアイデンティティを確立していったと考えられる。

Waterman (1982) は、青年期から成人期にかけてのアイデンティティ・ステイタスの変化を図式化し、フォークロージャーからは、そのままフォークロージャーを維持、モラトリアムへの変化、拡散への変化の3パターンがあるとしている。フォークロージャーから拡散への変化は、地位として退行しているにとらえられるが、その場合の心理状態は、「これまでコミットしてきたものが無意味になっていくが、それに代わるものが得られない状態」であると述べている。また、Kroger (1996) は、アイデンティティ・ステイタス理論における退行を、退行後のステイタスによって、達成からモラトリアムへの退行、達成、モラトリアムからフォークロージャーへの退行、達成、モラトリアム、フォークロージャーから拡散への退行の3つに分類した。特に、拡散への退行は最も適応が損なわれることが多く、重大なストレス、喪失の結果であると述べている。その中で、フォークロージャーから拡散への退行については、それまでのアイデンティティが重要性を失っていくという喪失感への反応であり、内在化した幼少期からの価値観や関与を意味ある解決策もないまま放棄することであるとした。ステイタスの退行の特徴、およびその時の心理状況をタイプ別に理解できることは、アイデンティティを理解するうえで非常に有用であるが、どういうタイプのフォークロージャーがステイタス退行する傾向があるのか、ということについて具体的な構造が見えてこないため、個人内の変化について分析することが必要であると考えられる。

個人内の変化をみる縦断研究として、Kroger (1995) は、フォークロージャーを発達型と固定型に分け、2年後のステイタスを測定している。その結果、発達型の特徴を持ったフォークロージャーの多くが2年後にステイタス変化したのに対し、固定型の特徴を持ったフォークロージャーの多くが2年後にも同じステイタスにいたということが示され、フォ

ークロージャーのタイプによって、ステイタス変化の様相が違ふことが実証的に示されていて興味深い。ただ、この研究では、ステイタスが退行したケースがほとんど出現せず、サンプル数、年数の点で縦断研究の限界が見られる。

さらに、フォークロージャーのサブカテゴリーについては、Archer & Waterman (1990) が複数の研究を用いて、5タイプを提唱している (Table 3-1)。「開放型」(Open foreclosure) は、与えられた領域にコミットし、それが自分の才能やパーソナリティに合っていると考えているが、他の意見に対しても柔軟で守りに入らず、状況によってモラトリアムに移行する、という特徴を持っている。「閉鎖型」(Closed foreclosure) は、異なる価値、目標に対して防衛的に反応し、自分のコミットメントを理想化して語る傾向があり、自分の目的と合わない相手に特に怒りを示すことがある。さらに、罪悪感が強く、親や重要な他者の好みに逆らうと、愛を失う、あるいは別の形で罪を受けるのではと考え、早い時期に出現したアイデンティティに固執しやすい傾向がある。「早産型」(Premature foreclosure) は、非常に早く重要な他者をモデルにして自分をモデルに近づけようとし、自分の能力や限界を知るという学童期の評価に取り組みず、役割実験が行われぬという特徴がある。「発達遅延型」(Late developing foreclosure) は少なくとも初期成人期まで拡散型で、その後、コミットしやすいものにコミットする傾向がある。最後に「専有型」(Appropriated foreclosure) は他者や何らかの集団の定義をトータリズム的に自分のものとして取り入れるという特徴がある。Archer & Waterman (1990) は、その中で「閉鎖型」と「専有型」がその後、拡散に退行するリスクがあるとしている。

これらの研究は、フォークロージャーの特徴、ステイタス退行を分析するうえで有用であるが、どういう特徴を持つフォークロージャーが拡散に退行しやすいのか、その理由はなぜなのか、また、何がきっかけとなるのか、ということについて関連づけて検証されていない。そして、今日までこれらの点について明らかにした研究は全くみられない。

そこで本章では、フォークロージャーから拡散にステイタス退行した事例としてミッチェルの伝記分析を行い、全生涯の視点から分析することによって、フォークロージャーとしての特徴と、拡散に変化した原因について検証する。

具体的には、まず、ミッチェルのアイデンティティ形成に強い影響を与えたと考えられる母の養育態度、および母娘関係がどのようなものであったのかということ明らかにする。次に、「母の死後、なぜアイデンティティが拡散し、その状態が長く続いたのか」という心理学的問いを設定し、「母の意志に依存し、葛藤を抱えながら従属していたフォークロ

ージャーであったことから、青年期までにアイデンティティを主体的に選択できずにいたため」という仮説をたて、これを資料から検証していく。さらに、初期成人期以降のアイデンティティの様相を分析することで、「母娘関係が娘のアイデンティティ形成に与える影響」について、生涯発達の視点から理解を深めることを目的とする。

Table 3-1

フォークロージャーのサブカテゴリー (Archer & Waterman, 1990)

サブカテゴリー	特徴
「開放型」 (Open foreclosure)	<ul style="list-style-type: none"> ・他の検討をすることなく、与えられた領域にコミットしている ・与えられた領域が、自己定義、人生の見通しと一致している ・他の意見に対しても柔軟で守りに入らない ・他のほうが自分の才能、パーソナリティに合っているとは思えない ・漸成発達理論の第1、第2段階の主題は十分解決している ・状況によってモラトリウムに移行することができる
「閉鎖型」 (Closed foreclosure)	<ul style="list-style-type: none"> ・独断的で柔軟性がなく、偏狭な特徴 ・自分のコミットメントを正確に理想化して語る ・自分の見解を合わない相手に時に怒りを表す ・漸成発達理論の第1段階の主題が十分解決していない ・罪悪感が強く、重要な他者の好みに逆らうと愛を失う、あるいは他の形で罰を受けるのではないかと思う ・不安が大きく、早い時期に出現したアイデンティティに固執する ・たとえ、今の目標や価値が脅かされ、探索がふさわしい時でさえ、役割固執する
「早産型」 (Premature foreclosure)	<ul style="list-style-type: none"> ・非常に早く（しばしば学童期に）コミットする ・重要な他者（親、先生など）をモデルにして、自己をモデルに近づけようとする ・人生をロマンチックに考える ・個人の能力や限界を知るという学童期の評価に取り組まない ・職業選択に繋がる役割実験が行われない
「発達遅延型」 (Late developing foreclosure)	<ul style="list-style-type: none"> ・少なくとも初期成人期までは、拡散ステイタス ・その後、最初に没頭したものにコミットする ・外部のプレッシャーや、コミットしやすいものにコミットする傾向がある
「専有型」 (Appropriated foreclosure)	<ul style="list-style-type: none"> ・他者や何らかのグループの定義をトータリズム的に自分のものとして取り入れるタイプ（カルト集団や過激派など） ・漸成発達理論の第1～第4段階の主題が解決していない

2. 方法

伝記研究法における個別分析の手法（大野, 2008）に従い、分析を進める。まず、生涯の年譜に、心理学的解釈を加えた心理学的年譜を作成し、生涯の概観を行う。次に、その人物の一生に現れたアイデンティティの諸相と行動、生き方との関連について「彼女は、なぜ〜だったのか」という心理学的問いを設定する。さらに、それに対する心理学的な解釈としての仮説を提示し、解釈に必要な根拠を複数の伝記資料から列挙していく（列挙法）。本研究では、前述の仮説に対して、列挙法による解釈を示し、その妥当性の検証と蓋然性を高めるために、生涯発達心理学を専門とする心理学研究者5名による検討を行った。

主に分析対象とした資料は、まず、伝記として出版されている『マーガレット・ミッチェル物語』（Farr & Mitchell, 1965 大久保訳 1967）、『タラへの道 マーガレット・ミッチェルの生涯』（Edwards, 1983 大久保訳 1986）、『マーガレット ラブ・ストーリー』（Walker, 1993 林訳 1996）の3冊である。これらの伝記は、作者が綿密に取材し、資料や取材先を明記していることから、信頼性が高いと考えられる。それに加えて、青年期に数年にわたって送られた友人への書簡集である『Dynamo Going to Waste: Letters to Allen Edee, 1919-1921』（Peacock, 1985）、女学院時代に書かれた日記と幼少期からノートに書き溜めた小説を掲載した『Before Scarlet: Girlhood Writings of Margaret Mitchell』（Eskridge, 2010）を用いた。

なお、本研究では、英語の資料から引用する際は、筆者による日本語訳で表記した。

3. 結果・考察

列挙法により抜粋した根拠資料の一部を、母親関連（Table 3-2）、乳児期～児童期（Table 3-3）、青年期（Table 3-4, Table 3-5）、初期成人期～成人期（Table 3-6）として示す。

本文中の伝記資料からの引用については、可読性を高めるため、Table の通し番号（Table 3-2: 1～17, Table 3-3: 18～33, Table 3-4: 34～49, Table 3-5: 50～65, Table 3-6: 66～85）で表記した。⁶

⁶ Erikson は漸成発達理論において、青年期以降の年齢区分は厳密に定義していないが、本研究では、ミッチェルの青年期以降の年齢区分について、女学院までを青年期前期（12歳～17歳）、カレッジに入ってから最初の職業につくまでを青年期後期（18～22歳）、新聞記者を経て『風と共に去りぬ』を出版するまでを初期成人期（22歳～36歳）、作家としての地位を確立してからを成人期（36歳～没年49歳）とした。

1) 母の性格と養育態度

まず母の性格については、ミッチェルの兄スティーブが「自分の宗教の宗旨を深く極めていて、それを正しく説き、布教すべきだと、常々主張していた。そのために、一部の牧師の間で不評を買ったが、母はまったく気にかけなかった。」(3)と回顧している。さらにミッチェルが「私の子供のころの思い出は、母と婦人参政権がその大部分を占めているといっても過言ではない」(4)と振り返っているように婦人参政権運動の先頭に立ち、時代の先端をいく女性であった。これらのことから、母は、明確な価値観を持ち、周囲にまどわされない意志の強さを持っていた女性であったと考えられる。

そして、母のこのような性格は娘に対する養育態度に影響を及ぼしている。たとえば、幼いころのミッチェルは内気で、周囲の人間はそれを理解していたが、母は内気の兆候を早い時期に克服しなければならないと主張して譲らず、「時々その躰のためにスリッパでぶたれたことがある」とミッチェルは後年追憶している(20)。このことから、母の愛情は、娘の個性とは関係なく、自分の価値観に合わなければ認めない、という条件付き愛情であったのではないかと考えられる。また、ミッチェルが3歳のとき、ストーブの火がスカートに燃え移り大やけどをするという事故が起きた。それ以降、母は娘が10歳になるまで、「安全のため」としてスカートをはかせずズボンをはかせたという(23)。ミッチェルは、そのことで女の子から仲間はずれにされ、後に義兄への手紙で「兄たちに認めてもらうため、私はジミーという男の子になるしかなかった」(24)と振り返っている。これも、娘の気持ちを無視した、母による価値観の過剰な押しつけであり、娘の自尊心を傷つけ、自律性の獲得の妨げになったと考えられる。

さらに、母は、小学校に入って算数が嫌いだという娘のお尻をヘアブラシで叩き、馬車に乗せて没落地域に連れて行き、そこの人たちが安住していた世界が没落した模様を説明したという。その時に、「人間は一特に女は一教養としても、実用のためにも、しっかりと教育を身につけなければ、生きることさえできないのよ。(中略)いいかい、明日はまた学校へ行かなければならないよ。そして最後まで算数をやりとげるのよ」と母に言われたとミッチェルは後年、振り返っている(7,8)。これも、小さい子供に恐怖心を植え付けて従わせようとする、有無を言わせぬ教育であったと考えられる。こうした養育態度は、青年期まで続き、ミッチェルが女学院時代の日記に「母は、人に2度チャンスを与えることはめったにない。」(12)と書いていることから、母の要求の厳しさが伝わってくる。そして、それは死ぬまで変わらず、ミッチェルが18歳のとき、インフルエンザで死の床にあった母が兄に口頭筆

記させた、ミッチェル宛の遺言に象徴的にみられる。「あなたのような気性の女の犯しがちな誤りを一つあげて、あなたの戒めにしたいと思います。(中略) あなたもあなたの人生を生きるために最善を尽くしなさい。(中略) あなたの人生はだれにも妨害させてはいけません」(16)と、娘の陥りがちな欠点を指摘し戒め、最後まで生き方を支配しようとしたのである。

以上のことから、ミッチェルの母の養育態度の特徴は、強い意志に裏付けされた「価値観の押しつけ」であったと考えられる。

2) 母娘関係の特徴

このように、意志の強い母から価値観の押しつけを受けて育ったミッチェルは、母の価値観を受け入れ、従属していった。

母の価値観は「女の子が人生で価値あることを実行したいと望むなら、ぜひとも数学とラテン語と科学をマスターしなければならない」(26)というものであり、母自身も若いころはキュリー夫人に憧れていたというほど、科学志向が強かった。しかし、ミッチェルは、「国語をのぞけば、どの学科も合格点に達するか達しないかという成績だった」(27)ため、母親に対する劣等感が強かったと推察される。このことは、「いいえ、私は母のようではありません。母は、私が知っている女性の中でも、もっとも賢く、優しく、魅力的な人でした」

(1)という後年の、知人への手紙からも読み取れる。また、ミッチェルは日記に「彼女(母)は私には大志がないと思ってるだろう」(14)と書き記しているが、これも、「母は、わたたちが人生の賭博者に一しかも幸運な賭博者に一なることを望んでいると語ったことがあった。」(5)という勝負師的な生き方を好んだ母に対する劣等感であったと考えられる。

さらに、母に従属しながら強い劣等感を持っていたミッチェルは、常に母の評価を気にしていた。たとえば、女学院時代の日記には「私は数学に失敗し、母はパブリックスクールに戻るべきね、と言う。でもそれは嫌だ。それが私の泣きたい理由」(35)、「全部の中間試験で落ちることはわかってるし、母のためでなければ、気にしないのだが...」(13)など、母に対する評価懸念が赤裸々に綴られている。一方、ミッチェルは、母親以外の評価はあまり気にしていなかったようである。たとえば、父については、「父は私を心配させることはできない。母はできる。」(13)と書いている。また、女学院時代のミッチェルについて兄は「敵をつくり...おのれの敵を決して忘れなかった」(40)と語っており、合わない相手とは敵対するタイプであることから、母の評価だけを気にし、母に否定されることを何よりも

恐れる気持ちが強かったと考えられる。

以上のことから、ミッチェルの母娘関係は、娘が母の価値観の押しつけと母への劣等感によって母に従属し、母に否定されることを恐れる強い評価懸念を持っている関係と特徴づけられるだろう。

これらの母娘関係の特徴を第 2 章の母娘関係の類型に当てはめて検証すると、母からの押しつけ、母への劣等感、母への従属が強いことが特徴で、「～しなければならない」という観念や否定的評価不安の高さ、自尊感情の低さが見られることから、「葛藤従属群」に分類できる。

3) フォークロージャーとしての特徴

ミッチェルの母は、前述したように、娘に幼少期から「あなたはアメリカでは数少ない女医になるという未来があるのよ」と言い聞かせ、ミッチェルも将来について質問されると「お医者さんになる」と答えていた (29)。そして、女学院時代には友人に「ウイーンへ行って、フロイトについて医学を勉強してから、アトランタで医院を開業するのが夢だ」(41)と語り、カレッジに進学した後、医科大学に進むつもりであった。つまり、幼少期から青年期前期までのミッチェルは、母の価値観を受け入れて「医者になる」という目標を持ったフォークロージャーであったと考えられる。

「医者を目指す」という目標をミッチェルはどうとらえていたのであろうか。Erikson (1968 岩瀬訳 1982) は、漸成発達理論の第 4 段階の活力である有能感について、「重要な課題の達成において、機敏な知性を自由に駆使する能力のこと」としているが、母の価値観に従属していたミッチェルは、「重要な課題」を数学など科学的な学問であるととらえていたと推察される。⁷しかし、成績が悪いことに悩み続け、「私は誇れるものが何もない(中略)私は怠惰で、勉強することができない。数学ができない」(34)と自己否定を繰り返していた。このように、自分が有能感を持っていないことにコミットしなければならない、と思うことには、大きな葛藤があったと考えられる。

その一方で、「(妹は)指で鉛筆を動かせるようになり、文字をつないで言葉に出来るようになった頃から、物語を書き始めていた」(25)と兄が回顧しているように、ミッチェルは幼少期から、文学的才能を発揮しており、小学校に入ってから、シナリオも手がけて、仲

⁷ Erikson (1968 岩瀬訳 1982) については、新訳として「アイデンティティ—青年と危機—」(2017, 中島由恵 訳, 新曜社) が刊行されている。

間を集め、家で上演会をしている。女学院では演劇クラブの中心的存在となり (38) , 短編小説が校内誌に掲載される (39) など、創作に対する自信が感じられる。しかし、こうした才能は、有能感には繋がらなかった。母が、娘の個性や才能を無視して、自分の価値観を押しつけた結果、自分が自信を持てることを「重要な課題」とみなせなかったからであろう。三好 (2011) は、有能感が単に才能の高低についての認知ではなく、自分に適した場所で自分の能力を発揮できている実感にもつながっていることを明らかにしているが、ミッチェルは、その実感が持てなかったと考えられる。

以上のことから、ミッチェルは、有能感を感じられない目標にコミットしなければならない、という葛藤と、その裏返しとして、自分の才能や関心を生かした目標にコミットできない、という潜在的な葛藤を内在化しながら、母の価値観を受動的に受け入れていたと考えられる。

このようなミッチェルのフォークロージャーとしての特徴は、Archer & Waterman (1990) の分類に従えば、異なる価値、目標に対して防衛的に反応し、さらに、罪悪感が強く、親や重要な他者の好みに逆らうと、愛を失う、あるいは別の形での罪を受けるのではと考える「閉鎖型フォークロージャー」の特徴と一致する。そして、ミッチェルの場合、母からの価値観の押しつけと母への劣等感によって母に従属し、母に否定されることを恐れる強い評価懸念を持っている、葛藤従属型 (第2章) の母娘関係であったことが、親に否定されることを恐れる「閉鎖型フォークロージャー」としてのアイデンティティを形成する大きな要因になったと考えられる。

4) アイデンティティ拡散の様相

ミッチェルがカレッジに進学してまもなく、母が急死した。その時父は、ミッチェルを呼び、「おまえはスミスカレッジへ帰りなさい」と言っている (44)。しかし、ミッチェルは、一度はカレッジに戻ったものの、父への手紙に「わたしがほんのちょっとでもお母さんの代理をつとめることができたらどんなにうれしいでしょう」 (45) と書き、兄へは「わたしは、もしトップになれないくらいなら、やめてしまったほうがましです」 (46) と送って、結局、母の死を口実に、退学して家に戻るという道を選択したのである。

家に戻ってからのミッチェルは、後に振り返っているように、「1919年から1922年までの間が、自分にとってもっとも不幸せな時期だった」 (50) という日々を送っている。また、カレッジ時代の男友達エディに送った19歳から21歳までの手紙には、「私の人生には何

か欠けている。私のどこが悪いのか教えて」(52)、「どこにいて何をしたらいいか、わからない」(58)、「自分の強みを知りたい(中略)建設的なことは何もしていない」(59)など、「これまでコミットしてきたものが無意味になっていくが、それに代わるものが得られない」という、フォークロージャーから拡散に退行した場合の心理状態(Waterman,1982)を示す内容が頻繁に綴られている。さらに、Erikson(1959 西平訳 2011)は、拡散の諸相のひとつとして、否定的アイデンティティをあげているが、ミッチェルも、酒、タバコ、挑発的ダンスなどの不良的行動をとって家族ともめる(47,48)など、この時期には、否定的アイデンティティに基づく行動が見られている。

Kroger(1996)は、拡散への退行の原因は重大なトラウマ、喪失による圧倒的なストレスの結果であると述べているが、ミッチェルの場合も、明らかに母の死を受けて拡散したと考えられる。しかし、最初は親の意向を受け入れたフォークロージャーであっても、目標そのものに価値を見出し、主体的にコミットしていれば、たとえ親を失っても目標の放棄に繋がるとは限らないであろう。ミッチェルが目標を放棄して拡散に退行したのは、そもそも「～になりたい」というより、「～にならなければならない」という強迫観念によって母の意志に従属していただけで、医者という目標は自分の潜在的な価値観と乖離していたため、価値を見出すことができなかつたからではないかと考えられる。実際、ミッチェルの資料を見ると、医者という職業そのものの価値や意義についての記述は見当たらない。ここで着目したいのは、女学院時代の日記で、「私は何らかの形で有名になりたい(弁士、芸術家、作家、軍人、戦士、女性政治家...)」(37)と書いているのである。これらの職業は、どれも共通性がなく違和感を覚えるが、何らかの形で有名になりたい、という言葉でくくられている。このことから、「女の子が人生で価値あることを実行したいと望むなら、ぜひとも数学とラテン語と科学をマスターしなければならない」(26)という母親の期待を「社会的に成功した女性」ととらえていたのではないかと考えられる。また、「アメリカでは数少ない女医になるという未来があるのよ」(29)という母の言葉も、女医がアメリカではまだ希少である、ということに価値があったと読み取ることができ、ミッチェルにとっては社会的に成功した女性になるための具体的職業が「医者」であったにすぎないと推察される。つまり、フォークロージャーとしてのミッチェルがコミットしていたのは「母の意志」であり、「医者」という目標は手段であるため、それに対する志向性は低かったと考えられる。特に「医者」という目標は、ミッチェルの興味関心、才能と乖離しており、劣等感を感じるものであったため、母がいなければ目指す意味がなくなってしまったのであろう。その結果、母の死

後、それまでのアイデンティティを放棄し、拡散に陥ったと考えられる。

したがって、ミッチェルのステイタスがフォークロージャーから拡散に退行した原因は、表面的には母の死がきっかけになっているが、実際には、葛藤従属的な母娘関係によって、母の期待を裏切ることを恐れ、ストレスを抱えながら医者というアイデンティティに固執するという、フォークロージャーとして抱えていた問題にあったと考えられる。言い換えると、フォークロージャーから拡散への退行の原因を分析するためには、どのようなタイプのフォークロージャーであるかを明らかにすることが重要であるということである。ミッチェルの場合は、閉鎖型フォークロージャーから拡散に退行しており、これは「閉鎖型」と「専有型」がその後、拡散に退行するリスクがある、という Archer & Waterman (1990) の主張と一致している。さらに、フォークロージャーは親など年長者の価値観を無批判に取り入れることが特徴であるが (Marcia, 1966) , その価値観を与えた親との関係を分析することが、退行の原因を検証するために有効であると考えられる。

5) モラトリアムへの移行の阻害要因

フォークロージャーとしてのアイデンティティが拡散しても、新たなアイデンティティを探索することは可能であると考えられ、Waterman (1982) は、 拡散からモラトリアムへの変化は、「代わりになる様々なアイデンティティを真剣に模索し始める」こととしている。したがって、ミッチェルの場合も、母から解放されて自分の志向に合わなかった「医者」を放棄した後、もともと才能のあった作家やジャーナリストなど、他の目標を模索することはできたと考えられるが、何年にもわたって拡散の状態が続いていた (35, 37, 38, 40, 41)。

三好 (2011) は、「大人が教育や躰と称して子どもたちを思い通りに育てようとした場合、子どもたちは活力の生成を阻害され、どんなに才能、能力に恵まれても自分の才能・能力が何に適しているのかを見出すことができなくなると考えられる」と述べている。ミッチェルの場合も、母からの価値観の押しつけによって有能感の生成が妨げられていたため、その目標を放棄してしまうと、新たな目標を自ら模索できなかったと考えられる。

また、前述したように、母の求める「医者」という目標は、ミッチェルの興味関心、才能と乖離していたため、葛藤があったはずである。にもかかわらず、子ども時代からカレッジに入るまで、一貫して「医者になる」と言い続けていたのは (29,41) , そういった葛藤から逃れるために、自分の意志を抑え込んで母の考えを受け入れていたからではないだろうか。そういう思考パターンを身に着けたことで主体性が育まれなかったのではないかと考えられ

る。その結果、主体的に意思決定できなくなり、母の死後の男友達への手紙にも「どこにいて何をしたらいいか、わからない」(58)、「私のどこが悪いのか教えて」(52)という依存的な表現が多くみられている。つまり、青年期まで主体性を抑え込んできたために、母の死後も、自分の意志で新たなアイデンティティを模索することができなかつたと考えられる。

さらに、ミッチェルは母に対する評価懸念が強かつた(13,14)。言い換えると、母の評価に依存していたため、医者を目指すことには自信がなくても、母がその目標自体を評価している、という安心感があったと考えられる。ところが、目標を承認してくれる母を失ったことで、自分では何をを目指すのも不安で、模索さえできなくなってしまった。つまり、手段であった「医者」は放棄できても、母の望んだ「社会的に成功した女性」という条件付きアイデンティティに支配されていたため、成功しなければ、という気持ちだけは強かつたと考えられるが、何をすれば成功者として評価されるかわからず、失敗したくないから挑戦しない(46)、ということであつたと推察される。また、母への評価懸念は、母がいなくなると、実際に成功者かどうかをジャッジする、社会に対する評価懸念という形をとるようになったと考えられる(71, 80, 81, 82, 84)。

以上のことから、拡散からモラトリアムに移行できずに、拡散状態が長く続いたのは、ミッチェルが、青年期まで母の意志に依存し、葛藤を抱えながら従属していたフォークロージャーであつたため、アイデンティティを主体的に選択できずにいたこと(仮説の検証)と、評価懸念が強く、失敗を恐れて挑戦できなかったことが原因であると考えられる。

6) 作家としてのアイデンティティ形成

何年にもわたるアイデンティティ拡散のあと、ミッチェルは23歳で新聞記者になっている。それは、後に2人目の夫となるジョンが、彼女に新聞記者としての教養も才能も十分そなわっている、とうけあい(44)、後押ししたからであつた。まもなく、記者としての地位を確立するのだが(67)、ミッチェルは、記事のほとんどを書き上げるとすぐジョンに見せるだけでなく、しばしば彼に校閲を依頼し、これらの原稿は彼の校閲どおりに活字になつた(68)。また、自分の記事の出来を気にするミッチェルに、ジョンは「どうしてこの記事が気に入らないのかわからない。(中略)よく書けてるじゃないか。あさっりしてるのに事実には伝えていて読みごたえがある」(69)、「君には、人を生き生きと描く力がある。新聞記者には珍しいことだよ。これは本当によく書けている」(70)という手紙を送って励ましている。職場でも、ミッチェルは悪口を言われると異常なほど感情的になって反論したがったり、

仕事を攻撃されると、すぐに興奮して取り乱したりする (71) というように、評価に過敏であったようだ。

そして、25歳でジョンと再婚してまもなく記者を辞め、ミッチェル自身が後年、「ジョンからせつつかれなかったら、自分は書かないままで満足していただろう」(74)と語っているように、夫の強い勧めで小説を書き始め、夫を話し相手、およびアドバイザーとして長編『風と共に去りぬ』を書き上げていくのである。しかしこの時期も、「誰の作品も自分のよりよく見え、情けないほど自分を卑下してしまうのです。」(73)と手紙に書いているように、優れた作品を読むたびに自信を失い、その都度、夫に励まされていた。ちなみに、執筆開始から出版決定まで10年近くあったが、その間、書いていることを知っていたのはごく一部の知人だけであり、内容を読んでいたのは夫だけであったという。さらに、書き終わってから数年は、衣装棚の中に移されてしまっている(77)。つまり、具体的な出版計画はなく、子供のころに、ただ書きたいから物語を書き続けたように、純粹に小説を書くことに没頭していた時期であったと考えられる。

以上のことから、初期成人期のミッチェルは、ようやくクリエイティブな才能を活かす場を見つけ、新聞記者を経て作家としてのアイデンティティを形成していったが、プロの作家というよりも、「小説を書く」という行為自体にコミットしたアイデンティティであったと考えられる。また、この時期は自己信頼が揺らぐことはあっても世間の評価にさらされる心配はなかったため、比較的アイデンティティが安定していたと解釈できる。そして、それを支えたのが夫であった。夫は、まず、主体的にアイデンティティを模索できないミッチェルに、方向性を示した(66,74)。母がミッチェルの個性を無視して価値観を押しつけたのとは違い、夫はミッチェルの才能や興味を尊重したのである。さらに、評価懸念の強いミッチェルの不安をその都度払拭してやり、有能感を持たせて、ミッチェルのアイデンティティを支えた。ミッチェルも、夫については「もしもとか、だからとか、でもとかいうことなしに愛してくれる唯一の人」(72)と述べている。ジョンの方も、当初の夢は文筆で身を立てることであったことから(76)、妻を通して自分の夢を実現させたのではないかと推察される。このように、ふたりは初期成人期の主題である親密性(Erikson, 1959 西平・中島 訳 2011)を育んでいく中で、アイデンティティの問題について、一応の解決を見たと考えられる。

7) その後のアイデンティティの様相

『風と共に去りぬ』は世界的ベストセラーとなり、ミッチェルの作家としてのアイデンティティは確固たるものになったようにみえるが、実はその後の人生において自信のなさや評価懸念の強さが随所にみられ、アイデンティティの脆弱さは生涯続いていたことが資料から読み取ることができる。たとえば、『風と共に去りぬ』の原稿を渡した後の編集者への手紙では、多くの欠点があることを前もって伝えようとしている(79)。さらに、少し連絡が途絶えると、自分のことを無能だと思ったに違いない、と言って原稿返却を求める手紙を書いている(80)。その後、『風と共に去りぬ』がピューリッツア賞など数多くの賞の受賞、映画化(アカデミー賞作品)という成功を収めてからも、他人の評価に敏感で、論評を書いた著者や、ファンレターにまで長い手紙を書き送っていたという(83)。極めつけは、新聞に、夫と2人の合作であるという記事が出た時、好意的な意味であったにもかかわらず、ミッチェルは激しく怒り、発言した人に「誤報を流されたショックのあまり涙が止まりません。(中略)このままでは作家という肩書そのものをはずされかねません」(82)と激怒した手紙を書き、その後、夫はいつさい読んでいなかった、とさえ言うようになったことである。夫が協力したことを認めれば、自分に作家としての才能がないと世間に思われてしまう、という恐れが強かったのであろう。結局、ミッチェルは、49歳で事故死するまでの10年以上、2作目を書くことはなく、著作権がらみの訴訟と手紙を書くことに没頭し、晩年は『風と共に去りぬ』の各版の見本と自分の記事のスクラップブックに囲まれて過ごしていた(85)。

これらのことから、すでに母が死亡していたにもかかわらず、ミッチェルは生涯にわたって、母からの押しつけにより形成された「社会的に成功した女性」という価値観にとらわれ続けたのではないかと考えられる。その結果、作家になっても「評価の高い作家」であり続けなければならず、批判が出ると不安になり、2作目も書いて失敗したら、という評価懸念で書けなかったのではないかと推察される。

4. 総合考察

本研究では、フォークロージャーから拡散にステイタス変化した典型例としてミッチェルの伝記分析を行い、その要因を、母の養育態度を中心とした母娘関係の特徴から分析した結果、以下のことが示された。

(1) 母娘関係において、母からの押しつけの強さや母への劣等感によって母に従属している

葛藤従属タイプ（第2章）であったミッチェルは、自分の志向とは異なる母の意向に従って医者を目指し続けた。

- (2) そのような母娘関係によって、ミッチェルは、母に否定されること、見捨てられることを恐れる「閉鎖型フォークロージャー」(Archer & Waterman, 1990) になったと考えられる。
- (3) 母の存命中はフォークロージャーとしての目標に固執したが、目標にコミットすること自体に非常に強いストレスを抱えていたため、母の死後、目標を放棄して拡散に退行した。
- (4) 青年期まで自らの意志を抑え込んで母の意志に従っていたことで主体性が育まれなかったため、母の死後も主体的にアイデンティティを模索できなかった。

次に、ミッチェルの伝記分析を通して、アイデンティティ拡散に退行する可能性を含んだ不健康なフォークロージャーを生み出す母娘関係について、以下のような新たな仮説が生成できる。

- (1) 娘が、母の意志と自分の志向の違いに葛藤を抱えながら、母からの押しつけの強さや母への劣等感によって母に従属している、葛藤従属型の母娘関係は、母に否定されること、見捨てられることを恐れ、罪悪感が強い「閉鎖型フォークロージャー」(Archer & Waterman, 1990) を生み出す要因になる可能性がある。
- (2) 葛藤従属型の母娘関係にある娘は、アイデンティティ形成において、自らの主体性よりも母の意志に依存するため、葛藤を内在化させ、目標そのものではなく、母の意志に従う傾向がある。
- (3) したがって、母の監視下ではフォークロージャーとしての目標に固執するが、母の監視がなくなると、目標を放棄して拡散に退行する可能性がある。
- (4) 青年期まで自らのアイデンティティについて母に依存し、目標を主体的に選択してこなかった場合、依存対象を失った後、新たな目標を主体的に模索し、選択することができない可能性がある。

また、本研究では伝記研究法を用いたが、同じく伝記研究法を用いてフォークロージャーとしての特徴を分析した研究として、西平（1990）による高村光太郎があげられる。高村は父の後を継いで彫刻家を目指すフォークロージャーであった。しかし、青年期後期に

父を否定し、それまでの道を捨てて新たな目標を探索するモラトリアムへ移行している。高村の場合、父を目指していた青年期前期を振り返り、「そういう時代には何でも実に面白かったし、僅かな間ではあるが、朝から晩まで実際大変勉強したものである」（西平，1990）と後年書いているように、当初は父のようになる、というフォークロージャーとしての目標に対して主体的にコミットしており、そこに葛藤は見られない。そして、その目標（＝父）を否定したのも主体的な判断であったため、その後、自分で新たな目標を探索することができたと考えられる。このような特徴から、高村は、与えられた領域にコミットし、それが自分の才能やパーソナリティに合っていると考えているが、状況によってモラトリアムに移行するという特徴を持っている「開放型フォークロージャー」（Archer & Waterman, 1990）であったと考えられる。それに対して、パーソナリティに合わないと考えながら母の示す目標に固執していた「閉鎖型フォークロージャー」（Archer & Waterman, 1990）のミッチェルは、状況が変わっても、主体的なアイデンティティの模索ができず、拡散に退行してしまった。つまり、健康的なフォークロージャーであった高村は、フォークロージャーからモラトリアムに移行し、不健康なフォークロージャーであったミッチェルは拡散に退行したと考えられる。

Archer & Waterman (1990) は、青年期において、「開放型」は健全な発達プロセスにあり、状況によってモラトリアムに移行するのに対し、「閉鎖型」は複雑で流動的な社会の要求に対処できない、また、アイデンティティへのより柔軟なアプローチが有益であるという考え方を受け入れられないリスクがあるとしているが、伝記分析で高村とミッチェルのフォークロージャーとしての在り方を比較することで、「開放型」と「閉鎖型」という対照的な2つのフォークロージャーカテゴリーの特徴とステータス変化の要因を具体的に示すことができた。

さらに本研究では、伝記分析の利点である生涯の分析を行ったことで、ミッチェルが、母の死後においてさえも、母の価値観に支配され続けていたことが明らかになった。このことから、娘は、青年期までに形成された母からの押しつけによる価値観に生涯とらわれ続ける可能性があることが示唆された。

さらに、ミッチェルの場合は、青年期に母が急死したことで、それまでの葛藤が顕在化した。もし母が存命であれば、その後も、価値観だけではなく、具体的な目標まで支配されていたのではないかと推察される。したがって、青年期に母を失うことが稀な一般青年の場合は、問題が内在化し、より深刻な状態になる可能性もあると考えられる。昨今は、娘を

支配し、精神的に追い詰める毒母 (Forward, 2013 羽田 訳 2015) , 大人になっても娘を支配する母の残像としてのインナーマザー (斎藤, 2004) というような母親がとりあげられ、成人後も母親の支配に苦しむ娘の問題が着目されていることから、このような母娘関係は時代や文化を超えた普遍的な問題であると考えられる。

その一方で、ミッチェルは初期成人期に、夫の支援によってアイデンティティを形成することができた。このことから、青年期にアイデンティティが拡散しても、その後、自分の欠点を補ってくれるパートナーを選択することで、アイデンティティを獲得していくことが可能であることが示された。Kroger (2018) は、成人女性へのインタビュー調査で、図書館司書のような仕事をしたかったが、家庭に入り、家族を優先してきた女性が、成人期にパートタイムで先生の仕事を始め、アイデンティティを再形成した事例を示して、成人期の様々な課題がどのようにアイデンティティの再形成を助けるのか、ということを確認法によって検証しているが、本研究では、初期成人期に親密性を育む中で、青年期に獲得できなかったアイデンティティを形成していく過程について、伝記資料を用いて示すことができたと考える。具体的には、有能感という活力が持てないままでも、それをパートナーの力を借りて補っていくこと、つまり親密性という主題に統合していくことによってアイデンティティの問題を解決できる可能性を見出した。現代社会でも、大人になってから、自分の生育環境の中に問題の原因を見出す人は多いかもしれないが、過去に絶望してしまうのではなく、人それぞれ長所や欠点があっても、補い合うことで前に進んでいけるということを示すことができたと考える。

5. 今後の課題

本章では、マーガレット・ミッチェルの伝記資料を用いて検証を進めてきた。しかし、ミッチェルは 100 年近く前のアメリカで青年期を生きた女性であることから、現代に当てはめて解釈する場合は、時代、文化的背景の違いについて考慮する必要があるであろう。ミッチェルの場合は、4 人の核家族であったことや、当時のアメリカはすでに自由恋愛の時代であったこと、女性ではあるが、カレッジに進み、職業を持つつもりであったことなど、当時としては先進的で、環境要因が現代社会と比較的近くあったと考えられる。しかし、当時の社会の中で、女性が社会的な地位を得ようとすることは、現代よりもハードルの高い目標であったことは考慮する必要があるであろう。つまり、彼女の葛藤やプレッシャーは想像以上であったと考えるべきである。

また、ミッチェルは女性であるため、母娘関係についての仮説を生成したが、この仮説が母娘関係に特徴的なものなのか、他の親子関係にも当てはまるのかということについては、本研究では明らかではない。今後、母と息子、父と息子など、他の親子関係についても、伝記研究法を用いて比較検証することによって、母娘関係の特徴をより明らかにしていくことが可能であろう。

さらに、本章では、典型の研究として、人間の心理力動を説明できるようなクリアな具体例を示せたと考えるが、N=1という伝記研究法の限界は残る。それに対して、西平（1983）は、なんらかの類似性・共通性と異質性・対照性を持つ2人の人物を比較する「比較分析」、さらには、複数の人物の伝記分析から、共通する心理学的諸概念を分析する「主題分析」を提唱している。これについては、第4章、第5章でアガサ・クリスティーの伝記分析を行い、第7章において、ミッチェルとクリスティーとの「比較分析」を試みることで、より説得力のある検証が可能になると推察される。

Table 3-2

列挙法による心理学的根拠資料（母親関連）

No	内容	引用元
1	「いいえ、私は母のようではありません。母は、私が知っている女性の中でも、もっとも賢く、優しく、魅力的な人でした」(ハーヴェイ・スミスへの手紙)	C, p.39
2	ペギー(ミッチェル)は母のことを「非常に幅広い知識をもった理想主義者」と言っている。	C, p.35
3	「自分の宗教の宗旨を深く極めていて、それを正しく説き、布教すべきだと、常々主張していた。そのために、一部の牧師の間で不評を買ったが、母はまったく気にかけなかった。」(兄談)	A, p.30
4	「私の子供のころの思い出は、母と婦人参政権がその大部分を占めているといっても過言ではない…母は私のお腹に『婦人に投票権をあたえよ』と書いた幟を巻きつけ、行儀よくしていないとひどい目に合わせるとおどしつけておいて…熱狂的な演説を始めたのです」(ハワード夫人への手紙)	A, p.31
5	「母は、わたしたちが人生の賭博者に—しかも幸運な賭博者に—なることを望んでいると語ったことがあった。…母は、正義のためなら、たとえ劣勢でも戦うべきだと、わたしたちに教えた。わたしたち二人が母から受けた感化は非常に大きかった」(兄回顧)	A, p.32
6	「母には礼儀を失するなら人殺しをしたほうがましだと思えというような躰を受けてきました」(ハリス夫人への手紙)	A, p.156
7	小学校の1年生になったばかりの彼女は、なぜ算数などという面白くないものを勉強しなければならないのか、と母に尋ねた。すると(母は)…馬車でドライブに出かけ、かつて住んでいた人たちが安住していた世界について語り、それらが彼らの足元で崩壊してしまったときの模様を説明しました。そしてもしわたしが新しい世界に対処する武器を持っていないならば、わたし自身の世界も、いつか足元で崩壊してしまうかもしれない、と言いました。」(歴史学者コインジャー宛の手紙より)	A, p.39
8	「人間は一特に女は一教養としても、実用のためにも、しっかりと教育を身につけなければ、生きることさえできないよ。…明日はまた学校へ行かなければならないよ。そして最後まで算数をやりとげるのよ」	B, p.39
9	母は、愛のために何かを求めることは決してない。彼女は常に私に「義務」を主張する。(日記)	E, p.141
10	母は、決して自分の感情を出さない人だったし、私をそうするように育てた。私は人前で感情を出すことが嫌だ(泣く、怒る、愛する、大声で笑う、喜びや悲しみをめいっぱい表現する)(日記)	E, p.141
11	私は母を愛しているし、母にも愛されていると思う。でも、母が私に対して言うこと、すること全てにとって、私は母の監視下にあるので、私はたいてい口を閉ざしてきた。	E, p.141
12	母は、人に2度チャンスを与えることはめったにない。そして、私もそれを請うような人間ではない。私は母の膝に頭を置いて、言いたい。「ごめんなさい、もう一度チャンスをください」と。でもそれはしないだろう。そう言うくらいなら、手を切り落とすだろう。(日記)	E, p.141
13	全部の中間試験で落ちることはわかっているし、母のためでなければ、気にしないのだが…。父は私を心配させることはできない。母はできる。彼女は私を発狂させるから。(日記)	E, p.141
14	彼女は私には大志がないと思ってるだろう。(日記)	E, p.141
15	ペギーは母とともにニューヨークへ向かった。買い物をしたり、博物館を訪れたり、芝居をみたり、高級レストランで食事をしたりして休暇を過ごした。この時の色あせたスナップ写真が…二人とも幸せに輝かんばかりの顔をしている	C, p.42
16	<母の遺言> 「たとえ死ぬようなことがあってもいまがわたしの最善の死に時だと思っています…同情は無用です…あなたのような気性の女の犯しがちな誤りを一つあげて、あなたの戒めにしたいと思います。…あなたの生命とエネルギーはまずはあなた自身と、あなたの夫や子供のためにあるのだということです。…あなたのお父様はあなたを非常に愛しているけれども、自分の望む結婚をさし控えてまでお父さまのそばにしようなどと考えるはいけません。…あなたの人生を生きるために最善を尽くしなさい。…あなたの人生はだれにも妨害させてはいけません」(死の床で兄が口述筆記)	A, p.53
17	父は、母からはそれほど尊敬されなかったが、紛れもなく法律の専門家だった。母はもっと冒険的な生き方を好んだかもしれないが、この夫は一か八かにかける類の人間ではなかった。ユージンはいメーベルの行動力と確固たる目的意識に引きずられ、またその行動力を高く評価した…	B, p.31

注) 引用文献は略号で表記。A: Farr,1965, B:Edwards ,1983, C:,Walker,1996, D: Peacock,1985, E: Eskridge, 2010

Table 3-3

列挙法による心理学的根拠資料（乳児期～児童期）

No	内容	引用元
18	僕たちは守られていると感じるのどこかで幸せな世界で育った(兄回想)	C, p.32
19	マーガレットの性格や資質の主な要素は全て父親譲りだった。	A, p.28
20	マーガレットは内気な子だった。ミッチェル夫人はその性格に同情しながらも、礼儀を失するほどの無口は許さなかった。マーガレットを理解し、彼女の行儀のよさを高く評価する人たちは、それに反対し、マーガレットが決して鈍感な子ではないことを保証したが、ミッチェル夫人は、恥ずかしがりやないしは内気の兆候を早い時期に克服しなければならないと主張して譲らなかった。時々その躰のためにスリッパでぶたれたことがあると、マーガレットは後日追憶している。	A, p.22
21	気が強くて市民意識の高い祖母。マーガレットが2歳になったころには、この祖母と母とは、とうていひとつ屋根の下には住めないことがあきらかになった。	B, p.29
22	祖母の家から引っ越しをすると、はるかに厳しい規則に縛られることになった。マーガレットの行動は何ひとつメイベル(母)を喜ばせなかった。	B, p.31
23	3歳のとき、ストーブの火がスカートに燃え移り大やけどをした。母は、ふたたび同じような事故に見舞われるかもしれないというので、その後10歳になるまで男の子のズボンををはかせた。	B, p.33
24	ズボンををはかされていたため(10歳くらいまで)、女の子から仲間はずれにされ、「兄たちに認めてもらうため、私はジミーという男の子になるしかなかった」(義兄ヘンリーへの手紙)	C, p.34
25	「指で鉛筆を動かせるようになり、文字をつないで言葉に出来るようになった頃から物語を書き始めていた」(兄回顧)	C, p.35
26	マーガレットが劇作家や作家になるために勉強することは、母には歓迎されなかった。女の子が人生で価値あることを実行したいと望むなら、ぜひとも数学とラテン語と科学をマスターしなければならないとメイベルは思っていた。	B, p.46
27	国語をのぞけば、どの学科も合格点に達するか達しないかという成績だった。	C, p.75
28	マーガレットには物事を秘密にする性質があつて、一度など、母親は腹立ちまぎれに、「マーガレットは近所の人に行く先を知られるくらいなら、一マイルも遠回りしたほうがよいと考えるような人間で、ユージン・ミッチェルの伯父の一人に似ているのかもしれない」と愚痴をこぼしている。	B, p.46
29	母は宗教活動に熱心ではないマーガレットを見て「科学志向の現れ」とみなし、「あなたはアメリカでは数少ない女医になるという未来があるのよ」と言い聞かせ、マーガレットも聞かされると「医者になる」と言い続けた。	B, p.46
30	「私は12歳になるまでに、ほとんどの古典を読みました。父に一冊読んだらお小遣いをあげると言われたり、母にヘアブラシやスリッパで脅されたりして読んだのです。母は、私がトルストイやサッカーやジェーン・オースティンを読まないで、叩こうとしました」(本人談)	C, p.77
31	母は古典を読ませようとしたが、「トルストイをはじめとしてロシアの小説家はほとんどが退屈なだけでなく支離滅裂で、頭を混乱させるような作家ばかりだと思った」と後日はっきり言っている。しかし、その当時は、平気で嘘をつき、客に向かって最初の章しか読んでいない「戦争と平和」について解説を試みたりした。	B, p.48
32	マーガレットは…戯曲を書き、芝居を演出するようになった。…12, 3人の少年少女からなるレパートリー劇団の配役を決め、たいがい自ら主役を演じた。	A, p.41
33	若い頃の彼女はよく脚本を書き、自らの演出、主演で、近所の子供たちを端役に使って上演していた。	C, p.38

注) 引用文献は略号で表記。A: Farr,1965, B:Edwards ,1983, C:Walker,1996, D: Peacock,1985, E: Eskridge, 2010

Table 3-4

列挙法による心理学的根拠資料（青年期①）

No	内容	引用元
34	私には誇れるものが何もないから、皮肉である。…私は怠惰で、勉強することができない。数学ができない。たぶん、士気が低くて、起きることがどうでもいいのだろう。(日記)	E, p.141
35	私は数学に失敗し、母はパブリックスクールに戻るべきね、と言う。でもそれは嫌だ。それが私の泣きたい理由。でも、もしそうしたら、永遠の断罪を受けるだろう(日記)	E, p.141
36	私はやらされなければ何もできない人間のひとりなのである。(日記)	E, p.141
37	私は何らかの形で有名になりたい(弁士、芸術家、作家、軍人、戦士、女性政治家)。(日記)	E, p.141
38	マーガレットはその創作エネルギーのすべてを学校の演劇クラブに注ぎ込み、たちまちグループのスター的な演技者、指導的な脚本家となった。	B, p.55
39	今度は新しく短編小説を書き始めた。その中の一篇は、ペギー・ミッチェルという名前で校内雑誌に掲載された。	B, p.55
40	お嬢様学校のワシントン女学院は馴染めず、兄は活字にならなかった回想録の中で「学校という社会では、ついに成功をかちとることができなかった…彼女は敵をつくり…おのれの敵を決して忘れなかった」と語っている。クラスメイトは「マーガレットは自分がお山の大将でいられるときにしか幸せを感じられない女の子だった」と断言している。	B, p.52
41	彼女はスミス・カレッジから医科大学へ進むつもりだった。そしてワシントン女学院の友人に、ウイーンへ行って、フロイトについて医学を勉強してから、アトランタで医院を開業するのが夢だ、と語った。	B, p.53
42	スミスカレッジは、…抜群の名声を得たばかりでなく、教育水準も高かった。地方都市の子女は、その水準についていけるかどうかを内心あやぶみながらも、その大学に入ることを大きな誇りとしていた。マーガレットも、そうした不安を感じてはいたが、決して外にはあらわさなかった。母親の教育がそうさせたのだ。	A, p.51
43	世界の出来事や音楽や芸術—彼女は無知で、仲間たちが詳しいことが話題になるときは、彼女はまったく口を出さなかったが、ほかのときには活発にしゃべりまくった。	B, p.66
44	父はマーガレットを呼び、「おまえはスミスカレッジへ帰りなさい。…せっかく入った学校を途中でやめてしまうのは、惜しいからね」と言っている。(兄覚書)	B, p.54
45	父への手紙に「わたしがほんのちょっとでもお母さんの代理をつとめることができればどんなにうれしいでしょう」と書いている。母の死で勉強を続ける動機がほとんどなくなり、それに対して、家に戻って、母の後を受けて女主人となる、ということが魅力的だった。	B, p.74
46	「スティーブ、ときどきわたしは気がくじけて、ここにいつまでいてもむだなような気がしてくることがあります。…ここでは何ひとつ満足することができないのです。どの学科もあまりぱっとしないのです。2500人も学生のなかにはわたしより頭がよくて、才能の優れた人がたくさんいます。わたしは、もしストップになれないくらいなら、やめてしまったほうがましです」(兄への手紙)	A, p.57
47	友人のオーガスタは結婚披露パーティに招かれた時のことについて「ペギー(ミッチェル)はいつものようにしきたりを嘲笑し、招待客に見せるために陳列された純白の肌着の山の上に贈り物として持参した毒々しい紫色のナイトガウンを乗せた」と述べている。	B, p.90
48	父、祖母は「そんなことをしていたら社会的地位を失う」と小言を言い、兄は「家族の監視がなければくだらない男と駆け落ちしかねない」という(1919, エディへの手紙)。	D, p.32
49	同居することになった祖母と対立し「あくまで自分の立場を固守して、老婦人が不遜非礼と受け取るような言葉をわざと選んで、まっこうから議論した。」(兄)という。結果的にふたりは決裂し、親戚関係をいっさい断つところまでこじれたという。	A, p.62

注) 引用文献は略号で表記。A: Farr,1965, B:Edwards ,1983, C:Walker,1996, D: Peacock,1985, E: Eskridge, 2010

Table 3-5

列挙法による心理学的根拠資料（青年期②）

No	内容	引用元
50	のちに、義兄ヘンリーに「1919年から1922年の間が、自分にとっても不幸せな時期だった」と語っている。	C, p.58
51	どうしてもっと素直に生まれなかったのか。自分が将来価値のある人間になれるのかどうかわからない(1919, エディへの手紙)	D, p.33
52	私の人生には何か欠けている。私のどこが悪いのか教えて！(1919, エディへの手紙)	D, p.49
53	デートして気を紛らわしてなければ具合が悪くなる(1919, エディへの手紙)	D, p.52
54	(カレッジを) やめたことを後悔している。もっと教育が必要だった。それが自分にとって有益なことはよくわかっている(1919エディへの手紙)	D, p.33
55	「母は別として、他のだれよりも私の人生にいい影響を与えてくれた愛情をあざ笑う権利はない」(1919, エディへの手紙)	D, p.75
56	女の子が魂を売ってでも欲しがるものを私はすべて持っている(お金、容姿、頭、家族、友達、私が愛せば結婚してくれる何人かの男たち)。でも、不幸なの。幸せだと思おうとするけど、だめ。夜になると鬱になる。むなしい(1919, エディへの手紙)	D, p.49
57	自分がちょっとチャンスを与えれば誘惑してくる男友達がいるとわかっていることほど、女の子の気持ちを高ぶらせてくれるものはありません。私も落ち込みそうになるとき、どんなに助けられたでしょう・・・もちろん、変な意図を持たず、自分のことを純情無垢と思ってくれる男性も必要です」(義妹フランシスへの手紙)	C, p.91
58	どこにいて何をしたらいいか、わからない(1920, エディへの手紙)	D, p.63
59	学校に戻りたい・・・自分の強みを知りたい・・・建設的なことを何もしていない・・・自分が電力を無駄にしている発電機のようなと感じる。(1921, エディへの手紙)	D, p.104
60	大学を辞めたことを後悔している。若すぎた。今ならもっと有意義に過ごせた・・・自分に娘ができれば、19か20になっているんな経験をしてから大学へ行かせる・・・大学も、母の死で行けなくなった(1921, エディへの手紙)	D, p.120
61	私は感情を抑えるなんてできない。・・・私のこの期間の日記を送ったらどうするの？困るでしょう？・・・もし見たければ言って(1921, エディへの手紙)	D, p.129
62	(結婚について)父親がむきになって反対したことが、かえってペギー(ミッチェル)の気持ちにはずみをつけたのかもしれない、と兄は述べている。	B, p.99
63	新婚旅行中にクリフォードヘンリーとのロマンチックな思い出を語ったり、絵葉書を出したりしたのは確かに不注意だった、とマーガレットは後日、述懐している。	B, p.101
64	ミッチェル家での同居でもめ、いさかいが続く中で、ミッチェルは何度もジョン・マーシュ(のちの夫)に手紙で不満を訴えた。	B, p.102
65	アップショーと離婚申請をした後も、アップショーと会っていたミッチェルについてフランシスは「世間の人々に、自分が結婚生活を守るために努力したということ、離婚があくまでも最後の手段だということを知らしめるためでした・・・彼女は、全てがなんとか正しく見えるようにしていたのだと思います」と回想している。	C, p.123

注) 引用文献は略号で表記。A: Farr,1965, B:Edwars ,1983, C:Walker,1996, D: Peacock,1985, E: Eskridge, 2010

Table 3-6

列挙法による心理学的根拠資料（初期成人期～成人期）

No	内容	引用元
66	ジョン・マーシュが、彼女には新聞記者としての教養も才能も十分そなわっているとうけあった。	B, p.105
67	ジャーナルの重要な読み物記者としての地位を確立し、同僚メドラは彼女を“性格描写の天才”と称した。	B, p.122
68	記事のほとんどを書き上げるとすぐ(ジョンに)見せるだけでなく、しばしば校閲を依頼した。ゲラ刷りの形で残っている初期の原稿には彼の手で訂正や指示が書き加えられている。	B, p.110
69	「どうしてこの記事が気に入らないのかわからない…よく書けてるじゃないか。あさつりしてるのに事実には伝えていて読みごたえがある」(自分の記事を卑下するミッチェルに対するジョンの手紙)	B, p.113
70	「君には、人を生き生きと描く力がある。新聞記者には珍しいことだよ。これは本当によく書けている」(ジョンの手紙)	B, p.113
71	記事に批判が集まり、ひどく動揺したマーガレットは正当性を主張する記事を書きたいと申し出たが、却下されたため、その後数日間にわたって執筆障害にとりつかれた。ペギー(ミッチェル)は批判に対してはひどく敏感で、悪口を言われると異常なほど感情的になって反論したがったり、仕事を攻撃されると、すぐに興奮して取り乱したりするので、上司と同僚のメドラは相談して、社会的に問題となるような内容の記事は、なるべく彼女にまわさないようにした。	B, p.116
72	「(ジョンは)もしもとか、だからとか、でもとかいうことなしに愛してくれる唯一の人」(義兄に語る)	C, p.124
73	私は家族の中で「謙遜病」と言われる病気にかかっています。誰の作品も自分のよりよく見え、情けないほど自分を卑下してしまうのです」(友人ダウディへの手紙)	C, p.162
74	「ジョンからせつつかれなかったら、自分は書かないままで満足していただろう」と繰り返し振り返っている。	C, p.162
75	「ペギー(ミッチェル)の目もよくなり、再び小説にとりかかります。ということは僕がまた書き出しの章を考えなければならぬということです…」(ジョンから母への手紙)	C, p.183
76	ジョン・マーシュの当初の夢は文筆で身を立てることであった。長編小説を執筆中の彼女の仕事に、果たせなかった己の夢を託していたのだ。	B, p.153
77	「1930年と31年に、わたしは原稿を若干継ぎ足しました」とマーガレットは後年語っている。しかし、その後は衣装棚の中に移されてしまっている。	A, p.99
78	ロイスがその原稿をマクミランに見せてみてはどうかと進めてみたことがあるのだが…出版するつもりはまったくないから、この原稿のことは誰にも言わないでほしい、と頼んだくらいなのだ。	C, p.18
79	原稿を渡した後のレイサムの手紙には、多くの欠点があることを前もってつたえようとしている。	C, p.214
80	レイサムから少し連絡が途絶えると、最悪のことを考え、自分のことを無能だと思ったに違いない、と言って…原稿返却を求める手紙を書いた。「とんでもないものを押し付けてしまったと呆れ、我ながら自分のあつかましさ、というか軽率さに驚いています…」。	C, p.216
81	「わたしは原稿を自分の手元に置いておきたいのです。…原稿を取り戻したら、すぐに焼却するつもりです。あれはわたしが反論する気もないほどつかれていたときに、マクミラン社に言いくるめられて持って行かれてしまったのです。校正刷りなんか誰にも見せたくないのです。…どうしていやなのか聞かないでください。自分でもわからないのです」(ニューヨークポスト宛ての手紙)	C, p.13
82	ジョンとの合作だという記事が出た。非難の記事ではなかったが、マーガレットは撤回を求める手紙を書いている。「この誤報に狼狽して、ほんとうに泣きたくなりました…あの小説は一字残らず私書いたものです。…夫は、私の原稿に目を通したことさえありません」	B, p.226
83	ペギー(ミッチェル)は「風と共に去りぬ」刊行後の最初の4年間に、きわめて長文の手紙をほぼ2万通も書いているのだ。平均1週間で100通も書いたわけだ。	B, p.285
84	あらゆる情報を細かくチェックして…その噂を否定し、さらにこんどは否定したことを直接もしくは手紙で友人たちに報告してまわった。	C, p.411
85	何百版も重ねた風と共に去りぬの各版の見本が本棚に並び、3つの切り抜きサービスに頼んで世界中から集めた彼女に関する記事を綴り込んだスクラップブックが20冊もたまっていた(兄談)	B, p.323

注) 引用文献は略号で表記。A: Farr,1965, B:Edwards ,1983, C:Walker,1996, D: Peacock,1985, E: Eskridge, 2010

第4章 伝記分析:アガサ・クリスティー I⁸

——親密群における母娘関係と娘のアイデンティティ形成の特徴——

第3章では、第2章で抽出した母娘関係の4つの群のうち、不健康な結合タイプである「葛藤従属群」に該当すると推測される作家のマーガレット・ミッチェルについて伝記研究方法を用いた事例検証を行った。次に、本章では、健康的な結合タイプである「親密群」に該当すると推測される作家のアガサ・クリスティーについて、伝記研究方法を用いた具体的な事例検証を行い、特徴の理解を深めることを目的とする。

1. 問題・目的

第2章では、母娘の分離と結合に着目してクラスタ分析を行い、母娘関係を「反発群」「親密群」「自立群」「葛藤従属群」の4つに分類した。この中で、母との結合が強いタイプとしては健康的な結合タイプである「親密群」と不健康な結合タイプである「葛藤従属群」を見出している。しかし、量的な分析だけでは、どのような母娘関係が、どのように娘のアイデンティティ形成に影響を与えるのかということが具体的にはみえてこないため、第3章では、母娘関係の4つの群のうち、不健康な結合タイプである「葛藤従属群」の典型と推測される作家のマーガレット・ミッチェルについて、伝記研究方法を用いた具体的な事例検証を行い、特徴を明らかにすることを試みた。ミッチェルについての分析の結果、母からの押しつけと母への劣等感による従属が娘のアイデンティティ形成を困難にするという、葛藤従属群の特徴が具体的に示され、母娘の密着した関係が生み出す不健康な発達についての理解が深められたと考える。その一方で、不健康な発達だけではなく、健康な発達について研究することも重要であると考えられる。昨今の我が国では、「一卵性母娘」（信田, 2008）といわれるような仲良し母娘が増加していると言われているが、このことは、第2章で、母娘関係の4群のうち、「親密群」が全体の約40%と最も多かったことにも表れている。母からの押しつけや母への劣等感が低く、肯定的に評価している母親と非常に親密な関係を維持し、能動的に従属していると考えられる「親密群」は、自尊感情や信頼感が高く、アイデ

⁸ 本章は下記の論文の内容をもとに加筆・修正を行ったものである。

赤木 真弓（印刷中）．娘のアイデンティティ形成を支える親密な母娘関係——アガサ・クリスティーの伝記資料の分析から—— 立教大学心理学研究, 62

ンティティの感覚も高かったことから、母親との親密な関係性の中でアイデンティティを獲得していくケースと推測された。

そこで本章では、母娘関係で最も多くみられた、健康的な結合タイプである「親密群」の典型として、母親との関係をベースにアイデンティティを形成していったと考えられる、作家のアガサ・クリスティーをとりあげ、伝記研究法を用いて、親密な母娘関係が娘のアイデンティティ形成に与えた影響を具体的に検証することを目的とする。

アガサ・クリスティーは、1890年、イギリス生まれの作家で、小説の多くは世界的なベストセラーとなり、「ミステリーの女王」と呼ばれた。クリスティーは、比較的裕福な家庭で、両親と使用人に大切にされて育ち、特に母親と親密な関係を保ちながら成長している。小学校に行かず、家庭で教育を受けたクリスティーは、青年期になると、オペラ歌手やピアニストを目指すが力量不足であきらめ、小説を投稿するが評価されないなど、アイデンティティの模索と挫折の様子がうかがえる。クリスティーがそういう中でもアイデンティティ拡散 (Marcia,1966) の状態に陥ることなく、健康的な青年期を過ごしていたのは、母親との親密な関係が、自己信頼を高め、健康的なアイデンティティ形成を促進していたからではないかと考えられる。

本章では、まず、クリスティーのアイデンティティ形成に強い影響を与えたと考えられる母の養育態度、および母娘関係を明らかにする。さらに、「青年期のクリスティーはなぜ、確かなアイデンティティの感覚を持ちえたのか」という心理学的問いを設定し、「母が常に味方になり、肯定してくれることで、十分な基本的信頼感を獲得できていたからではないか」という仮説をたてて、これを伝記資料から検証していく。

2. 方法

本章では、第3章で用いた、伝記研究法における個別分析の手法 (大野, 2008) を用い、生涯発達の見点から分析を進める。

分析対象とした資料としては、まず、『アガサ・クリスティーの生涯』上下巻 (Morgan, 1984 深町・宇佐川訳 1987) を用いた。これは、クリスティーの死後、クリスティーの娘が、関連するあらゆる資料を Morgan に公開し、自由な条件で執筆することを条件に依頼したものである。したがって、クリスティーが出した手紙、受け取った手紙、日記、覚書、原稿、スクラップブックなど豊富な資料に基づき、さらには親族や友人、関係者たちへの綿密な取材を経て書かれており、取材元も明記された、極めて信頼性の高い伝記であると考えら

れる。さらに、出版された伝記、クリスティー評論、小説から人物を分析している『アガサ・クリスティー』（Gripenberg, 1994 岩坂訳 1997）、10代からの生涯の親友であったナン・ワッツの娘への取材を通して、クリスティーの人生、特に自伝でほとんど触れられていなかった失踪事件について検証した『なぜアガサ・クリスティーは失踪したのか』（Cade, 1998 中村訳 1999）を資料として用いた。また、『アガサ・クリスティー自伝 上下巻』（Christie, 1977 乾訳 1979）はクリスティーが晩年に執筆した自伝である。自伝については、恣意性が入るため、用いる場合にはその点を考慮した。最後に、小説については創作物であるため対象外としているが、当初別のペンネームで出版された『未完の肖像』（Christie, 1962 中村訳 2004）については、晩年に出された自伝と酷似しており、一般的に自伝的作品とみなされていること、匿名にすることで赤裸々な感情を表現していると考えられることから、参考にした。

3. 結果・考察

列挙法により抜粋した根拠資料の一部を、養育環境（Table 4-1）、母娘関係（Table 4-2）、青年期、初期成人期（Table 4-3）として示す。本文中の伝記資料からの引用については、可読性を高めるため、Table の通し番号（Table 4-1:1~21, Table 4-2:22~43, Table 4-3:44~65）で表記した。⁹

また、資料中の呼称表記については、可読性を高めるため、本文中では一部変更して表記した部分がある。

例：アガサ（資料）→クリスティー（本文）、クラリッサ（資料）→母（本文）

1) 養育環境と母娘関係の特徴

① 養育環境

クリスティーが生まれた時、年の離れた姉と兄はすでに寄宿舎に入っていたため、両親と使用人の中で実質一人っ子のように育てられた。周囲のおとなたちは、みなやさしく、両親も仲睦まじかったようである（1）。クリスティーによる幼年期の回想を見ても、ときに思いがけぬ喜びはあっても、約束が破られて失望したという記述はない（2）。クリスティー

⁹ Erikson は漸成発達理論において、青年期以降の年齢区分は厳密に定義していないが、本研究では、クリスティーの青年期以降の年齢区分について、いくつかの学校に通っていたころまでを青年期前期（12歳～17歳頃）、結婚するまでを青年期後期（18歳頃～23歳）、離婚するまでを初期成人期（24歳～36歳）、それ以降を成人期（37歳～65歳）、老年期（65歳～没年86歳）とした。

一自身が「父と母の特別な思いやりに対して感謝の念でいっぱいになる」(5)と振り返っているように、両親の愛を受け、姉や兄によると「たいへんにかわいがられ、甘やかされていた」(6)という子ども時代であった。

父は、「彼はニューヨークの社交界でだれからも好かれていた」(7)という人物であったが、自分自身のことを“のんき、醒めている、およそ精力的ではない”、好きなことは、“なにもしないこと”と評していた(8)。クリスティーが11歳のときに病死している。母は、気まぐれで、人目をひき、霊能者のような直観力があるとされており(10)、「母から何かをしたらと奨められたら、誰でも実際にそれをするようになる」(11)とクリスティーも振り返っている。「衝動的で、思いこんだら何でも動かぬところがあった」(9)と言われていた母は、長女のマジジの時とは教育方針を180度変え、「クリスティーを家庭で教育しただけでなく、8歳までは子供に字を読ませてはいけない、遅いほうが目のためにも頭のためにもよい、という主張を持つようになっていた」という(12)。そのため、クリスティーは小学校に通わず、庭で空想上の友達を作って遊んでいたのである(17)。

② 母娘関係の特徴

当時の常識にしたがって、子どもの面倒を見るのは養育係のばあやであったが(23)、クリスティーは大好きな母と一緒に、とても濃密な時間を過ごした。母は「同じ話を二度することはけっしてなかったし、遊んでいても、つぎつぎと思ひもかけないような発想をした」(25)という人物であった。また、直観的な母は頭の回転が早く、クリスティーも「わたし自身は家族の中の“血のめぐりの悪い子”ということになっていたが、それはいつも好意的なのだった。母や姉の物事に対する反応は並はずれてすばやく、わたしは全然ついていけなかった」と述べている(26)。一方で、母は算数が苦手であったり(27)、ユーモアのセンスがない(28)など、自他ともに認める欠点があったとされ、母を認めつつも、劣等感を持つことはなかったと推察される。

また、泣いている理由を母だけがわかってくれたことや、クリスティーの気持ちを傷つける使用人には容赦ない態度を取ったというようなエピソードから、母こそが何も言わなくても自分の気持ちをわかってくれる友と感じていたことが示されている(29,30)。さらに、「母は常に自分の味方であり、いつも彼女に、愛されているという実感を与えてくれ、何をするにも、またどんなときでも、物事に対する能力が彼女にそなわっているように感じさせてくれた」(43)という。たとえば、フランス語の家庭教師を雇っても娘が上達しなかったときの母について、クリスティーは「(ひとりめは)見切りをつけた、(ふたりめは)

母は父にマドモアゼル・モーウラットはあまり成功ではなかったもので、また別の人を探そうといていた」(33)と振り返っている。このように、フランス語が上達しないことを、娘のせいではなく、家庭教師のせいにしていたため、クリスティーは劣等感やプレッシャーを感じることがなかったと考えられる。前述したように、母は8歳まで本を読ませないつもりであったが、クリスティーの場合、環境的にこの主張どおりには事は運ばず、読み書きを覚えてしまい(13)、これは、母の計画とは違っている。しかし、母は娘がしたいことを妨げるようなことはせず、旅行先から、「わたしの愛する、かわいい、ちいちゃな娘」に、たびたび便りをよこしていた(22)。このように、母は娘に決して嫌なことを強制しなかったため、クリスティーは常に気持ちを理解してくれる味方と感じていたのではないかと考えられる。

さらに、クリスティーは自伝でも「何か困ったことがあった場合の、母の愛と理解の強さである。悲嘆の真っ暗などん底にあるとき、母の手にしっかりつかまっていることが一つの安心だった。…母は自分に力と生気を与えてくれる」(31)と語り、母ときわめて仲のよい母娘であったことを強調している(32)。

その後、クリスティーが11歳のときに父が病死して母と2人暮らしとなり、夜ごとふたりは本を朗読して過ごし、話し相手として、気晴らしの相手として、母はおおいにクリスティーを頼りにしていたという(35)。このころから、クリスティーは「母に対して責任を果たしえろと考えていた」(36)というように、母に頼るだけでなく、母にも頼られる関係だと感じていたようである。

クリスティーが15歳になると、母は、週二回、学校に通わせることにした(37)。ところが、その後数年の間に、クリスティーは学校を次々変わっている。そのころのことについて、クリスティーは自伝で以下のように振り返っている。「ミス・ガイヤーの学校に行っていたのは1年にもならなかった。母はまた別のことを思いついた。いつものように出し抜くに、あなたはパリに行くことになったわよ、と母は説明した」(38)、「母は例の持前の唐突さで、私はもうT女子の学校へは戻らなくていいといった。『どうもあそこは気に入りません…考え方がおもしろくありません』。実際のところ、新しいところへ行くほうがおもしろそうに思えた。」(39)、「母が突然、マロニエ校には戻らなくていいといったときも、わたしは驚きもしなかった」(40)、「『この考えをあなたどう思う?』母が聞いた。私は新しい考えを歓迎した」(41)。このように、母は次々娘の学校を変更するのであるが、子どもの頃のフランス語教師の時と同様、娘がうまくいっていない、満足していない、とい

う様子が見えると、その原因は娘ではなく学校にある、と判断していたのではないかと思われ、クリスティー自身も、最後のパリの学校に行ったあとについて、「母はもはや教育計画の変更を申し入れることもなくなった…母は、直感的にわたしが満足しているということを知ったのが本当のところだと思う」（42）と解釈している。つまり、クリスティーは母の決めたことに従っているのであるが、自分の気持ちをわかってくれる母の言う通りにしていれば自分にとって一番よい結果になると信じて、進んで受け入れている様子がうかがわれ、押しつけられ感やネガティブな従属感はなかったと考えられる。

以上のことから、クリスティーの母娘関係は、母を肯定的に評価し、非常に親密な関係を維持しつつ、母からの押しつけや母への劣等感が少ないことが特徴である「親密群」（第2章）に該当すると推察される。また、「親密群」にみられる母への従属は、能動的な従属であったが、クリスティーの場合も同様に、母が自分を理解してくれているという確信から、能動的に母の選択を受け入れていたと考えられる。

2) 青年期のアイデンティティの様相

クリスティーは、パリの学校に行っている頃に、ピアニストを目指したが、公衆の面前で演奏する気質がないと指摘されたことを認めてあきらめたという（45）。次に、18歳ころに、オペラ歌手を目指すが、「オペラを歌うには声に力強さが足りないようだ」（46）という専門家の評価に納得してこれもあきらめている。このことについては、「わたしは現実に立ちかえり、希望的観測は捨てることにした」（48）と自分に言い聞かせていた様子がうかがえる。こういったクリスティーの挑戦に対して、母は反対することはなかったようである。それについては、自伝的小説である『未完の肖像』の中で、「マミーは私を声楽家になんかしらたくなかったんでしょ？私になりたいといえさせてくださいったのね」（47）と書いていることから、娘の気持ちを優先していたことが推測できる。そして、退屈していたクリスティーに小説を書いてみてはどうかと勧めたのは母であった（49）。クリスティーはまず、短編小説、次に長編小説をさまざまな雑誌に送りつけたが、返送されてきた（50）。このとき、母がためらいがちに、隣人のイーデン・フィルポッツ（作家）に助言をもとめてはどうかと提案し、フィルポッツは、クリスティーの才能を評価してくれたという（51,52）。ここでも、母が娘に自信を持たせるための後押しをしていたことがわかる。それが自信になったのか、その後も様々なものを書き、20歳すぎには自ら芝居を上演することに夢中になっていたようで（54, 55）、それが、将来の探偵小説執筆に繋がることになったと推察される。

このように、クリスティーの青年期は、様々な夢にチャレンジして挫折する、という一般的なアイデンティティ模索中の青年の特徴がみられる。クリスティーが挫折しながらも健康的な模索を続けられたのは、「なにになるべきか、なにをすべきかなどということは、いっさい心配しなくていい… “その男性” があらわれれば、彼があなたの全生涯を変えてくれるだろう」(56) ということが自伝にも書かれているように、人生における重要なアイデンティティは、「幸せな結婚生活」を手に入れることだと思っていたからではないかと考えられる。実際、クリスティーは、後年、人気作家になってからも、「執筆は、もっとも重要な生活の一面ではなく、本を書くのは、これまでずっとそうしてきたように、他の仕事…のあいまに限られていた」(63) と述べており、本を書くなどということは、ほんの些細な気晴らしにしかすぎなかったと主張している(64)。そして、そのような幸せな妻としてのロールモデルとなったのは、母であったと思われる。母は、子どものころからの憧れの男性であった父と結婚し、深く愛し合っていた。クリスティーは、幸福な子供時代の一つの要因として、「深く愛し合い、結婚にも、親であることにも成功した両親だった」ということを指摘している(18)。父が最後に母に送った手紙には「おまえのような妻を持った男はかつていないよ。おまえと結婚して以来、毎年わたしはおまえを強く愛するようになった。おまえの愛情と同情とに感謝する…」(19) と書いてあり、父と母の愛情の深さがうかがわれる。クリスティーはこの手紙を母の死後、大事に保管していた。また、母の方は、父の死に打ちのめされ、クリスティーが「マミー。お父さんはもう安らかよ。幸せになっている。帰って来てほしいなんてマミー思わないわね」と慰めたのに対し、「いえ、わたしは望みますよ…お父さんが帰って来るんだったら、私はこの世で何でもします…私はお父さんがほしい、ここへ戻って来てほしい」(20)と言ったという。このような父母の幸せな結びつきを身近に見て育ったクリスティーは、大人になったら理想の夫というべき男性がかならず自分の前に現れるだろうと信じて疑わなかったという(21)。

クリスティーの場合はさらに、幼少期より母が「何をするにも、またどんなときでも、物事に対する能力が彼女にそなわっているように感じさせてくれた」(43) ことで、自分も将来幸せな結婚ができる、と信じる「アイデンティティの感覚」を持っており、アイデンティティ・ステータス理論(Marcia,1966)からみると、早くから母をモデルにして自らをモデルに近づけようとする、「フォークロージャー」であったと考えられる。さらに、Archer & Waterman (1990)による「フォークロージャー」のサブカテゴリー(第3章, Table 3-1)としては、母親をモデルにして、自己をモデルに近づけようとし、人生をロマンチック

に考える、という特徴を持つ、「早産型」(Premature foreclosure) に該当すると推察される。

このような自己信頼の高さによって、青年期に壁にぶつかっても、自分にとって最も重要なアイデンティティは将来達成される、という確信を持っていたのであろう。

その後、クリスティーは、20歳前から積極的に未来の夫探しを始めている(57,58)。そして、22歳のときに、アーチャーと出会い、大恋愛の末、結婚した(59,60,61)。戦争中の別居期間を経て、本格的な結婚生活を始めた翌年は、「アガサにとっていい年だった。きれいなフラットを見つけて、その飾りつけに熱中しているし、赤ん坊の娘はおとなしく、愛らしい。夫にも満足しているし、雇い人ともうまくいっている」(65)とされていることから、結婚後しばらくは、青年期に確信していた「幸せな妻アイデンティティ」が実現したという感覚を持っていたと考えられる。

これは、クリスティーが該当すると推察される「親密群」が、青年期に健康的なアイデンティティを形成する傾向があるという第2章の結果とも一致している。「親密群」の人格的特徴は、自尊感情、信頼感が高く、べきの専制(～すべきという感覚にとらわれること)が低いことであったが、青年期におけるクリスティーにも同様の人格的特徴が見られる。それは、娘の気持ちを尊重し、自信を持たせ、常に味方であると思わせてくれた母親との親密な関係によって獲得されたものといえるであろう。

3) 高い基本的信頼感が育んだアイデンティティの感覚

基本的信頼感とは、Erikson(1959 西平・中島訳 2011)が漸成発達理論の第一段階の発達主題「基本的信頼感 対 基本的不信」として提唱したもので、自分がこの世に存在することを肯定的に捉え、人生には生きる意味や生存する価値があり、世界は信頼するに足るものだという感覚を持つことと定義される。周囲の愛情に包まれ、幼いころには、「周囲のおとなを理不尽に横暴だと感じたことは一度もない」(4)という環境で育ったクリスティーは、両親や使用人たちへの信頼感が十分に高かったはずである。さらに、母が常に自己肯定感を持たせてくれたことで、基本的信頼感がより高められたと考えられる。

Erikson(1959 西平・中島訳 2011)は基本的信頼感が、青年期においてより時間的展望をもつものとなり、自らの人生を統合するものとなると述べているが、白井(1994)は時間的展望について、希望、目標志向性、過去受容、現在の充実感の4つの側面があるとしている。青年期のクリスティーは、未来について、「理想の相手と幸せな結婚をする」という

明確な目標志向性を持ち、必ずそうなる、という希望を持っている。過去についても、子ども時代を肯定的にとらえており、現在においては、様々なことにチャレンジしていることからある程度の充実感を感じていたと考えられる。このように青年期に時間的展望の4つの側面が高かったことは、基本的信頼感の高さを示していると考えられることから、青年期のクリスティーは、基本的信頼感の高さによって「大人になったら理想の夫が必ず現れて幸せな妻になれると信じていることができる」という確かなアイデンティティの感覚を持っていたと考えられる。

以上のことから、「青年期のクリスティーはなぜ確かなアイデンティティの感覚を持ちえたのか」という心理学的問いに対する「母が常に味方になり、肯定してくれることで、十分な基本的信頼感を獲得できていたからではないか」という仮説は検証されたと考える。

さらに、児童期に小学校に通わず、同世代の友人との競争を経験していないことは、漸成発達理論 (Erikson, 1959 西平・中島訳 2011) における第4段階「勤勉 対 劣等感」の活力である「有能感」の生成に支障をきたす可能性があるが、クリスティーの場合は、母が、常に自信を持たせ続け、うまくいかななくても、原因をクリスティーに求めなかったことで、有能感を獲得できていたと考えられ、それも青年期の健康的なアイデンティティ形成を可能にした一つの要因であると推察される。

4. 総合考察

本章では、母との親密な関係をもとに青年期にアイデンティティを形成していった女性の典型としてクリスティーを取り上げ、母娘関係の特徴と娘の発達の様相を分析することで、以下のことが示された。

- (1) クリスティーは両親と使用人から十分な愛情を受け、理不尽な思いを経験することなく育った。特に常に自分の味方であると思わせてくれる母からの深い愛情を感じることで、「基本的信頼感」が非常に高かったと考えられる。
- (2) 母の教育方針で小学校に行かなかったが、母が、どんなときでも、物事に対する能力がクリスティーにそなわっていると感じさせてくれたため、十分な「有能感」を獲得できていたと考えられる。
- (3) クリスティーは、青年期において、様々な挑戦や挫折をしながらも、「いつか必ず幸せな結婚ができる」という確信的なアイデンティティの感覚を持っていた。これは、ロールモデルとしての母との親密な信頼関係により形成されたと考えられる。

Erikson (1959 西平・中島訳 2011) は漸成発達理論において、「基本的信頼感」が健康なパーソナリティの礎石であり、それは、母性的な関係性の質によって決まるとし、さらに第 1～第 4 段階の主題の達成度が第 5 段階のアイデンティティ統合に大きな影響を及ぼすと述べている。基本的信頼感とは、「世界はよいところだ、自分は愛されている」という感覚である。幼少期から、大人たちに愛され、理不尽な思いをすることがなかったクリスティーにとって、世界はよいところであり、周囲のだれからも愛されているという感覚が十分であったと考えられる。そして、そういう環境を作り、常に愛されていると感じさせてくれたのが母親であった。さらに、母親が常に味方であると感じさせてくれることの安心感は、「母親が無条件に自分の情緒的欲求を受け入れてくれるという安心感は、母親との信頼関係の構築を促し、娘の適応的な自立を支える」(水本, 2015) という先行研究の結果とも一致している。したがって、このような親密な母娘関係が青年期の健康的なアイデンティティ形成を促進することが示されたと考える。

また、母を肯定的に評価し、母と親密な関係を持っているクリスティーは、母娘関係としては、健康的な結合タイプである「親密群」(第 2 章) の特徴を示しており、健康的な人格の特徴(自尊感情、信頼感の高さ、べきの専制の低さ)も「親密群」と共通していることから、「親密群」の典型と考えられる。本章では、量的研究で分類した「親密群」の典型としてクリスティーの事例分析をすることで、母親の受容的な養育態度が、青年期の娘の健康的な人格形成、アイデンティティ形成を促進する、ということを見出し、「親密群」の特徴について、量的・質的両面から理解を深められたと考える。

5. 今後の課題

クリスティーは、約 100 年前に青年期を生きたイギリスの人物であり、現代の青年に単純に当てはめることはできないため、時代や文化的背景の違いを考慮しながら、検証する必要があると考えられる。たとえば、クリスティーのように、「将来、結婚をして幸せな妻になること」が最も重要なアイデンティティと考える女性は、現代では少ないであろう。しかし、目指すことが職業など社会的なことに変化したとしても、主に母親からの深い愛情を感じることで得られるとされる「基本的信頼感」が健康的なアイデンティティを形成する基礎であること、さらに母親が娘にとって最初のロールモデルになることは変わらないと考えられる。また、母親がだれよりも自分を理解してくれる相手であると感じ、多くの時間をいっしょに過ごしていたクリスティーの母娘関係は、現代の友達母娘といわれるような

母娘関係の特徴と一致する部分が多い。その親密な関係は成人期にも変わらないとされるが（渡邊, 2004）, これについては, 第 5 章において, 初期成人期以降の分析を試みることで, 説得力のある事例検証が可能になると推察される。

Table 4-1

列挙法による心理学的根拠資料（養育環境）

No	内容	引用元
1	10年以上年の離れた姉と兄は、すでに寄宿舎に入っていたため、両親と使用人の中で実質一人っ子のように育てられた。周囲のおとなたちは、みなやさしく、思いやりぶかかった。両親は仲睦まじかったし使用人はまじめで、長続きし、家族は一定したしきたりを守って生活していた。	A, p.73
2	クリスティーによる幼年期の回想を見ても、ときに思いがけぬ喜びはあっても、約束が破られて失望したという記述はない。	A, p.73
3	彼らは彼女の質問にまじめに耳を傾け、彼女の要望を慎重に考慮した。ばかばかしい規則はいっさいなかった。規律のために規律を守らせる、そういうことがあるのをアガサが知ったのは、後年、フランスの寄宿学校へ行ってから	A, p.74
4	幼いころには、周囲のおとなを理不尽に横暴だと感じたことは一度もなく	A, p.74
5	父と母の特別な思いやりに対して感謝の念でいっぱいになる。(クリスティーと使用人のマリーの芝居を)半時間も見せられ、拍手喝さいしなければならぬくらいやりきれないことはなかったと思う。	E, p.178
6	姉や兄によると「たいへんにかわいがられ、甘やかされていた」ということである。	A, p.76
7	後年、父の友人のひとりがアガサに語ったように、「彼はニューヨークの社交界でだれからも好かれていた	A, p.32
8	(父)フレドリック・ミラーは、彼自身が冗談めかして書いた告白の記入を見ると、“のんき、醒めている、およそ精力的ではない”。好きなことは、“なにもしないこと”，自分のおもな特徴も、“右に同じ”。	A, p.32
9	クララは衝動的で、思いこんだらでも動かぬところがあつた。	A, p.35
10	母は、気まぐれで、人目をひき、霊能者のような直観力があるとされており	A, p.28
11	使用人たちも子供たちも母にすっかり心服していたので、母の言葉ならちよつとしたことでもいつもそのとおりになつた	E, p.31
12	教育にたいするクララの特論は、宗教にたいする姿勢に劣らず変則的、かつ“進歩的”だった。マジの場合とは異なり、アガサを家庭で教育しただけでなく、このころには、8歳までは子供に字を読ませるはいけない、遅いほうが目のためにも頭のためにもよい、という主張を持つようになっていた。	A, p.56
13	アガサは言葉に強い興味を持っていたうえに、天性のストーリーテラーである多弁なおとなたちにまじって、たくさんのお話にとりまかれて暮らしていた。	A, p.56
14	彼女は食欲に本を読んだ。	A, p.61
15	アガサは算数も好きだった。これはフレドリックが毎朝、朝食のあとに教えた。後年、20代なかばに調剤師の資格をとったときも、物理学や化学の根本原理をのみこむのになんの苦勞もしなかつた	A, p.61
16	私はひとりっ子でしたから、自分でお話をつくって遊んだのです。	C, p.25
17	クリスティーは小学校に通わず、庭で空想上の友達を作って遊び、12歳のときに初めて、生きた、本物の女友達を、彼女の生活に登場したのである。	A, p.69
18	クリスティーは、幸福な子供時代の一つの要因として、「深く愛し合い、結婚にも、親であることにも成功した両親だった」ということを指摘している。	C, p.21
19	「おまえのような妻を持った男はかつていないよ。おまえと結婚して以来、毎年わたしはおまえを強く愛するようになった。おまえの愛情と同情とに感謝する……」(父の死の数日前の母への手紙)	E, p.232
20	「マミー。お父さんはもう安らかよ。幸せになつてる。帰つて来てほしいなんてマミー思わないわね」と慰めたのに対し、「いえ、わたしは望みますよ。お父さんが帰つて来るんだつたら、私はこの世で何でもします。私はお父さんがほしい、ここへ戻つて来てほしい」と言った。	E, p.234
21	このような父母の幸せな結びつきを身近に見て育つたクリスティーは、大人になったら理想の夫というべき男性がかならず自分の前に現れるだろうと感じて疑わなかつた。	D, p.41

注) 引用文献は略号で表記。A: morgan(上巻),1984, B: morgan(下巻),1984, C: Gripenberg,1994, D: Cade,1998, E: Christie(上巻), 1997, F: Christie(下巻), 1997, G: Christie,1962

Table 4-2

列挙法による心理学的根拠資料（母娘関係）

No	内容	引用元
22	旅行先から、“わたしの愛する、かわいい、ちいちゃな娘”に、たびたび便りをよこしている。	A, p.59
23	当時の常識にしたがって、子どもの面倒を見るのは養育係の「ナニー」(ばあや)だった。	C, p.21
24	母と対極にいたのがばあやで、ばあやは、秩序と、平安と、安定との中心だった。	A, p.44
25	大好きな母と一緒に、アガサはとても濃密な時間を過ごした。母クララは同じお話を二度することはけしてなかったし、遊んでいても、つぎつぎと思いかけないような発想をした。	C, p.22
26	わたし自身は家族の中の「血のめぐりの悪い子」ということになっていたが、それはいつも好意的なだった。母や姉の物事に対する反応は並はずれてすばやく、わたしは全然ついていけなかった。……「アガサはほんとに血のめぐりが悪い」といつもやじられた。	E, p.97
27	わたしが算数が好きということが母には不思議でしょうがなかったらしい。母は率直にみとめていたことだが、数学が嫌いであ計の計算が大苦手だったので、父がそれを引き受けてやっていた。	E, p.52
28	父が母によくいっていたように、母にはユーモアのセンスがなかった。	E, p.32
29	蝶をつかまえたガイドが、まだ生きているそれを、ピンでアガサの帽子に留め、そのままそれは、恐ろしいことに、死ぬまで帽子の上で羽ばたきつづけた。…(泣いている理由をすぐわかってくれた)クララこそは、アガサがなにも言わなくても、その気持ちをわかってくれる友だった…	B, p.37
30	(ペットのカナリアがいなくなり、クリスティーが泣き続けていた時に)メイドがおもしろそうに「ネコかなにかに捕まったんじゃないですか」といったのを母が、今すぐクビにすると脅した。	E, p.53
31	何か困ったことがあった場合の、母の愛と理解の強さである。悲嘆の真つ暗などん底にあるとき、母の手にしっかりつかまっていることが一つの安心だった。母の手に触れていると、なにか引き付けられるような、心が癒されるような気がした。病気のときなど母はかけがえのない人だった。母は自分に力と生気を与えてくれる	E, p.54
32	アガサ自身、クララとはきわめて仲のよい母娘だったことを力説している。	A, p.76
33	(ひとりめは)見切りをつけた、(ふたりめは)母は父にマドモアゼル・モーウラットはあまり成功ではなかったの、また別の人の探そうといっていた。	E, p.152
34	母は不思議な直観のひらめきを持っていた。他人がどんなことを考えているか突然わかるのだ	E, p.40
35	話し相手として、気晴らしの相手として、母はおおいにクリスティーを頼りにしていたという。…夜ごとふたりは本を朗読して過ごした。	A, p.84
36	わたしは13か4のころには、年よりもずっとませており…自分のことは自分で守っているという感じを持っていた。母に対して責任を果たしえろと考えていた	D, p.269
37	母は、クリスティーが15歳になると週二回、ミス・ガイヤーの学校に通わせることにした。	C, p.42
38	ミス・ガイヤーの学校に行っていたのは1年にもならなかった。母はまた別のことを思いついた。いつものように出し抜けに、あなたはパリに行くことになったわよ、と母は説明した。	E, p.313
39	母は例の持前の唐突さで、私はもうT女子の学校へは戻らなくていいといった。『どうもあそこは気に入りません。考え方がおもしろくありません』。実際のところ、新しいところへ行くほうがおもしろそうに思えた。	E, p.324
40	母が突然、マロニエ校には戻らなくていいといったときも、わたしは驚きもしなかった。	E, p.325
41	祖母のかかりつけの医師がパリで若い女性のための「教養仕上げ」のための学園をやっていた。『この考えをあなたどう思う?』母が聞いた。私は新しい考えを歓迎した。	E, p.326
42	母はもはや教育計画の変更を申し入れることもなくなった…母は、直感的にわたしが満足しているということを知ったのが本当のところだと思う。	E, p.326
43	クラリッサはいつも彼女に、愛されているという実感を与えてくれ、何をすることも、またどんなときでも、物事に対する能力が彼女にそなわっているように感じさせてくれた。母親の無条件の愛を確信していたからこそ、アーチャーが望んでいる、良識のある、自立した妻という理想に向かってめげずに努力することができるようにも感じていた。	D, p.84
44	母はわたしにこれから何をしようとしているかを話した。母はいつもどおり、自分の娘たちは何でもできるという完全な信条を持っていた	E, p.535

注) 引用文献は略号で表記。A: morgan(上巻),1984, B: morgan(下巻),1984, C:Gripenberg,1994, D: Cade,1998, E: Christie(上巻), 1977, F: Christie(下巻), 1977, G: Christie,1962

Table 4-3

列挙法による心理学的根拠資料（青年期）

No	内容	引用元
45	ある来客の前で演奏することを命じられて、ピアノの前にすわったとたん、“圧倒的な気おくれを感じて”、悲惨な失敗を演じ、公衆の面前で演奏する気質がないと指摘されたことを認めてあきらめたという。	A, p.104
46	オペラを歌うには声に力強さが足りないようだとやった。	C, p.47
47	マミーは私を声楽家になんかしたくなかったんでしょ？私になりたいといえさせてくださったのね	G, p.218
48	「わたしは現実には立ちかえり、希望的観測は捨てることにした。	A, p.105
49	インフルエンザの回復期で退屈していたクリスティーに、母が小説を書いてみてはどうかと進めた。	A, p.106
50	クリスティーはまず、短編小説をいくつか書き、作品をさまざまな雑誌に送りつけたが、いずれもすぐさま返送されてきた。	A, p.109
51	あちこちの出版社に送りつけた。必ずしも意外ではないが、どの社も送りかえしてきた。このとき、母クララがためらいがちに、隣人のイーデン・フィルポッツ(作家)に助言をもとめてはどうかと提案し	A, p.111
52	彼(イーデン・フィルポッツ)の反応はすばらしかった。アガサの依頼を誠実に受けとめ、これまでの作品に目を通したうえ、入念な手紙を書いて激励した。	A, p.111
53	雑誌編集者たちはアガサの初期の短編をつきかえし、ヒューズ・マッシーはけんもほろろの応対をしたかもしれない。けれどもアガサはあきらめなかった。	A, p.113
54	ここでアガサは自ら芝居を上演することに夢中になった。	A, p.100
55	アガサははたちを過ぎ、しろうと芝居はいつそう大がかりになり、出演者の幅もひろがった。	A, p.100
56	なにになるべきか、なにをすべきかなどということは、いっさい心配しなくていい——各自の“生活史”が決定してくる。“その男性”を待っていればいいし、“その男性”があらわれれば、彼があなたの全生涯を変えてくれるだろう。	A, p.96
57	母娘は<ヘリオポリス>号でイギリスを離れ、三カ月の予定で、カイロのジェジーラ・パレス・ホテルに逗留した。クララの付き添いのもとに、アガサはおよそ50回ものダンス・パーティーに出かけた。	A, p.92
58	カイロから帰国すると、アガサは1年に4、5回も田舎でのハウス・パーティーに招待されることになる。	A, p.97
59	彼はクリフォード家ではじめて会ったアガサに惹かれ。前もって約束していたパートナーがいるのに、彼女を強引に独り占めにして踊った。・・・アガサもまた、アーチャーの魅力、知性、そして性急な求愛に惹かれた。	D, p.54
60	生まれも育ちも、性向も、アーチャーはすべてにおいてロマンティックだった。	A, p.124
61	ぜひ自分と結婚してほしい、と彼は言った。彼女はレジー・ルーシーとの非公式の婚約のことを説明したが、アーチャーは歯牙にもかけなかった。いままぐ彼女と結婚したいのだとくりかえし、彼女も彼の結婚を望んでいる自分に気づいた。	A, p.128
62	クラリッサはアーチャーがどうやって娘を養っていくのかと実際の懸念をいだいた。・・・しかし、娘を苦しめるに忍びず、アガサが片意地になっていることに気づいて、二人の婚約をあえて許した。	D, p.55
<初期成人期以降>		
63	執筆は、もっとも重要な生活の一面ではなく、本を書くのは、これまでずっとそうしてきたように、他の仕事——庭いじり、料理、外出、マックス(2番目の夫)の手伝い——のあいまに限られていた。	A, p.182
64	本を書くなどということは、ほんの些細な気晴らしにしかすぎなかった。	A, p.154
65	1919年は、アガサにとっていい年だった。きれいなフラットを見つけて、その飾りつけに熱中しているし、赤ん坊の娘はおとなしく、愛らしい。夫にも満足しているし、雇い人もうまくいっている。	A, p.165
注) 引用文献は略号で表記。A: morgan(上巻),1984, B: morgan(下巻),1984, C: Gripenberg,1994, D: Cade,1998, E: Christie(上巻), 1977, F: Christie(下巻), 1977, G: Christie,1962		

第5章 伝記分析:アガサ・クリスティー II

——娘に発達の危機を経験させない母娘関係の功罪——

第4章では、母親との関係が親密であった作家、アガサ・クリスティーの母娘関係の特徴と青年期までの発達の様相について伝記資料から検証し、娘の基本的信頼感を高める母娘関係が、娘の健康的なアイデンティティ形成を促進することを示した。一方で、伝記分析の利点は、生涯を通じた視点から分析ができることである。したがって、クリスティーについても、初期成人期以降の人生を分析することで、青年期までの様相を遡及的に検証することも可能になると考えられる。

特に、第2章のクラスタ分類における「親密群」については、青年期までは健康的な発達を示していたが、将来、社会に出たときに、自律的に精神的健康を維持できるのか、という疑問が残されていることから、「親密群」に該当すると推察されるクリスティーについて(第4章)、青年期の健康的なアイデンティティ形成に寄与した母娘関係がその後にどのような影響を与えたのか、ということ、生涯発達の視点から検証することは、有意義であると考えられる。

そこで本章では、初期成人期以降のクリスティーの母娘関係、およびアイデンティティについて、伝記資料を用いて検証を進める。

1. 問題・目的

クリスティーと母親との関係は、初期成人期以降も変わらず、クリスティーが36歳のときに母親が亡くなるまで、非常に親しい関係が続いていた。青年期までの母親との親密な関係がその後も継続することについては、Josselson(1996)が縦断研究によって、女性の場合、母親との強い結びつきを青年期以降も維持するというを示しており、渡邊

(2004)は、青年期の娘の母親への依存意識と絆意識は分離されず、きわめて情緒的に親密な関係であり、それは成人期にも変わらないとしている。クリスティーの場合も、結婚後に母親との親密な関係を維持しながら、小説家としての地位を確立していったと考えられる。

クリスティーは、24歳のときに理想の相手と結婚し、青年期に確信していた「幸せな結婚をした女性」というアイデンティティを確かなものにしていったように思われたのであ

るが、しだいに夫婦関係が不安定になっていった。さらに、クリスティーはその事実をなかなか受け入れられずにかえって夫との関係を悪化させ、傷心の末、失踪事件まで起こし、その後離婚している。そして、それから数年後には再婚をし、新たな結婚生活を始めたにもかかわらず、別名義で書いた自伝的小説を出版して、夫に裏切られた主人公を悲劇のヒロインとして書くなど、最初の結婚の失敗をなかなか受け入れられなかった様子がかがわれるのである。

Erikson (1959 西平・中島訳 2011) は、漸成発達理論において、「基本的信頼感」が健康なパーソナリティの礎石であり、人間関係の形成や、困難、試練を乗り越えるための支えになるとし、さらにそれは母性的な関係性の質によって決まると述べている。クリスティーの場合は、第4章で示したように、だれよりも気持ちをわかってくれ、常に味方であると感じさせてくれる母親の愛情によって、基本的信頼感が高かったと考えられる。それにもかかわらず、最も重要であったはずの夫との人間関係の形成がうまくいかず、困難な状況に直面すると過剰に反応して状況を悪化させ、その後、いつまでも乗り越えることができなかったのはなぜであろうか。また、青年期まで健康的な発達を支えていたと考えられる、母親との親密な関係は、結婚後にはどのような影響を与えていたのであろうか。

Erikson (1959 西平・中島訳 2011) は、漸成発達理論において、生涯発達を8段階に分けているが、各発達段階に「心理社会的危機 (psychosocial crisis)」があり、その危機を乗り越えることで「活力 (virtue)」が獲得されるとした。「心理社会的危機」は、「否定的感覚 対 肯定的感覚」というかたちで表され、肯定的感覚が否定的感覚を上回るバランスで解決されることで、活力が生まれるとされる。たとえば、第一段階の危機は「基本的信頼感 対 基本的不信」で、「基本的信頼感」は、否定的な感覚である「基本的不信」という危機を乗り越えて獲得するものであることから、基本的信頼感が高く、基本的不信が低いことが健康的な発達に繋がると解釈されている。一方で、Erikson (1959 西平・中島訳 2011) は、肯定的な感覚は達成されるものではない、とし、「各段階から達成基準を作ることに熱心に取り組むあまり、不注意によってあらゆる否定的な感覚（基本的不信など）を省略してしまった論者がいるが、この否定的な感覚というのは肯定的な感覚のダイナミックな対概念であり、人生全体を通してそうあり続ける」と述べている。そして、肯定的感覚と否定的感覚の間にある一定の比率が重要で、そのバランスが肯定的なほうに傾いているならば、健康的な発達の助けになると指摘している。

しかし、これまで、Erikson (1959 西平・中島訳 2011) の漸成発達理論を用いた実証研究において、たとえば第1段階の「基本的信頼感」の高さを健康な発達を測る指標とした場合に、「基本的不信」とのバランスについて検証した研究はみあたらない。つまり、「基本的信頼感」は高いほどよく、「基本的不信」は低いほどよい、という解釈をしていることになるが、これは、Erikson (1959 西平・中島訳 2011) の主張した、ダイナミックな対概念という意味でのバランスとは異なるように思われる。

そこで、本章ではクリスティーの初期成人期以降の人生を分析し、アイデンティティの様相と、母娘関係が与えた影響について基本的信頼感の高さだけではなく、基本的不信とのバランスに着目して分析することで、適応に問題が生じた原因を検証してみたい。具体的には、伝記分析の手法にのっとり、「結婚生活に失敗したのはなぜか。また、その事実を受け入れられず、その後もひきずってしまったのはなぜか」という心理学的問いを設定し、「基本的不信についての危機を乗り越えてきた経験が乏しいため、相手の気持ちを理解できず、自分が裏切られる、という事実を認められなかったからではないか」、という仮説を設定して、これを資料から検証していく。

2. 方法

第3章、第4章で用いた、伝記研究法における個別分析の手法(大野, 2008)にのっとり分析を進める。

分析対象とした資料としては、第4章で用いた『アガサ・クリスティーの生涯』上下巻(Morgan, 1984 深町・宇佐川 訳 1987)、『アガサ・クリスティー』(Gripenberg, 1994 岩坂訳 1997)、『なぜアガサ・クリスティーは失踪したのか』(Cade, 1998 中村訳 1999)、『アガサ・クリスティー自伝 上下巻』(Christie, 1977 乾訳 1979)、小説『未完の肖像』(Christie, 1962 中村訳 2004)に加え、1922年の大英博覧会使節団として参加した1年にわたる周遊旅行中に、家族、特に母に送った書簡や写真をまとめた『The Grand Tour: Letters and photographs from the British Empire Expedition 1922』(Prichard, 2012)を参考にした。

3. 結果・考察

列挙法により抜粋した根拠資料の一部を、Table 5-1~Table 5-5に示す。本文中の伝記資料からの引用については、可読性を高めるため、Tableの通し番号 (Table 5-1: 1~18,

Table 5-2 : 19～36, Table 5-3 : 37～52, Table 5-4 : 53～72, Table 5-5 : 73～83) で表記した。また、第 4 章の根拠資料からの引用については、章番号と通し番号で表記した(例 : 4-1)。

また、資料中の呼称表記については、可読性を高めるため、本文中では一部変更して表記した部分がある。

例 : アガサ (資料) →クリスティー (本文) , クラリッサ (資料) →母 (本文)

1) 理想通りの結婚と小説家としての成功

いつか幸せな結婚ができる、と信じていたクリスティーは、20 歳前後になると当時の上流階級の慣例どおり社交界にデビューした。そして、何人かの男性との交流を経て、アーチボルト・クリスティー (以下、アーチー) と出会い、大恋愛の末、24 歳のときに結婚している (2,3,4,5,7)。実は、母はアーチーがどうやって娘を養っていくのかと実際的な懸念をいだいたが、娘を苦しめるに忍びず、クリスティーが片意地になっていることに気づいて、二人の婚約をあえて許したという (6)。この母の娘に対する姿勢は、第 4 章で明らかにしたように、常に娘の味方である、というクリスティーが子供のころから一貫したものであったととらえられる。

空軍にいたアーチーは第 1 次世界大戦で出征したため、新婚から数年、ふたりは別居生活であったが、戦後いっしょに暮らし始め、まもなく娘が生まれた。この時期は、「1919 年は、アガサにとっていい年だった。きれいなフラットを見つけて、その飾りつけに熱中しているし、赤ん坊の娘はおとなしく、愛らしい。夫にも満足しているし、雇い人ともうまくいっている」 (11) というように、青年期に確信していた「幸せな結婚アイデンティティ」が確立したと感じていた時期であったと推察される。

また、戦時中に夫と離れている間に書いた探偵小説が、戦後になって突然出版社から連絡が入って出版され、クリスティーはこれを母に捧げている (14)。さらに、母の経済状態を考えて母の家を売ったほうがいい、という夫の提案に対してクリスティーが激怒したため、夫が、ではきみがもう一冊本を書けばいいとすすめたことから、2 作目を書くことになり、それ以降、ミステリー作家としての地位を確立していつている (15)。しかし、作家として認められるようになった 1926 年のインタビューで、クリスティーは本を書くこととクッションカバーに刺繍をすることを同列に扱っている (17)。このことは、クリスティーにとって最も重要なことが結婚生活であったことを示しているといえるだろう。

2) 夫婦生活の破たん

ところが、しだいに夫婦関係はうまくいかなくなり、クリスティーが 38 歳の時に離婚をした。クリスティーにとって最も重要なアイデンティティであったはずの「幸せな結婚」はなぜ崩壊したのであろうか。

夫のアーチャーは戦後、空軍から財界に転身し、その関係で、夫婦は、世界各地の英国自治領を訪問する、1 年近くにわたる大英帝国周遊旅行に出かけている (19)。旅行中、母に送られた書簡や写真を見ると、夫婦関係は順調であったようである (84)。ところが、その旅行から帰国後、アーチャーは職を失っていた (21)。失職したアーチャーは、憂鬱な気分で過ごしていたが、クリスティーは、いずれは彼にぴったりの仕事が見つかるだろうと楽観していたようである (22)。そして、夫があまり評判のよくない会社に一応の職を得たころ (24)、クリスティーの作家としての地位は高まる一方で、彼女の肖像入りの広告の下には「今日の最も傑出した推理作家」と記されていた (26)。アーチャーは、家計のために、妻の執筆を奨励はしていたが、失意が彼を不機嫌にし、クリスティーが慰めようとする、逆に反発する始末だったという (25,27)。そして、夫の反応に動揺しつつも、クリスティーはそれを隠し、そのかわりのように家計に関して高飛車な態度を取り、自分の働きで得た金は自分のものだということを忘れさせなかったとされる (28)。つまり、彼女は彼を金の力でコントロールしようとするようになり、そのため、アーチャーの憂鬱はつのる一方で、不本意な職場ということもあって、楽しまぬ日々を送っていたようである (29)。

そのような状況が続く中で、しだいに夫婦の溝は深まり、アーチャーはゴルフ友だちであるナンシーという女性と深い関係を持つようになる。友人たちはほとんどがアーチャーとナンシーの情事について知っていたにもかかわらず、クリスティーはアーチャーの情事にまったく気づかなかったという (33,37)。それどころか、何度かナンシーを自宅に招待していたり、(姉のマッジとコルシカ島にでかけたときも) 自分の留守が夫に、愛人と会う恰好な機会を提供することなど、まるで気づいていなかったようであった (38,39)。

その後、母が他界したとき、アーチャーは、快活な、陽気とさえ言えるような態度をとって妻を元気づけようとつとめた。これは傷心のクリスティーにとってははなはだ心外な対応で、どうしてそんなに心なしな態度が取れるのかとショックを受け、彼を責めた (38)。ふたりの溝はさらに深まり、(クリスティーの問いかけに対し) アーチャーは、自分はナンシーを愛しているのだと告白するにいたった (46,47)。口論は絶え間がなかったが、それでもアーチャーはまだ、妻のもとから永久に去るかどうかが、決めかねていたとされる。しか

し、クリスティーはこのことを理解せず、癩癩を起して、ティーポットを夫に投げつけた
りしていたという (51)。そして、このようなことが続くなかで、有名な失踪事件が起き
ている。

3) 失踪事件から離婚へ

当時、すでに有名作家であった「アガサ・クリスティー」が行方不明になり、コート、ア
タッシュケースが入ったままの車が路上でヘッドライトをつけっぱなしで見つかったこと
から、警察が捜査を始め、イギリス中でニュースとなって、夫アーチャーへの疑いもかかった
という (53,54,58)。

数日後にホテルで発見されたクリスティーは、気落ちした口調でアーチャーに、「二人の結
婚生活がどうしようもなく破たんしかけていることを悟って、あなたにあてつけるために
故意に失踪的一幕を演出したのだ」と包み隠さず語ったという (55)。この事件は、夫を失
うことに耐えられずに、彼女の知っている唯一の方法で、すなわち事細かに計画し、復讐の
意図をミステリーのオブラートに包んで夫に思い知らせようとしたと解釈されている (56)。
クリスティーの親友であったナンによると、「(失踪の朝) 彼女はナンに、もしもアーチャー
がナンシーを選び、わたしを捨てる気なら、絶望のあまり、何をするかわからないと言った。
さらに車をニューランズ・コーナー (アーチャーとナンシーがいるところからほんの数マイル)
に乗り捨てようと思うとも告げた。乗り手なしの車が発見されれば、ナンシーと過ごすはず
のアーチャーの週末は計画倒れになるだろう。妻殺しの嫌疑をかけられ、うるさく質問されて、
3, 4 日は不快な思いをするのではないだろうか。アガサはいずれ発見されるだろうが、そ
のときは記憶喪失を主張したらいいだろう。そうすればやっかいな説明はせずにすむ。そん
なふう二人は話し合った」 (57)、ということであった。

結局、関係は修復せず、クリスティーは 38 歳で離婚をした。その後、40 歳で再婚し、推理
作家としても精力的に本を出していたが、44 歳のときにメアリー・ウェストマコット名義
で推理小説ではない『未完の肖像』を出版した (65)。クリスティーはこの「ペンネーム」
の秘密を守ろうと努力し、15 年間成功したが、あるジャーナリストに暴露されたときには
烈火のごとく怒ったという (66,72)。しかし、それより前に、クリスティーが「たった一人
だけわたしの秘密をかぎつけた人物があった…ナン・ワッツ、今のナン・コンである」(70)
と自伝で書いているように、クリスティーの生涯の友であり、失踪事件のときにもクリス
ティーから詳細を聞いていたナン・ワッツが、すぐにこれがアーチャーとアガサのことを書い

た本であるとわかったという。さらに家族関係や子供のころからのエピソードは、その後書かれる自伝と重なっていることから、『未完の肖像』は明らかに自伝的小説と考えられている。その中で、ヒロインのシーリアは、夫に裏切られ、失意の中で自殺まで図ろうとする。クリスティーは「あたしは夫を愛し、彼が望むすべてをしてきた。…本当にひつようとしているとき、彼は私の背中を刺したのだ」(71)とシーリアに語らせ、犠牲者として描こうとしている。アーチャーとの離婚から6年経過し、すでに再婚して順調な結婚生活を送っていたにもかかわらず、この小説を書いていることから、最初の結婚で自分を傷つけた夫アーチャーへの恨みが、クリスティーの中に深く残っていたと推察される。

4) 成人期の母娘関係

幼少期から、親密な関係にあったクリスティーの母娘関係は、結婚後も変わらず、結婚当初、夫婦で出かけた大英帝国周遊旅行中には、クリスティーは日記のように母親に手紙を送っている(84)。また、母の的確な助言も健在で、最初の推理小説を書くときも、クリスティーが途中で行き詰まると、「二週間ほど休暇をとってよそへ行き、そこでそれを仕上げてはどうか」(9)と助言し、その処女作は母に捧げられている(14)。さらに、2作目を書いたのは、経済状態が厳しくなった母の家を売らないためであり(15)、その後、売れっ子作家になって経済的余裕ができると、近くに家を買って母を住ませている(32)。また、「自分の車を持つことの大きな楽しみのひとつは、アッシュフィールドへ行って、母をドライブに連れ出すことだった」(18)と振り返っているように、非常に親密な関係を続けていたと考えられる。

一部の友人たちは、アーチャーが、クリスティーの母にたいする献身的な愛情に、嫉妬を感じていたのではないかと、そのため、母が近くにきたことで妻の生活からますます締め出されているような不満を感じずるようになったとみている(42)。自伝的小説『未完の肖像』において、夫に裏切られた主人公が精神的に追いつめられて徘徊する様子が書かれているが、そのとき主人公は母親を探しており、「マミーさえ見つければなんとかなる気がした」(44)と語っている。これは、クリスティーが自伝で「何か困ったことがあった場合の、母の愛と理解の強さである。悲嘆の真っ暗などん底にあるとき、母の手にしっかりつかまっていることが一つの安心だった。…母は自分に力と生気を与えてくれる」(4・31)と述べているように、幼少期から変わらぬ母への思いであり、夫に裏切られ、信じられるのは母だけだという、失踪事件を起こしたときのクリスティーの心情ではないかと思われる。

以上のことから、クリスティーは結婚後も、母との結びつきが強かったことが示された。これは、成人期になっても娘の母への依存は解消されない（北村・無藤, 2001）、娘は自律し、分化していてもなお、母親にアドバイスを求め、ヒエラルキーを信頼している場合がある（Rastgi, 2002）、という先行研究の結果と一致している。

5) 「基本的信頼感」と「基本的不信」のバランス

クリスティーは、22歳のときに結婚し、青年期に獲得したアイデンティティの感覚をより確かにしていったと考えられるが、結婚生活は破たんする。その理由について、クリスティー自身は、自伝で「わたしは1年間、彼が変わってくれることを望みながら最後まで辛抱していた。だが、彼は変わってくれなかった」（68）と書き、自伝的小説『未完の肖像』でも、自分を何の罪もない犠牲者に擬して書いている（71）。ちなみに、アーチャーはその時の相手の女性と生涯添い遂げていることから、アーチャーにだけ問題があったとは考えにくい。

クリスティーは、「アーチャーはいつも私自身が不確かだと思っていることを、できるのが当然のようにしている。『もちろん、できるよ』と彼は言うのである」と結婚当時を振り返っており（16）、当初、夫も母のように自分に自信を持たせてくれる味方だと感じていたようである。しかし、夫が失業して落ち込んでも、その気持ちを理解せず、クリスティーの無神経さにいら立つ夫に対し、小説で成功したお金で支配しようとした（28,29,30）。また、母が死んで落ち込むクリスティーを陽気に励まし、旅行に誘う夫の態度については、薄情で冷たいとしか受け止められず、ショックを受けている（41）。さらに、夫の浮気に対し、離婚は受け入れられないと主張しながら、やり直そうとする夫に対し、癩癩を起して関係をより悪化させ、最後は、夫に思い知らせるため「失踪事件」を起こすのである（57）。これらのことから、クリスティーは相手の気持ちを推し量ることができなかったように思われる。自分は理解されたいが、相手を理解する努力をしなかったのではないだろうか。

クリスティーは、人は裏切らない、自分はこのままでいい、自分は愛される、きつとうまくいく、という気持ちが強いことから、基本的信頼感が非常に強いと考えられる。しかし、他者の気持ちを推し量って遠慮することや、よくない結果を想定して、そうならないよう努力することがなかったように思われる。自伝的小説である『未完の肖像』の中でも、主人公は、結婚に何の困難も破たんの可能性も予見しなかったが、夫を絶対的に信じたというよりも、相手の気持ちを理解できず、自分を裏切るかもしれない、という発想そのものを封じ込めてたのではないかと読み取ることができる。

第4章で、青年期に基本的信頼感が高かったことを示したが、本来、第一段階の「基本的信頼感」は、否定的な方向性である「基本的不信」という危機を乗り越えて獲得するものであるとされる（Erikson, 1959 西平・中島訳）。クリスティーの場合は、裕福な家庭で両親と使用人の愛を一心に受け、競い合う兄弟も友達もそばにおらず、10代半ばまで、理不尽な思いをしたことがなかったということから、基本的不信を経験する機会が少なかったと考えられる。さらに、問題が起きて、母がいつも原因を外在化して娘の味方をすることで、自分には非はなく、裏切られることもない、と思いつまようになっただけではないかと推察される。ちなみに、母クララ自身は、9歳のときに父親が死に、伯母のところの養子となっている（81）。実子のいない伯母が望み、クララの母も夫を失って前途を悲観していたためであったが、9歳の幼い少女は、深い孤独感とホームシックに苦しめられ、母が自分を手ばなしたのは、普通考えられるように、女の子のほうが自力で世の中に出てゆくのがむずかしいためではなく、むしろ、男の子のほうを、娘の自分より大事にしていたためではないか、と信じていたという（82）。このようなことから、母のクララは、不信で苦しんだ経験があったと考えられ、自分の娘に対して、自分と同じ思いをさせたくないという思いの強さが、娘に基本的不信というネガティブな方向性を経験させないようにすることによって、娘の基本的信頼感を高めようとする養育態度に結びついたのでないかと思われる。その結果、クリスティーは、基本的不信と向き合い、乗り越えることをしないまま、基本的信頼感を形成したことになり、本来の意味の活力が獲得できなかったのではないかと考えられる。

以上のことから、「結婚生活に失敗したのはなぜか。また、その事実をなかなか受け入れられず、その後もひきずってしまったのはなぜか」という心理学的問いに対して、「基本的不信についての危機を乗り越えてきた経験が乏しいため、相手の気持ちを理解できず、自分が裏切られる、という事実を認められなかったからではないか」、という仮説を支持する方向の結果が得られたと考える。

さらに、第4章では、クリスティーの有能感の高さについても示したが、これも本来は、漸成発達理論の第4段階「勤勉 対 劣等感」の否定的な感覚である「劣等感」を克服して獲得する活力である（Erikson, 1959 西平・中島訳 2011）。しかし、クリスティーの場合は、母の意向で小学校に行かず、同世代との接点がないため、劣等感を感じる機会がほとんどなかったと推測される（4-17）。その一方で「何でもお見通し」の母が、あなたはどんなことでもできる、という自信を常に与えてくれたことで、有能感を形成していった可能性が

高い(4-43,44)。そのため、劣等感を持つ人の気持ちが理解できず、夫を傷つけても気づかなかったと考えられる。

4. 総合考察

本章では、母との親密な関係をもとに青年期にアイデンティティを形成していったクリスティーについて、初期成人期以降の母娘関係とアイデンティティの様相を分析することで、以下のことが示された。

- (1) 結婚しても、母との特別に親密な関係は続いており、その母が享受していた幸せな結婚生活を自分も手に入れられると信じていた。
- (2) 思い描いた通りの結婚生活でアイデンティティを確立したように思われたが、結婚生活が行き詰まると、責任はすべて夫にあると考え、関係をより悪化させた。
- (3) 有名作家になった自分に対し、失業して思うような仕事が見つからない夫が憂鬱な気持ちでいることは理解できなかった。
- (4) たとえどんな状況になっても、自分が信じた相手が自分を裏切るということは想像できず、そうならないために努力することもなかった。
- (5) 何年もたってから、薄情な夫と傷ついた妻という自伝的小説を書くなど、最初の結婚の失敗の傷は癒えず、自らを何の罪もない犠牲者としてとらえていた。

これらのことから、母親に守られている間は表面化しなかった不健康な人格特性が、母親の支えが得られない状況で、自分の思い通りにいけなくなったときに表面化したと考えられる。具体的には、まず、すべてうまくいくはず、という過信があり、よくない結果が起こることを想定して、そうならないように努力することがなかった。また、自分は愛される、理解される、という気持ちが強く、そうならないときには、相手に原因があると考え、自分を犠牲者とみなした。さらに、自分とは異なる、相手の気持ちを推し量ることができなかった。つまり、「基本的信頼感」が非常に高いが、「基本的不信」という感覚が欠如していたために、共感性が育たなかったのではないのではないかと推察される。そして、他人を傷つけるようなことをしてしまうような人間の負の部分を理解できない、また、そうってしまった相手の気持ちや弱さを理解できないため、相手の態度は自分にとって「理不尽な裏切り」という見え方しかしないのではないかと考えられる。ちなみに、クリスティーは自伝の中で、離婚の経緯についてはさらりとしか触れていないが、「わたしに理解できなかったの

は、その時期の彼がわたしにずっと薄情だったことである。…今では少し理解できる気がしている。彼が不愉快な様子をしていたのは、心の底ではわたしのことを愛していて、わたしのことを傷つけるのが本当にいやだったからだ」とわたしは思う」と述べている。自伝なので、忝意が入っているとしても、本質的なところでは、自分が相手を傷つけたのではないかということとは最後までわからないままであったように思われる。

クリスティーの育った家では、家族のアルバムで、各自の考えたこと、感じたこと、その他を記録しておく、通称<告白>という一巻があるが(73)、クリスティーは、4歳の時に書いた<告白>の一節に、不幸について、「好きな人がいなくなること」(74)と書いている。また、父の死後、しだいに、「母が町で電車に轢かれはせぬか、夜中に急死しはせぬかという不安に襲われるようになった」(75)という。これらのことから、大切な人を失うのではないかという潜在的な不安感を読み取ることができる。さらに、子どものころ、特別に恐ろしい悪夢を繰り返し見たということ自伝でも自伝的小説でも書いている

(76)。本来その場所にいるはずのないだれかの存在を意識しはじめ、クリスティーはこの人物を<ガンマン>と呼んでいた。クリスティーが家族や友人にとりまかれていると、とつぜんそのひとり、たとえば母が、見た目はいつもと変わらないのに、ほんとうは<ガンマン>になってしまっているのに気づくという(77)。実際にはクリスティーの信頼を裏切ることなどなかったはずの身近な、親密な人物が、突然敵意を持った他人に変貌する、という形式からは、「基本的不信」との葛藤を経ない「基本的信頼感」を発達させたことによる、根拠のない、潜在的な不信を読み取ることができる。クリスティーに他の女性を愛している、と伝えたときのアーチャーは、ガンマンがついに実際に現れた、ということであったと考えられる(47)。

Erikson (1959 西平・中島訳 2011) は、漸成発達理論において、肯定的感覚と否定的感覚の間にある一定の比率が重要であるとしている。つまり、肯定的な感覚のみが備わればよいという訳ではなく、否定的感覚との拮抗の結果、肯定的な感覚が勝っていくことで、より健康的な発達をしていくことになり、その結果、「活力」が生まれると述べている。従って、肯定的な感覚の高さのみで健康的な発達を測ることは、不十分であると考えられる。

これまで、「基本的信頼感」の高さについての研究は多くあるが、「基本的不信」に向き合う機会が少なすぎることの問題について議論されている研究はみあたらない。本研究では、母親が娘を「基本的不信」から遠ざけることによって高められた「基本的信頼感」は、母親が娘を守ることができるうちは問題ないが、結婚や社会に出ることによって母親の保護

から離れると、非常に脆いものであることを示すことができたと考える。

さらに、漸成発達理論の第4段階、「勤勉 対 劣等感」についても、クリスティーの母が、常に活力である「有能感」を与え続けたことと、競争する同世代の友人がいなかったため、劣等感を感じる経験が乏しかったことにより、他者の劣等感を理解できなかったのではないかと考えられる。たとえば、夫のアーチーの仕事がうまくいかなかった時に、作家としてどんどん成功するクリスティーに対して抱いたであろう劣等感を感じ取ることができなかったため、お金で支配するという逆効果のことをしてしまったのではないかと推察される。

以上のように、本章では、Erikson (1959 西平・中島訳 2011) が漸成発達理論において提唱している、肯定的感覚と否定的感覚のバランスが重要であること、つまり、一定の否定的感覚を持っていることも必要であることを明らかにしており、漸成発達理論の解釈のために有意義な結果を示すことができたと考える。

また、第2章において、母娘関係についてのクラスタ分析により見出した4群の中で、もっとも人数の多かった「親密群」は、青年期には健康的な発達を示していたが、幼少期から築かれた母親との信頼関係を維持し、その安心感の中で自我を形成してきたため、母親との分離の傾向が生まれにくく、逆に依存のような「結合」の不健康な面が生まれる可能性があるのではないかと推測された。そのため、母親に認められた価値観と社会的な価値観との間に齟齬が起きたときに、自律的に対処できるのか、アイデンティティや精神的健康を維持できるのか、ということが今後の課題として残された。次に、第4章では、クリスティーの母娘関係を分析した結果、「親密群」の典型であることが示された。

そこで、本章では「親密群」の特徴を持つクリスティーの、初期成人期以降の伝記資料の分析から、母の庇護を得られないところで、その人格の脆弱性が表面化したことを見出し、青年期に「親密群」であった女性が将来陥るリスクについての具体的事例を示したことによって、量的研究の結果を質的研究で補完することができたと考える。このことは、昨今増加しているとされる一卵性母娘（信田, 2008）と言われるような仲良し母娘についても、就職や結婚で社会と適応できないような問題が生じる可能性があることを示しているといえるであろう。

5. 今後の課題

本章では、基本的不信、および劣等感の少なさについて分析したが、大人に守られ大事にされていたクリスティーは、漸成発達理論第2段階の「自律 対 恥と疑惑」についても、否定的な方向性の「恥と疑惑」を感じる機会が少なく、第3段階の「主体性 対 罪の意識」についても、罪の意識を持つ機会が少なかった可能性が考えられるため、分析してみるとは有効であろう。それによって、Erikson (1959 西平・中島訳 2011) が示した、肯定的な感覚と否定的な感覚のバランスの重要性について、さらに理解を深めることができると考える。

また、本章では、クリスティーの結婚から離婚にいたるまでを中心に検証したが、クリスティーは、離婚後、40歳のときに考古学者のマックスと再婚している。その後、86歳で亡くなるまで、精力的にベストセラー小説を出し続け、考古学者として成功した夫と40年以上にわたる結婚生活を全うした。クリスティーは2つの条件をつけてマックスのプロポーズを受け入れたという。彼女はまず、二人のあいだでは収入も所有物もことごとく折半することにしたいと言った。第二の条件はゴルフはぜったいにしないでほしいというものであった(64)。これは、最初の結婚で、お金の件で関係が悪化したこと、夫がゴルフに熱中したために、自分のことを顧みず、ゴルフ仲間と不倫してしまったということを念頭に置いたものと考えられ、今度こそ「幸せな結婚生活」を手に入れたらいいというクリスティーの思いが伝わる。再婚相手のマックスとの関係は順調にみえたが、年下であったマックスに愛人がいたことにクリスティーは気づいていたようで、知人のジュディスと夫のグレアム・ガードナーは、1947年、マックスがロンドン大学の考古学の教授に任命された後、クリスティーは夫について危惧の思いを抱くようになったと語っている(78)。そして、マックスとバーバラのお互い同士にたいする情熱は激しく、はたの目をあまり意識しなくなっていた(79)というのに対し、クリスティーはストイックにふたりの関係を見て見ぬふりをしていったというのである(80)。マックスはクリスティーと別れるつもりはなかったようで、クリスティーの最期を看取っている。つまり、クリスティーは成功した小説家であり、幸せな妻として人生を終えることができたということである。最初の結婚の失敗を教訓にして、夫の浮気を見て見ぬふりをしたと思われるが、それは「妻の座」を守るため、幸せな結婚生活を手に入れた女性でいるための選択であったのではないだろうか。クリスティーは、最初の結婚の失敗後も、相手の気持ちは理解できず、自らを被害者にとらえていた。2度目がうまくいったのは、共感性が高まったからではなく、直接的な原因を排除する、ということ

をただけであり、晩年の30年近く、夫の浮気をみないふりをしていたクリスティーの中の葛藤は大きかったはずだが、それでも最も重要であった「幸せな妻アイデンティティ」を守りたかったように思われる。今後、そのような視点で、後半の人生を検証してみると、生涯発達の視点から大変有効であると考えられる。

Table 5-1

列挙法による心理学的根拠資料①

No	内容	引用元
1	彼女の側で激しく熱をあげた恋というのは、いずれも短命であったし、いつぼう、熱烈に迫ってくるボールトン・フレッチャーや、善意だけのウィルフレッドからは、彼女のほうで思慮ぶかく身をひいていた。	A, p.123
2	アガサはもっと強引で、性急な人物と知りあい、そのペースに巻きこまれてしまったのだ	A, p.124
3	生まれも育ちも、性向も、アーチャーはすべてにおいてロマンティックだった	A, p.124
4	アーチャーは、まさしくダーモットとおなじに、“旋風とともに”アガサの生活にはいりこんできた。	A, p.127
5	彼はクリフォード家ではじめて会ったアガサに惹かれ、前もって約束していたパートナーがいるのに、彼女を強引に独り占めにして踊った。・・・アガサもまた、アーチャーの魅力、知性、そして性急な求愛に惹かれた。	D, p.54
6	クラリッサはアーチャーがどうやって娘を養っていくのかと実際の懸念をいだいた。・・・しかし、娘を苦しめるに忍びず、アガサが片意地になっていることに気づいて、二人の婚約をあえて許した。	D, p.55
7	英国航空隊への入隊申請が受理されたので、まもなくエクセターを去って、ファーンバラへ行かなくてはならない、と。ついては、ぜひ自分と結婚してほしい、と彼は言った。彼女はレジー・ルーシーとの非公式の婚約のことを説明したが、アーチャーは歯牙にもかけなかった。いままぐ彼女と結婚したいのだとくりかえし、彼女も彼との結婚を望んでいる自分に気づいた。	A, p.128
8	このきわめて重要な4年間、ふたりはずっと離れて暮らし、おたがいに困難な時期、不安定な時期を支えあって過ごすことを学んだとはいえ、何週間もつづけていっしょにいるよりは、むしろ、会ったり別れたりすることに慣れてしまっていた。	A, p.152
9	書きだすとそれに夢中になったが、中途まで進んだところで、プロットの展開と取り込むことに疲れ、不機嫌になることが多くなった。ここでまたクララが、時宜を得た助言をした。二週間ほど休暇をとってよそへ行き、そこでそれを仕上げようかというのだ。	A, p.161
10	戦争終結と同時に、アーチャーは空軍を辞め、一旗あげるために財界に転身することに決めていた。	A, p.164
11	1919年は、アガサにとっていい年だった。きれいなフラットを見つけて、その飾りつけに熱中しているし、赤ん坊の娘はおとなしく、愛らしい。夫にも満足しているし、雇い人もうまくいっている。	A, p.165
12	1919年、アーチャーは空軍省の仕事をやめて、インペリアル・アンド・フォレン・コーポレーションの重役に加わった。・・・アーチャーは有頂天になった。	D, p.60
13	1919年、「スタイルズ荘の怪事件」出版の申し入れ 1920(アメリカ), 1921年(イギリス)で出版。	D, p.60
14	単行本は1920年にアメリカで、つづいて1921年には、定価7シリング6ペンスでイギリス版が刊行された。アガサはこれを母クララにささげた。	A, p.167
15	はじめアーチャーは、クララがもっと経済的に、かつ便利に暮らしてゆくためには、アッシュフィールドを手ばなすのが得策ではないかと提案するが、アガサがとてもそんなことは考えられないと激しく抗議すると、ではきみがもう一冊本を書けばいいとすすめた。	A, p.167
16	アーチャーはいつも私自身が不確かだと思っていることを、できるのが当然のようにしている。「もちろん、できるよ」と彼は言うのである。	F, p.110
17	作家として認められるようになった1926年になってもなお、アガサは、本を書くこととクッションカバーに刺繍をすることを同列に扱っている。	C, p.91
18	車を持つことの大きな楽しみのひとつは、アッシュフィールドへ行行って、母をドライブに連れ出すことだった。	F, p.111

注) 引用文献は略号で表記。A: morgan(上巻),1984, B: morgan(下巻),1984, C:Gripenberg,1994, D: Cade,1998, E: Christie(上巻), 1977, F: Christie(下巻), 1977, G: Christie,1962,H:Prichard,2012

Table 5-2

列挙法による心理学的根拠資料②

No	内容	引用元
19	世界各地の英国自治領を訪問する、まる一年間にわたる親善旅行であった。	A, p.171
20	大英帝国周遊旅行後の5年間に、アガサは大きな変貌を遂げた。プロの作家へと変貌したのだ。	A, p.206
21	(1922年の親善使節団としての世界一周旅行から帰ると)アーチャーは職を失っていた。	D, p.64
22	失職したアーチャーは憂鬱な気分でもどろしてしたが、アガサはいずれは彼にびったりの仕事が見つかるだろうと楽観していた。	D, p.64
23	失業中のアーチャーはそのころ、精神的にますます落ち込みアガサは…。	D, p.66
24	アーチャーはやがてあまり評判のよくない会社に一応の職を得た。	D, p.67
25	アーチャーはいまや年齢34歳にして、適所を見いだすことの困難に直面していた。失意が彼を不機嫌にし、アガサが慰めようとする、逆に反発する始末だった。	A, p.210
26	<スケッチ誌>に載せたポアロものの短編が好評(連載は23年3～5月)…彼女の肖像入りの広告の下には「今日の最も傑出した推理作家」と記されていた。	D, p.68
27	アーチャーは、妻の文筆活動が家計をうるおすことを多として、それを奨励してはいたものの、彼女が目されるにつれて、あまり快く思っていないふしが見えはじめていた。「しゃべりつづけにしゃべるんだな」と冷たく言いすてたりした。	D, p.68
28	こんな夫の反応に動揺はしたものの、アガサはそれを秘しかくしていた。そのかわりのように彼女は家計に関して高飛車な態度を取り、自分の働きで得た金は自分のものだというのを忘れさせなかった。	D, p.69
29	彼女は彼を金の力でコントロールしようとするようになった。このため、アーチャーの憂鬱はつる一方で、不本意な職場ということもあって、楽しめぬ日々を送っていた。	D, p.69
30	(24年ごろ)アガサはいまでは自他ともに認めるプロの作家だった。…アーチャーとアガサは金の問題でたえず口げんかをしてきた。彼女は自分が文筆で得た金を夫と分かち合おうとはしなかった。アーチャーが少しこっちにまわしてくれ、というつど、彼女は夫の求めを拒んだ。	D, p.73
31	アガサの作家としての成功によって、アーチャーの影は薄くなった。1925年を通じて金銭問題をめぐる二人の疎隔はつづき、売り言葉に買い言葉、口論は絶えることがなかった。	D, p.78
32	経済的に自立したために、アガサは同じスコッツウッドのべつなフラットに母親を住ませることができた。アーチャーはもともと、妻の実家と妻の密接な結びつきにたいしてひそかに嫉妬していたので、クラリッサが近くにきたことで妻の生活からますます締め出されているような不満を感じるようになった	D, p.73
33	(25年)「アクロイド殺し」の執筆に追われていたアガサはアーチャーの情事にまったく気づかなかった	D, p.75
34	6歳になったロザリンドは父親によく似た、実際的なたちで、これはユーモアのセンスをあいまって父親と娘のあいだに特別な愛情が通う理由となった。アガサはしばしば、自分がふたりの結びつきから締め出されているような気持ちを感じた。	D, p.77
35	ロザリンドに対するアガサの愛情はふかく、クラリッサとかつての自分のようなつながりを娘とともにできないことを寂しく思っていた。	D, p.77
36	彼はアガサにもっと体重を減らすように口癖のように言っていたが、アガサにはそれができず、夫が自分のスタイルについて残酷にからかうのを無念の思いで聞き流していた	D, p.79

注) 引用文献は略号で表記。A: morgan(上巻),1984, B: morgan(下巻),1984, C: Gripenberg,1994, D: Cade,1998, E: Christie(上巻), 1977, F: Christie(下巻), 1977, G: Christie,1962,H:Prichard,2012

Table 5-3

列挙法による心理学的根拠資料③

No	内容	引用元
37	(26年)いまで はクリスティー夫妻の友人たちはほとんどがアーチャーとナンシーの情事について知っていた	D, p.81
38	26年の前半, アガサは何度か, ナンシーを自宅に招待している。アーチャーは同年の後半になると, ナンシーが滞在すると自分のゴルフの腕が鈍ると文句を言ったりしたが, アガサはそれを額面どおりに受け取っていた	D, p.82
39	(姉のマジックとコルシカ島にでかけたが)自分の留守が夫に, 愛人と会う恰好な機械を提供することなど, まるで気づいていなかった	D, p.82
40	クララの死はアガサにとってとくに大きなショックだった。なんといってもクララとアガサはとても強い絆で結ばれていたのだ。	C, p.95
41	(出張中だった)アーチャーはアガサのもとにもどってきたが, 快活な, 陽気とさえ言えるような態度をとって妻を元気づけようとつとめた。これは傷心のアガサにとってははなはだ心外な対応で・・・どうしてそんなに心なしな態度が取れるのかとアガサはショックを受け, 彼を責めた。アーチャーはまだスペインに用事があり, 一緒に行こうと妻を誘ったが・・・その申し出をにべもなく断った	D, p.84
42	一部の友人たちは, 彼が嫉妬していたのではないか――アガサのクララにたいする献身的な愛情に, 嫉妬を感じていたのではないかと見ている。だがいづれにせよ, 悲嘆に沈む妻のもとへ帰ったとき, 彼は当惑し, 居心地の悪さを感じていた。	A, p.246
43	(父から母への最後の手紙を見つけて)自分の結婚も両親のそのように愛情にあふれていること, アーチャーとの固い絆で結ばれていることを相変わらず信じて・・・	D, p.85
44	マミーさえ見つかればなんとかなる気がした『未完の肖像』	G, p.498
45	アーチャーとロザリンドをひたむきに愛しているながら彼女は, 夫も娘も自分が必要としているような愛をあたえてくれないように感じていた。	D, p.85
46	まず彼は, 休暇旅行に出かける手配などなにもしていないことを認め, やがて最後には, ゴルフ友達であるミス・ナンシー・ニールという女性と, 相思の仲になっていることを打ち明けたのだった。	A, p.251
47	(アガサの問いかけに対し)アーチャーは自分はナンシーを愛しているのだと告白した。彼女がひたむきに愛してきた男, 偶像崇拜に近い気持ちで敬愛してきた夫が突然, 変貌し, あの非常な「ガンマン」になっていた	D, p.86
48	告白から2週間後, アーチャーがスタイルズ荘に帰ってきて, 自分が間違っていたのかもしれない, 結婚を解消するのはよくない, ロザリンドのためにもしばらくこのまま生活を続けようと言った	D, p.88
49	離婚はロザリンドが父親を失うことを意味するから, その点でもぜったいに了承できないとアガサは主張し, 口論のあげくに夫にむかって手近なものを投げつけることさえあり, 夫婦仲は悪化するばかりだった。	D, p.90
50	失踪に先立つ2週間前, アガサが夜は眠れず, ほとんど食事がとれない有様だった。	D, p.94
51	何より耐えがたかったのは, 母親の死の直後に夫の不倫があきらかになったことであつた。アガサは自分を何の罪もない犠牲者に擬し, 夫婦の結びつきの崩壊には自分にも一半の責任があつたことを悟らなかつた。口論は絶え間がなかつたが, アーチャーはまだ, 妻のもとから永久に去るかどうか, 決めかねているのであつた。アガサはこのことを理解せず, 癡癡を起して, ティーポットを夫に投げつけた。	D, p.94
52	失踪の朝, アガサとアーチャーは激しい口論をした・・・アガサは自分に隠れてナンシーと逢いびきしているとアーチャーを責めた。アーチャーは・・・ちゃんと結婚するつもりでいる, と言い切り, 荒々しい物腰で仕事に出かけて行った。	D, p.94

注) 引用文献は略号で表記。A: morgan(上巻),1984, B: morgan(下巻),1984, C:Gripenberg,1994, D: Cade,1998, E: Christie(上巻), 1977, F: Christie(下巻), 1977, G: Christie,1962,H:Prichard,2012

Table 5-4

列挙法による心理学的根拠資料④

No	内容	引用元
53	(12月3日)その夜、アーチャーはついに帰ってこなかった…9時45分、アガサは車に乗った(失踪事件へ)	D, p.96
54	恋敵の名前を使って、テレサ・ニールとして部屋をとっていたのである。	C, p.100
55	アガサは気落ちした口調でアーチャーに、二人の結婚生活がどうしようもなく破たんしかけていることを悟って、あなたにあてつけるために故意に失踪の一幕を演出したのだと包み隠さず語った。	D, p.163
56	夫を失うことに耐えられずに、アガサは彼女の知っている唯一の方法で、すなわち事細かに計画し、復讐の意図をミステリーのオブラートに包んで夫に思い知らせようとしたのであった。	D, p.163
57	(失踪の朝)彼女はナンに、もしもアーチャーがナンシーを選び、わたしを捨てる気なら、絶望のあまり、何をするかわからないと言った。さらに車をニューランズ・コーナー(アーチャーとナンシーがいるところからほんの数マイル)に乗り捨てようとも告げた。乗り手なしの車が発見されれば、ナンシーと過ごすはずのアーチャーの週末は計画倒れになるだろう。妻殺しの嫌疑をかけられ、うるさく質問されて、3、4日は不快な思いをするのではないだろうか。アガサはいずれ発見されるだろうが、そのときは記憶喪失を主張したらいいだろう。そうすればやっかいな説明はせずにすむ。そんなふう二人は話し合った。	D, p.164
58	アガサは、キャンベルあての手紙から、自分の所在は容易に知れるだろうと考えていたので、このように発見が遅れ、失踪事件として新聞におおげさに取り上げられようとは意外だったと夫に言った。	D, p.167
59	アガサの作品のうちにはアーチャーに似た風貌の男が、そうした男たちの不運な愛についての暗示とともに繰り返し登場する。	D, p.229
60	アガサの状態に接して仰天した。食べることもできなければ、眠ることもできず、終日涙に暮れているばかり。	A, p.252
61	さまざまな理由から、彼女は離婚を望まなかった。	A, p.255
62	極度の不眠に悩み、仕事も手につかず、食欲はほとんどなかった。見る影もなく痩せ衰えて、自分ばかりでなく、周囲のみんなを、それによって苦しめていた。	A, p.259
63	1928年4月、アーチャーとの離婚が成立した。	A, p.312
64	彼女は2つの条件をつけてマックスのプロポーズを受け入れた。彼女はまず、二人のあいだでは収入も所有物もことごとく折半することにしたいと言った。第二の条件はゴルフは絶対にしないほしいという…。	D, p.231
65	1933年に書いた最後の本は、『未完の肖像』だった。登場するふたりの主要人物、シーリアとダーモットのモデルは、アガサ自身とアーチャーである。	B, p.59
66	つらい時期の思い出を、作中人物や物語に投影することだけが、心のうちをさらけ出す手段だったのである。“メアリー・ウェストマコット”は二重の保護策だった。	B, p.60
67	わたしに理解できなかったのは、その時期の彼がわたしにずっと薄情だったことである…今では少し理解できる気がしている。彼が不愉快な様子をしていたのは、心の底ではわたしのことを愛していて、わたしのことを傷つけるのが本当にいやだったからだわたしは思う	F, p.153
68	わたしは1年間、彼が変わってくれることを望みながら最後まで辛抱していた。だが、彼は変わってくれなかった。	F, p.154
69	ひたすら味方になってくれ、わたしのすることに自信を持たせてくれた人、それは義兄ジェームスだった。	F, p.157
70	わたしは同じ名義で『未完の肖像』という小説を書いた。たった一人だけわたしの秘密をかぎつけた人があったーナン・ワッツ、今のナン・コンである。	F, p.397
71	あたしは彼を愛して彼が望むことをなんでもしてきた…それなのにあたしがはじめて本当に彼を必要としていたとき…私の背中を刺したのです。(『未完の肖像』)	G, p.524
72	アガサはずっとこの「ペンネーム」の秘密を守ろうと努力しており、15年間、それに成功し続けるのだが、1947年にあるアメリカのジャーナリストが、これがアガサのペンネームであることを暴露したとき、アガサは烈火のごとく怒ったという。	C, p.150

注) 引用文献は略号で表記。A: morgan(上巻),1984, B: morgan(下巻),1984, C: Gripenberg,1994, D: Cade,1998, E: Christie(上巻), 1977, F: Christie(下巻), 1977, G: Christie,1962,H:Prichard,2012

Table 5-5

列挙法による心理学的根拠資料⑤

No	内容	引用元
73	家族のアルバムで、“各自の考えたこと、感じたこと、その他を記録して”おく、通称<告白>という一巻があるが・・・	A, p.29
74	4歳の時に書いた<告白>の一節に、不幸について、「好きな人がいなくなること」と書いている。	A, p.76
75	父の死後、しだいに、母が町で電車で轢かれたり、夜中に急死しはせぬかという不安に襲われるようになった	A, p.83
76	子どものころ、特別に恐ろしい悪夢を繰り返し見たということを自伝でも自伝的小説でも書いている	A, p.74
77	本来その場所にいるはずのないだれかの存在を意識しはじめ、アガサはこの人物を<ガンマン>と呼んでいた。アガサが家族や友人にとりまかれていると、とつぜんそのひとり、たとえば母が、見た目はいつもと変わらないのに、ほんとうは<ガンマン>になってしまっているのに気づくという	A, p.75
78	ジュディスと夫のグレアム・ガードナーは、1947年、マックスがロンドン大学の考古学の教授に任命された後、アガサは夫について危惧の思いを抱くようになったと語っている。	D, p.261
79	マックスとバーバラのお互い同士にたいする情熱は激しく、はたの目をあまり意識しなくなっていた	D, p.278
80	アガサはスティックにふたりの関係を見て見ぬふりをしていた	D, p.290
81	生涯をつうじてアガサにとって最も大切だったもの、それは愛だった。・・・彼女にとって人生における成功は、結婚している女性という身分に象徴されていた。	D, p.313
82	<母の子ども時代>夫に死なれて前途に悲観していたメアリー・アン(祖母)は、娘のクララを北部に住む妹夫婦のもとへ養女に出すことに決めた。	A, p.30
83	<母の子ども時代>九歳の幼い少女は、深い孤独感とホームシックに苦しめられた。母が自分を手ばなししたのは、普通考えられるように、女の子のほう自力で世の中に出てゆくのがむずかしいためではなく、むしろ、男の子のほうを、娘の自分より大事にしていたためではないか、そうクララはつねに信じていた。	A, p.30
84	<1922年の10か月にわたる大英帝国視察旅行に夫婦でかけたときの、クリスティーの書簡。ほとんどが母に宛てられたものである>	H

注) 引用文献は略号で表記。A: morgan(上巻),1984, B: morgan(下巻),1984, C:Gripenberg,1994, D: Cade,1998, E: Christie(上巻), 1977, F: Christie(下巻), 1977, G: Christie,1962,H:Prichard,2012

第6章 「伝記資料定量化分析法」構築の試み

——量的・質的研究の折衷法——

第3章、第4章では、ミッチェルとクリスティーの伝記資料を質的に分析し、青年期における母娘関係の4群のうち、それぞれの特徴が最も一致すると考えられる群を該当群とみなすことで、量的結果と質的結果を組み合わせた検証を試みた。ただし、質的データは数量データに比べて客観性を示すことがむずかしいという課題が残る。そこで本章では、該当群を推定する方法として、質的データを定量化する方法を構築し、より説得力のある検証を試みる。

1. 問題と目的

第2章では現代青年を対象としたクラスタ分析により、青年期の母娘関係について、「反発群」「親密群」「自立群」「葛藤従属群」の4つの群を導き出した。第3章では、マーガレット・ミッチェルの伝記分析を行い、母娘関係を分析した結果、その特徴からミッチェルは「葛藤従属群」に該当することを見出し、「葛藤従属群」の典型として、青年期の母娘関係と人格形成、アイデンティティ形成について検証した。また、第4章では、同様に、アガサ・クリスティーの青年期の伝記分析を行い、「親密群」の典型として検証した。

今回試みた、伝記分析という質的研究法に質問紙調査という量的分析の結果を取り入れて分析するという手法は、大野(2011)の体系的折衷調査法に基づいた、新たな試みである。体系的折衷調査法は、自我発達の領域で多数のサンプルから得た数量データを分析することにより、一般的法則性を明らかにしようとする量的研究と、個別な少数データを分析することにより、具体的な知見を明らかにしようとする質的研究の長短所を検討し、それを補完的に折衷することでより科学的な知見を得ようとする体系的折衷主義(Allport, 1968)に基づいた調査法である。具体的には、まず研究テーマを測定する次元について質問紙調査を行い、次に調査協力者を高得点群、中得点群、低得点群に分類して、各群に該当する調査協力者に対して面接調査を実施することで、質問紙調査による一般性の把握が、日常の具体レベルでも妥当なものか、個別的には、研究テーマである共通特性とその人の個人特性がどのように関連し機能しているかを明らかにする。

体系的折衷調査法の長所としては、測定尺度の内的妥当性の検証ができること、数値だ

けでなく、具体例を示すことができること、研究者のモデルにない新たな分析視点を得られることがあること、回顧法ではあるが、形成過程に関するヒントが得られることなどがあげられている。さらに、体系的折衷調査法における面接調査は質問紙調査で得られた結果の各群から被面接者を選ぶことができ、それぞれの群の質的検証が可能である。しかし、面接法の短所として、面接時間が1～2時間程度であるため情報量が限られること、面接の時点で回顧的にとらえられる過去は現在構成された過去であること、守秘義務への配慮が必要となること、などがあげられる。

そこで、本章では、体系的折衷調査法における面接法の代りに、ある人物の生涯発達を研究する伝記研究法（大野, 2008）に着目し、質問紙調査と組み合わせて分析する方法論の構築を試みる。

伝記研究法は、情報量が多く、一生涯の時間的展望の中で行動や言動の意味を読み取ることが可能であること、歴史的・社会的背景が明確であること、守秘義務に配慮する必要がないこと、本人の回顧だけでなく、客観的事実をもとに分析できることなど、面接法の欠点を補うことができる非常に優れた手法である。ただし、質問紙調査の結果と組み合わせて分析する際に、面接法との組み合わせの場合は対象者が質問紙調査に回答した人で、統計的に該当する群に分類されているのに対し、伝記研究法と組み合わせる場合は、対象者が過去の人物であり、質問紙調査で統計的に分類されてはいないため、該当する群は、あくまでも解釈の確からしさによって推測することしかできない。したがって、第3章、第4章において、それぞれの人物がどの群に該当するかについては、クラスタ分析に用いた母娘関係尺度の5つの下位尺度について、その人物の特徴を資料から検証し、最も近いと考えられるクラスタをその人物の該当クラスタとしている。さらに妥当性の検証のため、生涯発達心理学を専門とする複数の心理学研究者による検討をしているが、この方法では、たとえば、母への劣等感が高いかどうかについて、高いか低いかの方向性を確認するにとどまり、どの程度の高さかということまでは明確ではないため、その群の中での位置づけや他群との比較など、詳細な分析までは行えなかった。したがって、第3章、第4章では、伝記分析という質的研究の結果を用いて、量的分析の結果を補填した、ということにとどまっており、体系的な手法とはみなせないと考えられる。

そこで、本章では、伝記研究法を用いた新たな研究手法を構築するため、質問紙調査で用いた母娘関係尺度（第3章）の項目について、伝記分析の対象者が青年期に回答したと想定して複数の研究者が評定し、その結果を、クラスタ分析で得られた4群と比較して、該当す

る群を推定するという手法を試みる。定量化して検討することで、研究者間が共通の基準を持って議論ができ、蓋然性の検証に有効であると考えられる。

2. 方法

マーガレット・ミッチェル、およびアガサ・クリスティーについて、母娘関係尺度（第3章）の21項目について評定する。

(1) 評定者

伝記分析による研究実績のある、生涯発達心理学専門の研究者4名。

(2) 評定方法

母娘関係尺度（第2章）の21項目。対象人物が、質問紙調査の対象者と同じく、青年期後期に各項目に回答したと想定した場合に、回答すると考えられる得点を5件法で評定する。大きな出来事によって評価が偏らないように、ミッチェルについてはカレッジに入学後、母が急死する前の18歳頃、クリスティーについては、具体的に結婚相手探しが始まる前の18～19歳ごろを想定した。

(3) 配布資料とミーティング

評定者に以下の資料を配布し、資料の内容を共有するためのミーティングを実施（1時間×2回）。内容説明の後、質疑応答を行った。

a. 対象人物の心理学的年譜

年齢を軸に、ライフイベント、親子関係や影響を受けた人物、交友関係、職業、業績、居住地の移転などの出来事を網羅した年譜を作成し、さらに、心理学的に影響の大きいと考えられる出来事、および、事象に対応すると考えられる心理学的概念を追記したもの。

b. 根拠資料

伝記資料から、対象人物の発達の様相と、母娘関係を裏付けると考えられる記述を原資料からそのまま抜き出し列挙する、列挙法（西平, 1996）で提示する。

今回評定するのは、対象人物の青年期であるため、生まれてから青年期までの根拠資料を中心に用いるが、生涯発達の視点から分析できることが伝記分析の利点であり、それによって青年期の理解が進むことも多いため、初期成人期以降の資料も配布した。

（第3章：Table3-2～3-6, 第4章：Table4-1～4-3, 第5章：Table5-1～5-5）

c. 評定シート

母娘関係尺度の21項目を5件法で評定するシート。

(4) 評定会

2週間後に、評定会を実施。4名の評定シートを回収後、各項目の評定の根拠について共有した。

3. 結果

4名の評定者の項目別の得点、および平均得点を Table6-1 に示す。評定者間信頼性については、 α 係数から十分な信頼性が示された（ミッチェル： $\alpha = .965$ ，クリスティー： $\alpha = .959$ ）。

ミッチェルについての根拠資料は第3章の Table3-2~3-6，クリスティーについての根拠資料は第4章の Table4-1~4-3，第5章の Table5-1~5-5 を用い，本文中では，章番号と各章の table の通し番号で記した（例：3-1）。

Table 6-1

評定結果

対象人物 評定者	ミッチェル($\alpha=.965$)				クリスティ($\alpha=.959$)					
	A	B	C	D	平均	A	B	C	D	平均
母への肯定的評価					3.75					4.56
母は思いやりがある	2	2	2	2	2.00	5	4	5	4	4.50
母は愛情豊かな人だ	2	2	2	3	2.25	5	5	5	5	5.00
私は母を誇りに思う	5	5	5	5	5.00	5	5	4	5	4.75
私は母を尊敬している	5	5	5	5	5.00	4	4	5	4	4.25
母は優れた人間だと思う	5	5	5	5	5.00	4	4	4	4	4.00
母は立派な生き方をしている	5	5	5	5	5.00	5	4	4	4	4.25
母は私をいつも気にかけてくれた	4	4	5	4	4.25	5	5	5	5	5.00
母は温かみのある人だ	1	2	1	2	1.50	5	5	5	4	4.75
母への従属					4.69					2.88
私は何かを決めなければならない時、母の意見に従ってきた	5	5	5	5	5.00	4	3	3	4	3.50
私は生き方について、自分の意見より母の意見を優先してきた	4	5	5	4	4.50	3	1	2	3	2.25
私はこれまで母にずっと従順だった	4	4	5	4	4.25	4	2	2	3	2.75
母に否定されると不安になる	5	5	5	5	5.00	4	2	2	4	3.00
母からの押しつけ					3.69					2.06
母は柔軟性に欠ける	5	4	5	4	4.50	3	3	3	3	3.00
母の言うことは間違っていることが多い	1	2	1	2	1.50	2	2	1	2	1.75
母は自分の考えを押し付けることが多い	5	4	4	4	4.25	3	2	2	3	2.50
私は母を重荷に感じることもある	5	4	5	4	4.50	1	1	1	1	1.00
母への劣等感					4.42					1.83
私は母を見ていると自信を失う	5	4	5	4	4.50	2	1	2	2	1.75
私は多くの点で母に引け目を感じる	5	4	4	4	4.25	2	3	1	2	2.00
私は母に対してしばしば劣等感を感じる	5	4	5	4	4.50	2	2	1	2	1.75
母との親密な関係					2.88					4.38
私は母によく相談をした	3	4	4	4	3.75	4	4	3	4	3.75
私は母には何でも話せると感じる	1	3	2	2	2.00	5	5	5	5	5.00

1) マーガレット・ミッチェルについての評定結果と根拠

① 母への肯定的評価

8項目の各平均点を見ると、「私は母を誇りに思う」「私は母を尊敬している」「母は優れた人間だと思う」「母は立派な生き方をしている」の4項目については、平均点が5.00となり、全ての評定者が5点と評定している。これらの項目は、母の能力や理想度についての認識を測定しているが、母は家庭内でも社会でも評価されており、ミッチェルにとってはほぼ完璧な人であったという解釈であると考えられる。評定者からは、ミッチェル自身が「非常に幅広い知識を持った理想主義者」と評しており(3-2)、知人への手紙にも「母は、私が知っている女性の中でも、もっとも賢く、優しく、魅力的な人でした」(3-1)と書いていること、また、兄や父が母を高く評価していたこと(3-5,17)などが根拠資料としてあげられた。

一方で低得点となったのは、「母は思いやりがある」(平均点:2.00)、「母は愛情豊かな人だ」(平均点:2.25)、「母は温かみのある人だ」(平均点:1.15)で、これらの項目は、母の人格的な温かさや、自分に対する養育態度についての認識を測定している。「幼少期に内気な性格を直すためにスリッパでぶたれた」(3-20)、「スカートで火傷をしたため、安全のためにと、その後10歳になるまで男の子のズボンをはかされた」(3-23)といったエピソードが、母の思いやりを感じることは少なかったと推測する根拠としてあげられた。また、女学院時代の日記に書かれた、「母は、愛のために何かを求めることは決してない。彼女は常に私に義務を主張する」、(3-9)「私は数学に失敗し、母はパブリックスクールに戻るべきね、と言う」(3-35)、「母は、決して自分の感情を出さない人だった」(3-10)という内容をみると、愛情の豊かさや温かみはほとんど感じられない。しかし、1ではなく2と評定された項目が多かったのは、前述した、高得点の4項目から推測できるように、母が正しく、素晴らしい人間である、という認識が根底にあったためという解釈によるものであった。男友達への手紙にも「母は別として、他のだれよりも私の人生によい影響を与えてくれた(初恋の相手の)愛情をあざ笑う権利はない」(3-55)と書いているように、母は自分にとってよいことをしてくれた別格の人、という気持ちがあったため、ミッチェル自身が低すぎる評価はできなかったであろうという指摘もあった。そのことは、「母はいつも私を気にかけてくれた」の評定平均点が4.00であることにも反映されている。たとえば、ミッチェルへの遺言として母が残した「あなたのような気性の女の犯しがちな誤りを一つあげて、あなた

の戒めにしたいと思います。…あなたもあなたの人生を生きるために最善を尽くしなさい。…あなたの人生はだれにも妨害させてはいけません」(3-16)という言葉は、ミッチェルにとってはプレッシャーであるが、母が自分の将来を考えて、生き方を示してくれていると受け取っていたのではないかという解釈が多かった。

以上のことから、「母への肯定的評価」の評定点は、能力面での客観的な高評価と、愛情面での葛藤が反映された結果、3.75となった。

② 母への従属

「私は何かを決めなければならない時、母の意見に従ってきた」(平均点：5.00)、「私は生き方について、自分の意見より母の意見を優先してきた」(平均点：4.50)、「私はこれまで母にずっと従順だった」(平均点：4.25)は、これまでの生き方での母への従属度を測定しているが、3項目とも全員が4点か5点の高い評定となった。根拠としては、『『あなたはアメリカでは数少ない女医になるという未来があるのよ』と言い聞かせ、マーガレットも聞かれると『医者になる』と言い続けた』(3-29)、「母の意向で、北部の進歩的なカレッジに進んだ」(3-42)などがあげられ、母の死後に「どこにいて何をしたらいいか、わからない」(3-58)という手紙を男友達に書き送るなど、アイデンティティが拡散してしまったことからも、それまでの母への従属の強さがうかがわれるという指摘があった。また、5ではなく4と評定している部分については、母から期待されているわけではない小説を、青年期まで書き続けていたところにミッチェルなりのささやかな自己主張がみえたことを考慮したという意見があった。

また、「母に否定されると不安になる」(平均点：5.00)は、常に母の評価を気にしていて、褒められたいというより、否定されるのではないかという恐れが強かったミッチェルの特徴をあらわした結果であり、全評定者が5点と評定した。根拠としては、「全部の中間試験で落ちることはわかってるし、母のためでなければ、気にしないのだが」(3-13)、「彼女は私には大志がないと思ってるだろう」(3-14)など、日記の内容があげられている。

以上のことから、「母への従属」の評定点は4.69となった。

③ 母からの押しつけ

「母は柔軟性に欠ける」(平均点：4.50)、「母は自分の考えを押しつけることが多い」(平均点：4.25)、「私は母を重荷に感じることもある」(平均点：4.50)の3項目については、非常に高くなった。「スカートで火傷をしたため、安全のためにと、その後10歳になるまで男の子のズボンをはかされた」(3-23)、「宗教活動に熱心ではないマーガレットを見

て『科学志向の現れとなし、『あなたはアメリカでは数少ない女医になるという未来があるのよ』と言ひ聞かせ…』(3-29) など、自分の価値観を絶対と思い、躊躇なく娘に押しつけていた様子がかがわれ、娘への遺言(3-16)でこう生きるべき、という言い残している姿勢からも押しつけの強さが感じられるという解釈で一致した。それに対してミッチェルは、「母は、愛のために何かを求めることは決してない。彼女は常に私に「義務」を主張する。」(3-9) と非常に強いプレッシャーを感じていたと考えられる。

一方で、「母の言うことは間違っていることが多い」は、平均点 1.50 と低かった。母親についてミッチェルは「私が知っている女性の中でも、もっとも賢く、優しく、魅力的な人でした」(3-1)、「非常に幅広い知識をもった理想主義者」(3-2) と評しており、自分の志向についてなど、正しく認識されていないという気持ちはあったとしても、母の言うことは基本的に正しいという認識がベースにあったという解釈であった。

以上のことから、「母からの押しつけ」の平均点は 3.69 となった。母が正しいと認識していながら、それを押しつけと感じるというのが、ミッチェルの特徴といえるだろう。

④ 母への劣等感

「私は母を見ていると自信を失う」(平均点: 4.50)、「私は多くの点で母に引け目を感じる」(平均点: 4.25)、「私は母に対してしばしば劣等感を感じる」(平均点: 4.50) の 3 項目全てで高かった。兄の回顧に「母は、正義のためなら、たとえ劣勢でも戦うべきだと、わたしたちに教えた」(3-5)、「自分の宗教の宗旨を深く極めていて、それを正しく説き、布教すべきだと、常々主張していた。そのために、一部の牧師の間で不評を買ったが、母はまったく気にかけなかった」(3-3) とあるように、母は確固たる信念を持ち、周囲からも一目置かれていた。母はミッチェルにも同じような生き方を求めているが、ミッチェルの性格はむしろ逆で、「私はやらされなければ何もできない人間のひとりなのである」(3-36)、「彼女は私には大志がないと思ってるだろう」(3-14)、「というように、意志が弱く確固たる価値観がない、と自己評価していた。実際、20 代前半に新聞記者として働いていたときのことを同僚は「批判に対してはひどく敏感で、悪口を言われると異常なほど感情的になって反論したがったり、仕事を攻撃されると、すぐに興奮して取り乱したりする」(3-71) と評しており、評価懸念が高く、臆病であったことが示されている。これらのことから、母親への劣等感は強かったという解釈になった。さらに、「母は、決して自分の感情を出さない人だったし、私をそうするように育てた。私は人前で感情を出すことが嫌だ」(3-10) と日記に書いているが、男友達への手紙には「私は感情を抑えるなんてできない」(3-61) とあることから、母

のような人間になりたいがなれない、という劣等感が浮かび上がってくるという指摘もみられた。

以上のことから、「母への劣等感」の平均点は4.42となった。

⑤ 母との親密な関係

「私は母によく相談をした」（平均点：3.75）については、直接的な根拠資料は見当たらない。しかし、前述したように、従属の強かったミッチェルは、受動的であったにせよ、結果的に母に相談するしかなかったのではないか、という解釈で一致した。一方、「私は母には何でも話せると感じる」（平均点：2.00）については、評定点は1～3でやや差があった。たとえば、「私は母を愛しているし、母にも愛されていると思う。でも、母が私に対して言うこと、すること全てにとって、私は母の監視下にあるので、私はたいてい口を閉ざしてきた（日記）」（3-11）という根拠資料の解釈として、母との信頼関係を信じる気持ちと、心が開けない気持ちの葛藤の結果、どちらでもなかった（3点）という評価と、母からの押しつけの強さから、話しても無駄、という意識が強かった（1, 2点）という評価に分かれた。

以上のことから、「母との親密な関係」は2.88となった。ただし、評定者からは、この下位尺度に関しては、決定的な根拠資料が少なく、解釈が難しいという意見も出された。

2) アガサ・クリスティーについての評定結果と根拠

① 母への肯定的評価

母の能力や理想度についての認識を測定している4項目は、「私は母を誇りに思う」（平均点：4.75）「私は母を尊敬している」（平均点：4.25）「母は優れた人間だと思う」（平均点：4.00）「母は立派な生き方をしている」（平均点：4.25）となり、いずれも高かった。根拠資料としては、「母は不思議な直観のひらめきを持っていた。他人がどんなことを考えているか突然わかるのだ」（4-34）、「使用人たちも子供たちも母にすっかり心服していたので、母の言葉ならちょっとしたことでもいつもそのとおりになった」（4-11）などがあげられ、家族の中での影響力も強かったのではないかという推察された。一方で気まぐれなところがあつたが、「秩序と、平安と、安定との中心だった」（4-24）というばあやが補っていたために、母のよいところを評価できていたのではないかと解釈された。また、幸せな結婚をした母は、クリスティーのロールモデルであり、憧れであったことが母の評価を高めており、特に「私は母を誇りに思う」の得点の高さに繋がっていると考えられる。根拠としては「父母

の幸せそうな結びつきを身近に見て育ったアガサは、大人になったら理想の夫というべき男性がかならず自分の前に現れるだろうと感じて疑わなかった」(4-21)、「生涯をつうじてアガサにとって最も大切だったもの、それは愛だった。・・・彼女にとって人生における成功は、結婚している女性という身分に象徴されていた。」(5-81)などがあげられた。

次に、母の人格的な温かさや、自分に対する養育態度についての認識を測定している、「母は思いやりがある」(平均点：4.50)、「母は愛情豊かな人だ」(平均点：5.00)、「母はいつも私を気にかけてくれた」(平均点：5.00)「母は温かみのある人だ」(4.75)の4項目は、さらに高くなった。根拠資料としては「クララこそは、アガサがなにも言わなくても、その気持ちをわかってくれる友だった」(4-29)、「いつも彼女に、愛されているという実感を与えてくれ、何をするにも、またどんなときでも、物事に対する能力が彼女にそなわっているように感じさせてくれた。母親の無条件の愛を確信していた」(4-43)、「何か困ったことがあった場合の、母の愛と理解の強さである。悲嘆の真つ暗などん底にあるとき、母の手にしっかりつかまっていることが一つの安心だった。母の手に触れていると、なにか引き付けられるような、心が癒されるような気がした。病気のときなど母はかけがえのない人だった。母は自分の力と生気を与えてくれる」(4-31)などがあげられ、母からの十分な愛を感じていたと解釈されている。

以上のことから「母への肯定的評価」の評定点は、能力面での評価も愛情面での評価も高く、4.56となった。

② 母への従属

「私は何かを決めなければならない時、母の意見に従ってきた」(平均点：3.50)については、「15歳から母の意向で学校に通い、さらに母の意向で次々と学校を変わったこと」(4-37,38,39,40,41)、「クララが病人に小説を書いてみてはどうかとすすめる」(4-48)、「ここでまたクララが、時宜を得た助言をした」(5-9)など、母の意見に従っていることが多く、クリスティー自身も「使用人たちも子供たちも母にすっかり心服していたので、母の言葉ならちょっとしたことでもいつもそのとおりになった」(4-11)と振り返っていることなどが根拠資料としてあげられ、やや高い評定となった。

また、「私は生き方について、自分の意見より母の意見を優先してきた」(平均点：2.25)は、評定点が1～3に分かれ、「私はこれまで母にずっと従順だった」(平均点：2.75)も、評定点が2～4に分かれた。結果的に母の意見に従っていた、というのは共通の解釈であったが、従属しているという意識がある程度あった、という解釈と、「何か困ったことがあっ

た場合の、母の愛と理解の強さである」(4-31)、「クララこそは、アガサがなにも言わなくても、その気持ちをわかってくれる友だった」(4-29)という資料にみられるように、常に自分の気持ちをわかってくれる母の意見は、自分の意見でもあると感じられたはずで、自分の意見よりも優先という感覚や従属感は低かった、という解釈による違いであった。

最後に、「母に否定されると不安になる」(平均点：3.00)については、2名が2点、2名が4点という評定に分かれた。2点とした採点者の根拠は、「母はいつも彼女に、愛されているという実感を与えてくれ、何をするにも、またどんなときでも、物事に対する能力が彼女にそなわっているように感じさせてくれた。母親の無条件の愛を確信していた」(4-43)というように、母は、いつも娘に自信を持たせるようにしていたため、否定されたと感じたことがなく、結果として不安も低かったのではないかと、いうことであった。一方、4点とした採点者の根拠は、否定された経験がなかったことで、否定されて不安にならなかった経験もないため、もし否定されたらと想像すると不安になるのではないかと、いうことであった。平均点としては、どちらでもない、という結果になった。

以上のように、「母への従属」については、4項目中3項目が、評定点の幅が3点となり、ズレが見られたため、下位尺度平均点(2.88)について違和感がないか全評定者に確認した。その結果、実際には従属しているが、能動的従属であったために、クリスティー自身の従属感は極端に高くも低くもなかったであろう、という解釈となり、下位尺度平均点については、問題ないという意見で一致した。

③ 母からの押しつけ

「母は柔軟性に欠ける」の平均点は3.00であったが、これはクリスティーの母が頑固さと柔軟性の両面を持っていたのではないかと推測の結果であった。母は、「衝動的で、思いこんだらてこでも動かぬところがあった。」(4-9)と言われており、クリスティーの教育についても、「家庭で教育しただけでなく、このころには、8歳までは子供に字を読ませるにはいけない、遅いほうが目のためにも頭のためにもよい、という主張を持つようになっていた。」(4-12)というような思い込みの強さがあったため、そういう部分は柔軟性に欠けていたと考えられる。しかし、クリスティーのフランス語が上達しないと家庭教師を変え(4-33)、学校も娘の様子を見て、合わない場合は変えるなど(4-39)、状況に応じて柔軟に対応していることなどから、全評定者が、3点という評定になった。

また、「母の言うことは間違っていることが多い」(平均点 1.75)については、直観的で気まぐれではあったものの、「使用人たちも子供たちも母にすっかり心服していたので、母

の言葉ならちょっとしたことでもいつもそのとおりになった」(4-11)、「母は不思議な直観のひらめきを持っていた。他人がどんなことを考えているか突然わかるのだ」(4-34)というように、結果的には母は間違っていないと感じていたのではないかと解釈された。さらに、クリスティーにとって母は、「アガサがなににも言わなくても、その気持ちをわかってくれる友だった」(4-29)という理解者であったことから、低い点数となった。

次に、「母は自分の考えを押しつけることが多い」については、娘を小学校に通わせず、青年期に通わせた学校も、すぐに変更を決めてしまうなど、押しつけの強さがみられるのだが、クリスティー自身は、「実際のところ、新しいところへ行くほうがおもしろそうに思えた」(4-39)、と母の提案をポジティブに受け止めており、だれよりも自分をわかってくれているという気持ちが強かったことが反映されて、評定点は2.50となった。

最後に、「私は母を重荷に感じることもある」(平均点:1.00)については、母を重荷に感じているような資料は一切なく、母の存在を常に好意的にとらえていたと解釈された。また、11歳で父が死んだあとは、母を支えるようになり、責任感のようなものは感じていたが、重荷ではなかったと考えられた。根拠としては、「母に触れていると、なにか引きつけられるような、癒されるようなものがあった」(4-31)、「話し相手として、気晴らしの相手として、クララはおおいにアガサを頼りにしていた。」(4-35)などがあげられている。

以上のことから、「母からの押しつけ」については、母が押しつけているようであっても、娘のクリスティーが好意的に受け止めているということから、2.06の低い評定となった。

④ 母への劣等感

「私は母を見ていると自信を失う」(平均点:1.75)、「私は多くの点で母に引け目を感じる」(平均点:2.00)、「私は母に対してしばしば劣等感を感じる」(平均点:1.75)の3項目とも低かった。解釈としては、非凡で、頭の回転の早い母に対して、自分についていけなかったため、その部分の劣等感はあったかもしれないが、母は非常に不思議な存在であったため、自分と比較する感覚は少なかったこと、母には苦手なことや欠点があり、クリスティーのほうが得意なことも少なくなかったこと、さらに、父の死後は、母から頼られるようにもなり、対等と感じていたことなどが示された。根拠資料としては、「母は不思議な直観のひらめきを持っていた。他人がどんなことを考えているか突然わかるのだ」(4-34)、「母や姉の物事に対する反応は並はずれてすばやく、わたしは全然ついていけなかった。…『アガサはほんとに血のめぐりが悪い』といつもやじられた」(4-26)、「わたしが算数が好きということが母には不思議でしょうがなかったらしい。母は率直にみとめていたことだが、

数学が嫌いで家計の計算が大苦手だった」(4-27)、「父が母によくいっていたように、母にはユーモアのセンスがなかった」(4-28)、「話し相手として、気晴らしの相手として、クララはおおいにアガサを頼りにしていた」(4-35)などがあげられた。

以上のことから、「母への劣等感」の評定点は 1.83 となった。

⑤ 母との親密な関係

「私は母には何でも話せると感じる」(5.00)については、クリスティー自身が「きわめて仲のよい母娘だったことを力説している」(4-32)こと、さらに、母は常に自分の気持ちをわかってくれる味方であり、「何か困ったことがあった場合の、母の愛と理解の強さである。悲嘆の真っ暗などん底にあるとき、母の手にしっかりつかまっていることが一つの安心だった」(4-31)という根拠資料から、全員が 5 と評定した。「私は母によく相談をした」(3.75)については、父の死後、二人暮らしになってからは、「話し相手として、気晴らしの相手として、クララはおおいにアガサを頼りにしていた」(4-35)と母からも頼られ、クリスティーも「わたしは 13 か 4 のころには、年よりもずっとませており・・・自分のことは自分で守っているという感じを持っていた。母に対して責任を果たしえんと考えていた」(4-36)と振り返っていることから、一方的に相談するのではなく、相談しあったという意識ではないかという解釈が多く、やや高い程度となった。

以上のことから、「母との親密な関係」は 4.38 となった。

3) ミッチェル、クリスティーの該当クラスタ

ミッチェルとクリスティーについての評定を用いて、母娘関係類型の 4 群 (第 2 章)のうち、どの群に該当するかについて検証する。4 群の下位尺度別の平均点とミッチェル、クリスティーの評定得点、および両名と各群の下位尺度得点の差の絶対値を Table 6-2 に示した。さらに、各群のプロフィールを下位尺度得点とエラーバー (標準偏差) で示し、ミッチェルとクリスティーのプロフィールと比較した (Figure 6-1, Figure 6-2)。

ミッチェルと各群の得点差の絶対値の総和は、反発群 (5.16)、親密群 (7.41)、自立群 (8.12)、葛藤従属群 (3.49) となり、葛藤従属群との差が最も少ないことが示された (Table 6-2)。また、各群の下位尺度得点との比較を行った結果、ミッチェルの得点が各群の下位尺度得点の標準偏差の範囲に含まれた数は、葛藤従属群が 4 つと最も多く、反発群が 3 つ、自立群が 1 つ、親密群が 0 であった (Figure 6-1)。葛藤従属群において、劣等感だけが標準偏差の範囲より上の得点であったが、葛藤従属群は、4 群の中で、最も劣等感の高い群である

ことから、ミッチェルの場合は、その特徴がより際立っていたととらえることができる。以上の結果から、ミッチェルは、葛藤従属群に該当すると推察される。

次に、クリスティーと各群の得点差の絶対値の総和は、反発群（5.56）、親密群（0.94）、自立群（2.34）、葛藤従属群（5.04）となり、親密群との差が最も少ないことが示された（Table 6-2）。また、各群の下位尺度得点との比較を行った結果、クリスティーの得点が各群の下位尺度得点の標準偏差の範囲に含まれた数をみると、親密群については5つの下位尺度すべてが含まれ、葛藤従属群と自立群がそれぞれ3つ、反発群が2つであった（Figure 6-2）。以上の結果から、クリスティーは、親密群に該当することが示された。

Table 6-2
平均点と各群との差の絶対値

	下位尺度得点					絶対値差の総和	
	肯定的評価	従属	押しつけ	劣等感	親密な関係	ミッチェル	クリスティー
反発群	3.06	2.71	3.29	2.68	2.52	5.16	5.56
親密群	4.58	3.15	2.42	2.15	4.39	7.41	0.94
自立群	4.53	2.11	1.96	1.67	3.15	8.12	2.34
葛藤従属群	4.22	4.11	3.81	2.84	3.62	3.49	5.04
ミッチェル評定	3.75	3.69	4.69	4.42	2.88		
クリスティー評定	4.56	2.06	2.88	1.88	4.38		

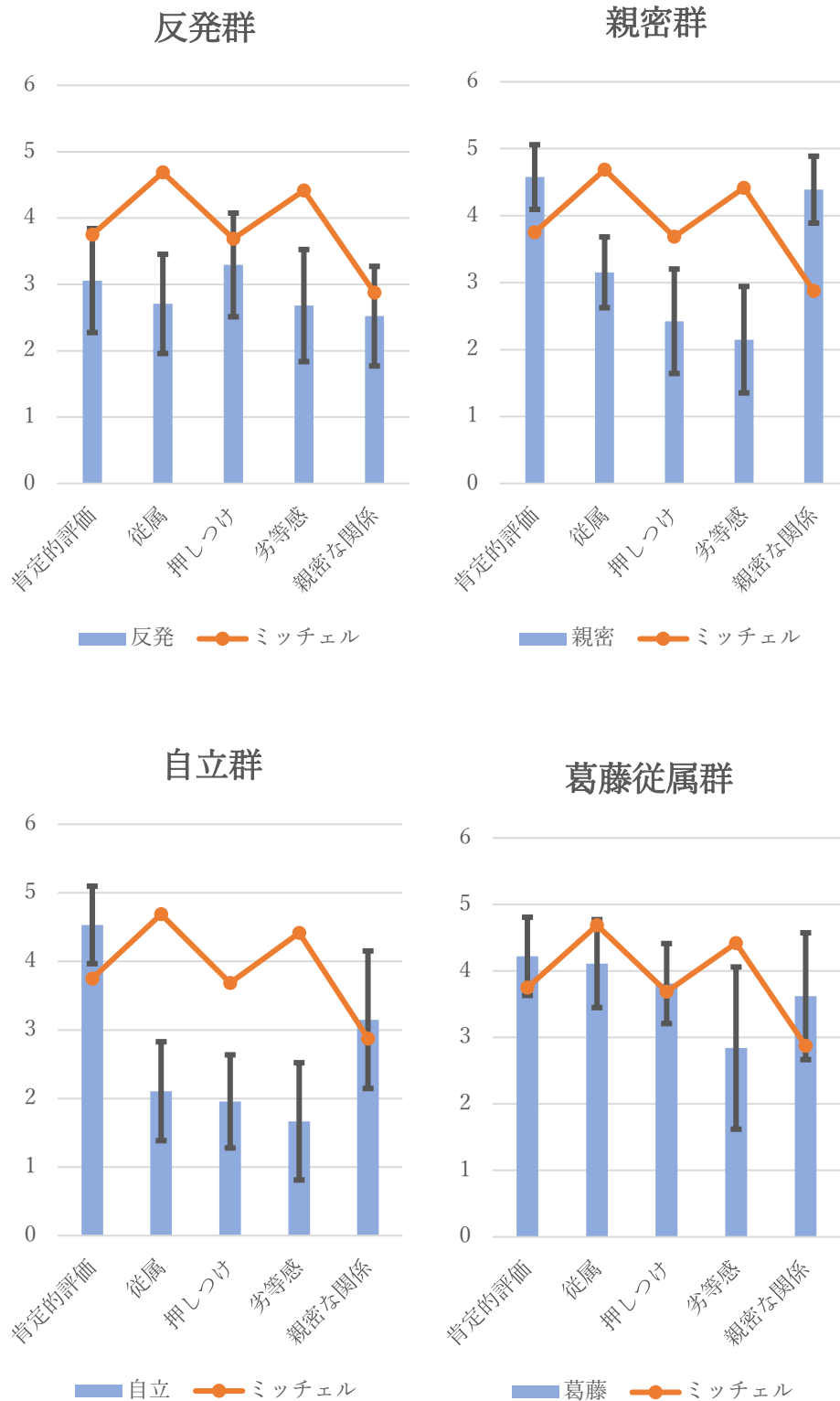


Figure 6-1 ミッチェルと各群との比較 (エラーバーは標準偏差)

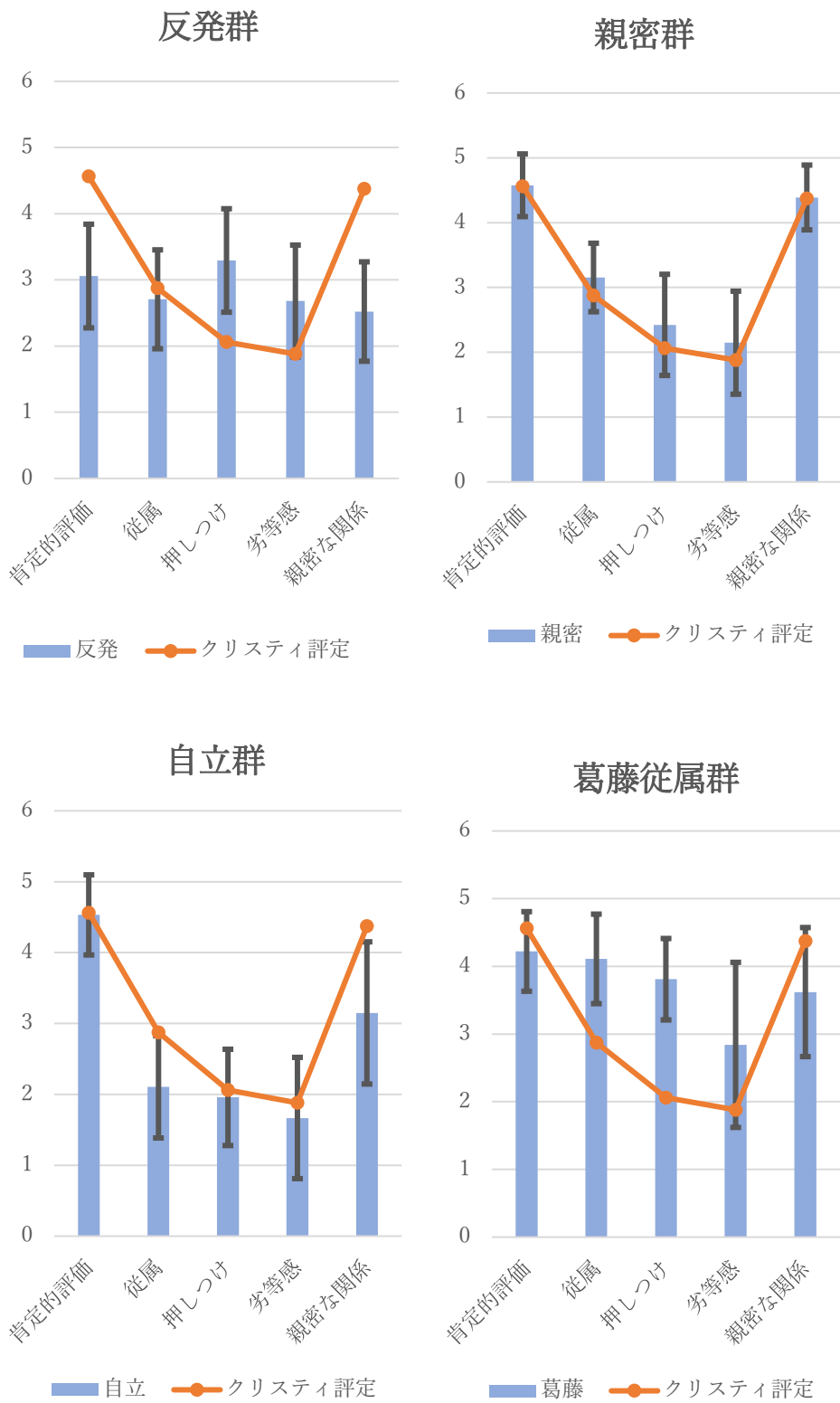


Figure 6-2 クリスティーと各群との比較 (エラーバーは標準偏差)

4. 考察

本章では、まず、母娘関係尺度（第2章）の21項目について、対象人物が、質問紙調査の対象者と同じ、青年期後期に回答したと想定した場合に、選択すると考えられる点数を評定した。評定は、伝記資料を用いて4名の研究者が個別に行い、その平均点を評定点とした。

次に、その結果を用いて、クラスタ分析で得られた4群と比較検証し、該当する群を推定した。本章の方法では、各群の得点差の絶対値の総和が少ないことを群への適合度として用いている。検証の結果、ミッチェルは「葛藤従属群」との適合度が最も高く、これは第3章の分析結果と一致した。また、クリスティーは、「親密群」との適合度が最も高く、これは第4章の分析結果と一致した。三好（2011）は、伝記分析の場合、多くの人から、その仮説・解釈が合理的で説得力があると判断されることが研究の妥当性の検証になるとしているが、本研究では、質問紙調査と同じ尺度を用いて分析結果を定量化し、その枠組みに基づいて分析を進めることによって、多くの人々が共通の基準を用いて妥当性を判断することが可能になったと考える。その結果、第3章、第4章の伝記分析において、典型として用いた群については、それぞれ妥当性が高く、伝記分析として蓋然性の高い検証であったことを示すことができた。

さらに、第3章、第4章では、質的な特徴に近い群を典型とみなし、他の群との比較はしていなかったが、本章では、他群との適合度の比較を数値で行うことが可能となった。そのため、何がその群であることを決定づけたのか、他の群になる可能性はなかったのか、という検証が可能になった。たとえば、ミッチェルの場合、「葛藤従属群」の次に適合度が高かったのは、「反発群」であった。両群とも母からの押しつけが高いが、母への従属については、「葛藤従属群」が高いのに対し、「反発群」はやや低い。つまり、母の強い押しつけによって従属するか、押しつけを嫌って反発するかという違いである。ミッチェルに当てはめれば、もし、医者になれという母の押しつけに反発して、作家やジャーナリストを目指していたとしても、健康的な人格形成には繋がりにくかったであろうと推察される。なぜなら、母の押しつけが強く、ある程度の劣等感を感じている限り、健康的な分離タイプである「自立群」ではなく、不健康な分離タイプである「反発群」にしかならないと考えられるからである。このことは、娘を支配し、精神的に追い詰める毒母（Forward, 2013 羽田 訳 2015）や、大人になっても娘を支配する母の残像としてのインナーマザー（斎藤, 2004）といった、現代の母娘関係にも通じる問題であると考えられる。

また、クリスティーの場合は、親密群と他群との適合度の差が大きかった。親密群の次に

適合度が高かったのは自立群であったが、「母への従属」と「母との親密な関係」が低い自立群は、クリスティーの特徴と大きく違ううえ、ミッチェルと違って、クリスティー自身に葛藤がなかったため、青年期に他群に該当する可能性を示す要素は見当たらない。しかし、社会に出たり、結婚したりすれば、環境的には母親との関係が遠くなり、従属することも少なくなる。そのときに、「母への従属」と「母との親密な関係」が下がっても、健康性を保ったまま、自立群に移行できるかどうかポイントになると考えられる。この点については、第5章で行った、クリスティーの初期成人期以降の分析により、母親の支えがないところでは、健康性を保てない可能性が示されており、親密群の潜在的な問題点が明らかになっている。

最後に、量的研究の補完という観点でみると、質問紙調査の結果得られたクラスタのうち、不健康な結合タイプである「葛藤従属群」と健康的な結合タイプである「親密群」の特徴について、ミッチェルとクリスティーという2人の人物の生涯にわたる膨大な伝記資料から得られた事例を通して検証することで、理解を深めることができたと考える。たとえば、「葛藤従属群」は、母をそれほど肯定しているわけではないのに、母への劣等感が非常に強い、という一見矛盾した傾向を示しているが、伝記分析によって「優秀で完璧だが温かい愛情を与えてくれない母への劣等感」というひとつの解釈が可能になったといえるだろう。また、「親密群」については、従属しているにもかかわらず、健康的な人格形成が見られることから、能動的従属ではないかと推測したが、クリスティーの事例によって、具体的に示すことができたと考えられる。

以上のように、本章では、量的分析と質的分析を組み合わせる手法として、質問紙調査と面接法を組み合わせた「体系的折衷調査法」(大野, 2011)の考え方にに基づき、質問紙調査と伝記研究法を組み合わせた「伝記資料定量化分析法」の構築を試みた。伝記研究法は面接法に比べて、圧倒的に情報量が多く、客観的な資料も得られるため、質的研究法として大変有効な方法であると考えられる。また、質問紙調査は大量データを用いて分析でき、他の尺度との関連を検討しやすいことから、アイデンティティ研究における研究手法として多く用いられ、様々な尺度も開発されている有効な手法であるが、アイデンティティという概念そのものは、Erikson (1959 西平・中島訳 2011)が「A sense of Identity」と述べているように、具体的な行動ではなく、抽象的な「感じ方」であるため、質問紙調査だけで分析することには限界があり、生涯発達の視点から分析できる伝記研究法を組み合わせることは大変有意義であると考えられる。

大野（2011）は、体系的折衷調査法について、量的・質的方法（面接法と質問紙調査）を交互に繰り返し知見を補完していく方法であると述べ、特に、面接対象者が予想外の影響要因を挙げることがあり、予想外の要因との関連が新たな分析視点の発見へのヒントになることがある、としている。本研究で試みた「伝記資料定量化分析法」についても、伝記資料を分析することで、研究者の視点にはなかった要因が多数見い出され、新たな仮説を生成することができる。生涯の膨大な資料が得られる伝記分析は、仮説生成の宝庫といっても過言ではないだろう。そこから生成された仮説を検証するために、質問紙調査によって量的に分析し、さらに、その結果を、伝記分析で質的に検証する、というように、伝記分析と質問紙調査を交互に繰り返していくことで、知見を深めていくことが可能になる。本章では、質的分析結果を、量的指標を用いて定量化することによって、現代青年への質問紙調査と伝記で扱う人物を同じ指標で検証することを可能にした結果、新たな量的・質的アプローチの手法を構築できたと考える。

最後に、Figure6-3に、質問紙調査と伝記分析による量的・質的アプローチの流れを示す。本研究では、マーガレット・ミッチェルの伝記分析のために事前に実施した資料分析から、仮説生成と質問紙項目の収集を行い、作成した質問紙を用いて質問紙調査を実施し、クラスタ分析を実施した。次に、2つのクラスタの典型としてマーガレット・ミッチェルとアガサ・クリスティーの伝記分析を行い、量的結果を質的に検証した。さらに、第7章では、本章で評定した結果を用いて、ミッチェルとクリスティーの比較分析を行う。今後は、伝記分析で見出した新たな仮説について、質問紙調査を実施していくことで、量的・質的方法を交互に繰り返して知見を補完していくことが可能になるだろう。

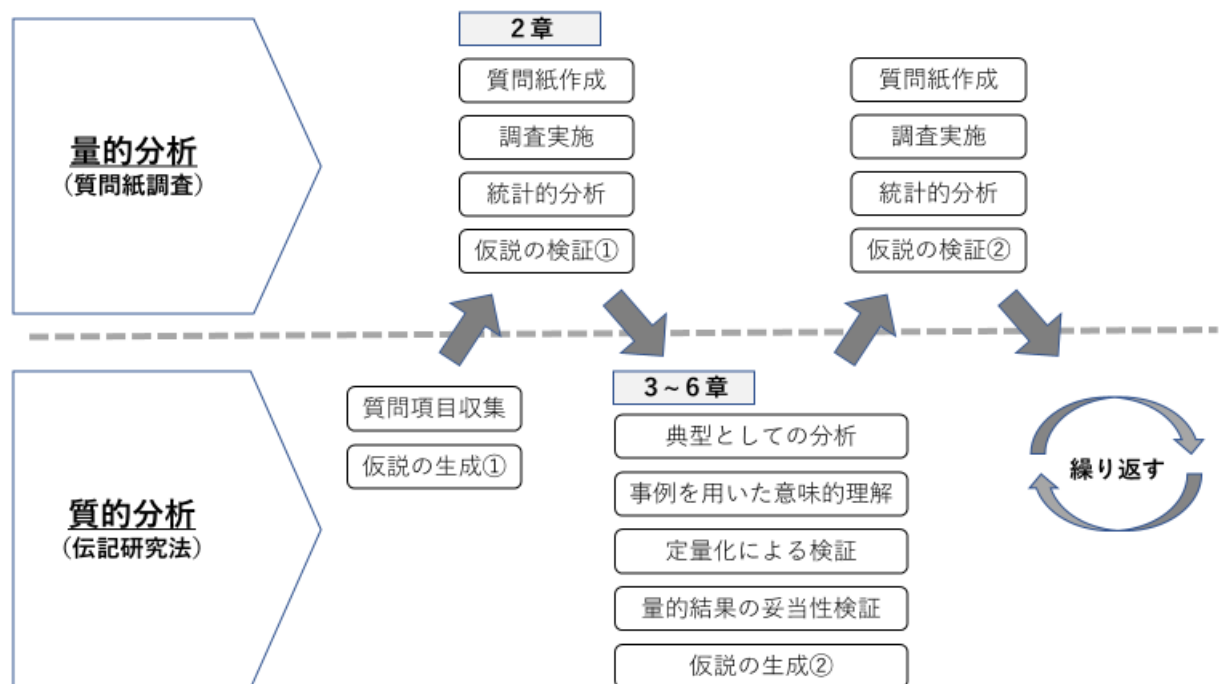


Figure 6-3 質問紙調査と伝記分析による量的・質的アプローチの流れ

5. 今後の課題

質的情報を定量化する方法として、複数の研究者による対象人物の評定を試みた結果、研究者間の点数のブレについては、最も差がある場合でも3段階であり、多くが2段階までにおさまっていたことから、評価の方向性は一致していたと考えられる。特に、ミッチェルの場合、評価が3段階に分かれたものが「親密な関係」の中の1項目のみで、あとは、2段階までにおさまっており、評定点も3が少なく、4か5、1か2の違いで、方向性は同じであったことから、評定者間のブレはほとんどなかったと考えられる。

それに対して、クリスティーの場合は、評価が3段階に分かれた項目が4つあり、そのうち3つが「従属」の項目であった。したがって、「従属」については、評定者の評価にややバラツキがあったことになる。その理由として、ミッチェルの場合、日記や手紙で、特徴を示す複数の直接的な表現が見られたのに対し、クリスティーは、起きた事実や証言を総合して判断する必要がある項目があったことがあげられる。特に「従属」については、母の意向に従っている事実がある一方で、能動的な従属、つまり従属感がない従属であったため、そこをどう評定するかというところに難しさがあり、点数がぶれやすい要因になった

と考えられる。そこで今回は、研究者間の評定点にばらつきがみられたクリスティーの「母への従属」については、下位尺度平均点（2.88）について違和感がないか全評定者に確認した。その結果、実際には従属しているが、能動的従属であったために、クリスティー自身の従属感は極端に高くも低くもなかったであろう、という解釈で、下位尺度平均点については、妥当である、という意見で一致した。このように、分析にあたっては、評定差が大きいところについて、注意深く検証する必要があるであろう。

また、本研究で評定に協力いただいた研究者は、伝記研究法に熟達しており、伝記資料を客観的に読み込む分析スキルを持っていたが、評定者がそこまで熟達していない場合は、たとえば、青年期の評定をするのに、初期成人期以降の情報に影響されて正しい評定ができない可能性も否定できない。そのため、青年期までの資料に絞って分析することも考えられるが、本来、伝記研究法の利点は生涯発達という大きな分析単位の中で人間の心理力動を発見できることである。今回も、たとえば、ミッチェルが青年期前期まで医者になると一貫して言っていたことに対し、幼少期からの資料を見ると、本当は葛藤があったのではないか、と思われるが、青年期までの資料だけでは根拠が弱い。母の死後、興味を失い、その後、記者や小説家としての才能を発揮した、という事実から、青年期の状態をより確からしく推測できたといえる。このように生涯発達の視点から、ある時期を遡及的に分析することは有効であるが、解釈の難易度が高いため、説得力のある評定をするためには、点数差がある項目については、再度議論した上で再評定する方法も検討する必要があるかもしれない。以上のことから、今後、より汎用性のある研究法にしていくために、さらなる手順の検討をすすめることで、伝記分析法を用いた、量的・質的アプローチの有用性が高まると考えられる。

第7章 比較分析:M・ミッチェル & A・クリスティー

第3章, 第4章では, マーガレット・ミッチェルとアガサ・クリスティーの伝記資料を用いた個別分析により, 青年期の母娘関係と娘の人格形成, アイデンティティ形成についての具体例を示した。伝記研究法において, さらなる分析を進める枠組みとしては, なんらかの類似性・共通性と異質性・対照性を持つ2人の人物を比較する「比較分析」がある (西平, 1983)。そこで本章では, ミッチェルとクリスティーの母娘関係の違いに着目して, 母娘関係と娘のアイデンティティ形成についての比較検証を行う。さらに, 比較に際して, 第6章で構築した「伝記資料定量化分析法」で得られた評定結果を用いることで, 量的研究による一般的特性と組み合わせ, 一般性, 法則性を見出すことを試みる。

1. 問題・目的

第3章, 第4章の伝記分析で明らかになったように, 世界的女流作家である, マーガレット・ミッチェルとアガサ・クリスティーは, ほぼ同時代にアメリカとイギリスで生まれ, 比較的裕福な家庭で育っている。また, ふたりとも母親との関係が深く, 人格形成やアイデンティティ形成において母親の影響を強く受けたという点で共通していると考えられる。ところが, ふたりの青年期のアイデンティティの様相は対照的であった。ミッチェルは, 子どものころから一貫して医者になることを目指したが, 自己信頼が低く, 母親を亡くした後は, カレッジを中退して, アイデンティティ拡散の状態に陥り, 否定的アイデンティティを象徴するような結婚をする。それに対して, クリスティーは, 様々なことにチャレンジしながら, 「将来, 幸せな結婚ができる」という, 確信的な希望を持っており, 実際に自分の思い描いたような結婚をする。母親との結びつきが強かったふたりのアイデンティティの様相がなぜこれほどまで違ったのであろうか。

西平 (1983,1996) は, 伝記研究法として, 個人の人生を分析対象とする個別分析の後, さらに分析を進める枠組みとして比較分析という手法を提唱している。比較分析とは, なんらかの類似性・共通性と異質性・対照性をもつ2人の人物の伝記を比較記述し, 生育史を摘出して, 人間形成の内的機制を探求する分析手法である (大野, 2008)。具体的事例として, 西平 (1996) は, 福沢諭吉と橋本左内の歴史的アイデンティティの違いの比較, 福沢諭吉の自我理想的人格と内村鑑三の超自我的人格の比較などを, 説得力を持って論証している。さら

に、三好（2011）は、伝記研究の手法（大野，2008）にのっとり、作家の谷崎潤一郎と芥川龍之介について、同じような経歴を重ねながら、どうして有能感の様相が対照的であったのかという観点から比較分析を行った。養育環境が、各発達段階の主題の解決にどのような影響を与えるかということについて、個別事例を比較することで説得力のある分析となっている。しかし、根拠資料から個々の分析を行い、その結果を質的に比較することになるため、共通の基準がない、という質的研究の課題が残されている。

そこで、本章では、青年期のミッチェルとクリスティーについて、個別分析による質的検証（第3章、第4章）と、母娘関係尺度を用いて数値化した評定結果（第6章）をもとに、青年期のアイデンティティの様相とその形成因と考えられる母娘関係について比較分析を行い、母娘関係が娘のアイデンティティ形成に与える影響についての一般法則を明らかにすることを目的とする。

2. 方法

伝記研究法（大野，2008）を用いた、ミッチェル（第3章）とクリスティー（第4章）の個別分析の結果、および、母娘関係尺度の各項目を評定した数値（第6章）を用いて、比較分析を行う。まず、「類似した生育環境にあり、才能に恵まれながら、なぜ青年期のアイデンティティの様相が大きく異なるのか」、という心理学的問いをたてる。それに対して、ふたりのアイデンティティ形成に大きな影響を与えたと考えられる、結びつきの強い母娘関係に着目し、青年期の娘のアイデンティティ形成に正の影響を与える場合と負の影響を与える場合の母娘関係の特徴について、ふたりの女性を比較検証することで分析を進めていく。

3. 結果と考察

本文中の根拠資料については、第3章、第4章、第5章の根拠資料から引用し、章番号と各章のTableの通し番号で表記した（例：3-1）。

1) ミッチェルとクリスティーの生育環境の比較

まず、ミッチェルとクリスティーの生育環境について比較する。

① 社会的背景と経済的状况

ミッチェルは1900年に、比較的保守的な傾向の強いアメリカ南部で生まれ、クリスティー

一は 1890 年、ビクトリア朝時代末期のイギリスで生まれた。時代的に、女性は結婚して家庭を守ることが重要な役割とされており、婦人参政権もまだ確立されていなかった。しかし、婦人参政権運動はすでに始まっており、女性の社会進出に向けて時代が動き始めた過渡期と位置付けられることから、ミッチェルもクリスティーも古い価値観と新しい価値観の入り混じった時代に成長したと考えられる。社会的階層という点では、ミッチェルの家は、父が弁護士という知識階級であった。クリスティーの家は複数の使用人を抱える上流階級で、しだいに経済状態が厳しくなり、贅沢な暮らしではなくなったようであるが、一定の生活水準は保っていた。以上のことから、ミッチェルとクリスティーの文化的、時代的背景は類似しており、経済的には、両者とも比較的恵まれた環境で育ったと推察される。

② 家庭環境

ミッチェルの家庭は両親と兄の 4 人家族、クリスティーは両親と姉、兄の 5 人家族で、ふたりとも末っ子であった。ミッチェルの兄は「僕たちは守られていると感じるのどかで幸せな世界で育った」(3-18) と振り返り、クリスティーの姉や兄はクリスティーの養育環境について「たいへんにかわいがられ、甘やかされていた」(4-6) と述べていることから、ふたりとも恵まれた家庭環境であったと推測できる。母親に関しては、ミッチェルの母は、価値観が明確で、周囲の不評をかって、信じる宗派の布教活動を行ったり (3-3)、婦人参政権運動の先頭にたって活動するなど (3-4)、自分の信じることを行う強さがあり、社交術にもたけていたことから、社会的にも家庭内でも一目置かれていた (3-17)。クリスティーの母は、気まぐれで、人目をひき、霊能者のような直観力があるとされており、家のことや、娘たちの教育方針など、結果的にいつも思い通りに動かしていた (4-10,11)。どちらの母親も、自分の価値観を持っており、家庭内の影響力が強かったという点で類似している。一方、父親については、ミッチェルの父は弁護士であり、堅実な性格であったが、母の強い性格に引っ張られ、その行動力を高く評価していた。(3-17) クリスティーの父は、自分自身をおよそ精力的でない、と評しているように、超然たる生活を送っていた人物で、不動産の購入や子どもの教育など、家庭のことは妻の意志を尊重していた (4-7,8,9)。どちらの父親も、家庭内では妻の意志を尊重していたという点で共通しており、実権を握っていたのは父ではなく母であったと考えられる。これらのことから、ミッチェルとクリスティーは、家庭環境、家族構成、父母の関係性の点で共通点が多いと推察される。

③ 小説家としての才能

将来、世界的な小説家となるふたりだが、その才能は、子どものころからみられている。

ミッチェルは、物心ついたころから物語を書き始め（3-25）、7歳～16歳までに書いた物語がノートに残されている（Eskridge, 2010）。また、小学校時代からシナリオを書いて、仲間を集めて演じたり、女学院時代には演劇クラブの中心的存在になるなど、創作的な才能を發揮していた（3-32,33,38,39）。さらに、16歳のときには、当時のボーイフレンドに「Lost Laysen」という小説を寄贈しており、ミッチェルの死後発見され、近年出版されている（Mitchell,1996）。一方、クリスティーは、母親が早くから字を覚えないうほうがよい、という考えであったにもかかわらず（4-12）、言葉に強い興味を持っていて、食欲に本を読んだという（4-14）。また、小学校に行かなかったため、庭で空想上の友達を作って一人遊びをしており、クリスティー自身が「私はひとりっ子でしたから、自分でお話をつくって遊んだのです」（4-16）と振り返っている。さらに、クリスティーは算数が大好きで、毎朝、父から教えてもらうことを楽しみにしていたという（4-15）。こうした創作能力と論理的能力が、後のミステリー小説に繋がっていったと考えられ、18歳のころからは、小説を書いて出版社に送るようになった。このように、ふたりは幼少期から、将来に繋がる才能を發揮していたととらえられる。

以上のように、ミッチェルとクリスティーの生育環境をみると、時代的、文化的背景、経済状況、家族構成、控えめな父親、影響力の強い母親、など類似点が多く、将来の小説家としての成功に結びつく才能が、子どものころから發揮されていたという点でも似ていることが示された。

2) 青年期のアイデンティティの様相の比較

次に、ミッチェルとクリスティーの青年期のアイデンティティの様相について比較する。ミッチェルは、幼少期より母の価値観に従い、カレッジに入るまで一貫して医者を目指していた。一方、クリスティーにとって、最も重要なアイデンティティは「幸せな結婚をすること」であったが、それはロールモデルとしての母親のようになりたい、ということであった。したがって、ふたりとも、青年期前期までのアイデンティティ・ステイタス（Marcia,1966）は、フォークロージャーであったと考えられる。Waterman（1982）は、青年期から成人期にかけてのアイデンティティ・ステイタスの変化について、フォークロージャーからは、そのままフォークロージャーを維持、モラトリアムへの変化、アイデンティティ拡散への変化の3パターンがあるとしているが、ミッチェルとクリスティーは、どの

ようであったのかについて比較する。

① フォークロージャーからアイデンティティ拡散に退行したミッチェル

ミッチェルが 18 歳の時に母がインフルエンザで急死し、それを口実に、ミッチェルはカレッジを退学し、医者を目指すことをやめてしまった (3-45,46)。その後は目標を見失い、後に「1919 年から 1922 年までの間が、自分にとってもっとも不幸な時期だった」(3-50) という状態が続いている。その時期の男友達への手紙には、「私の人生には何か欠けている。私のどこが悪いのか教えて」(3-52)、「どこにいて何をしたらいいか、わからない」(3-58)、など、「これまでコミットしてきたものが無意味になっていくが、それに代わるものが得られない」という、フォークロージャーから拡散に退行した場合の心理状態 (Waterman,1982) を示す内容が散見される。また、Erikson (1959 西平訳 2011) は、アイデンティティ拡散の諸相のひとつとして、否定的アイデンティティをあげているが、ミッチェルも、酒、タバコ、挑発的ダンスなどの不良的行動をとって家族ともめる (3-47.48.49) など、否定的アイデンティティに基づく行動が見られている。以上のことから、ミッチェルのアイデンティティ・ステータスは、青年期後期にフォークロージャーからアイデンティティ拡散に退行したと考えられる。そして、このようなステータス退行に陥ったのは、第 3 章で分析したように、ミッチェルが、フォークロージャーのタイプ (Archer & Waterman, 1990) としては、罪悪感が強く、親や重要な他者の好みに逆らうと、愛を失う、あるいは別の形で罪を受けるのではと考え、早い時期に出現したアイデンティティに固執しやすい傾向がある「閉鎖型」(Closed foreclosure) であったことが原因であると考えられる。

② フォークロージャーのまま、将来への確信が揺らがなかったクリスティー

クリスティーは、青年期に、ピアニストやオペラ歌手に挑戦しようとして挫折し、小説を投稿しても返送されるなど、青年期らしい模索をしているが (4-45,46,49,51)、「将来、幸せな結婚ができる」という、確信的な感覚が揺らぐことはなかった (4-56)。Erikson (1959 西平・中島訳 2011) は、アイデンティティの感覚について、「自尊心が自分が実現可能な将来に向かって効果的に学びつつあるという確信に成長すること」と述べているが、クリスティーにとって、最も重要なアイデンティティが、母のような幸せな結婚をすることであり、それに関しては、必ず実現する、という確固たる自信があったと推察される。

そして、その後実際、思い描いた通りの結婚をしたのである (5-5,11)。したがって、クリスティーはフォークロージャーとしてのアイデンティティを青年期が終わるまで維持し、将来に対しては、思い通りになるに違いないという確信を持っていたといえるだろう。子ど

もの頃から、自然に母をロールモデルにし、当時の社会的な価値観のままに、幸せな結婚をする、という未来を疑いなく受け入れていたクリスティーは、フォークロージャーのタイプ (Archer & Waterman, 1990) としては、非常に早く重要な他者をモデルにして自分をモデルに近づけようとする「早産型」 (Premature foreclosure) に該当すると考えられる。「早産型」は、自分の能力や限界を知るという学童期の評価に取り組みず、役割実験が行われないうという特徴があるとされることから、障害にぶつかったときに乗り越えられない可能性があるが、クリスティーの場合、少なくとも、障害がなかった青年期の時点では、フォークロージャーを維持し、明るい将来を信じていたと考えられる。

このように、共に、母親の影響を強く受けたフォークロージャーであったミッチェルとクリスティーであったが、青年期のアイデンティティの様相は、大きく異なっていたことが示された。

Figure 7-1 では、閉鎖型フォークロージャーと推察されるミッチェル、早産型フォークロージャーと推察されるクリスティー、および比較対象として、開放型フォークロージャーと推察される高村光太郎 (第3章, p.47) をとりあげ、アイデンティティ・ステイタスの変化を比較した。

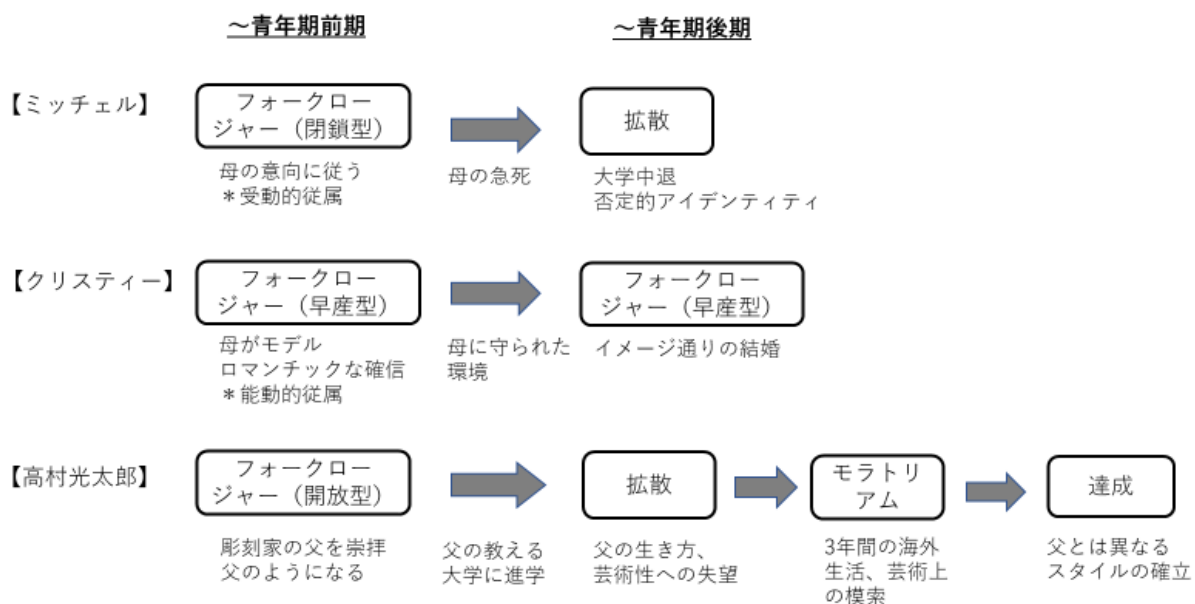


Figure 7-1 アイデンティティ・ステイタス変化の比較

3) 母娘関係の比較

次に、ミッチェルとクリスティーの比較における、「比較的類似した生育環境にありながら、なぜ青年期のアイデンティティの様相が大きく異なるのか」という心理学的問いに対し、アイデンティティ形成に大きな影響を与えたと考えられる母親との関係に着目し、第6章で行った、母娘関係尺度の下位尺度別評定結果を用いながら、母娘関係の特徴について比較検証を進める。

「母への肯定的評価（以下、肯定的評価）」については、ミッチェル（3.75）がクリスティー（4.56）に比べて低かった。詳細をみると、「母は優れた人間だと思う」など能力的な評価は、どちらも非常に高かったのに対し、「母は思いやりがある」など、愛情面の評価では、ミッチェルは低く、クリスティーは高かった。具体的には、ミッチェルにとっての母は「母は、愛のために何かを求めることは決してない。彼女は常に私に義務を主張する」（3-9）、「私は数学に失敗し、母はパブリックスクールに戻るべきね、と言う」（3-35）という存在であったのに対し、クリスティーにとっての母は「母だけがすぐに理解してくれた」（4-29）、「母親の無条件の愛を確信していた」（4-43）という存在だったのである。以上のことから、共通点は、母を一人の女性として評価していたことで、相違点は、母に受容されているという気持ちだが、ミッチェルは低く、クリスティーは高かった点であると考えられる。このように、全面的に母を評価していたクリスティーに比べ、尊敬する母に受け入れられないのではないかと、という不安をかかえるミッチェルの中には大きな葛藤があったと考えられる。

「母への従属（以下、従属）」については、ミッチェル（4.69）がクリスティー（2.88）に比べて高かった。ふたりは、幼少期から、結果的に母の意向に従っていたという点では共通していた。しかし、ミッチェルが「医者になる」と言い続けた（3-29）ように、自分の興味・関心を抑え込んで母に従属し続け、母に対する評価懸念が強かったのに対し、クリスティーは自分にとって最もよいことを勧めてくれると感じられる母の選択に従っていただけ（4-41.42）という違いがあった。言い換えれば、ミッチェルの従属は受動的であったため、従属感が強く、クリスティーの従属は能動的であったため、従属しているわりには従属感が薄かったと考えられる。

「母からの押しつけ（以下、押しつけ）」については、ミッチェル（3.69）がクリスティー（2.06）に比べて高かった。青年期までの資料をみると、ふたりの母は、自分の考えを娘に示し、それがそのまま実現していることが多い、という点では共通している。しかし、ミッチェルの場合は、母から、娘の興味関心も能力も無視した価値観や将来の目標を押しつけ

られ(3-26.29),常に母のプレッシャーを感じ続けていたのに対して,クリスティーの場合は,「従属」で分析したように,母の指示に従う場合も能動的で,むしろ,常に自分のことを考えてくれると好意的にとらえていたため(4-41.42),押しつけと感ずることは少なかったと考えられる。つまり,ふたりとも,母から方向性を示されるが,ミッチェルは,それを自分の気持ちを見殺した押しつけと感ず,クリスティーは自分の気持ちを理解してくれた上での助言と感ずていたのではないかと推測される。

「母への劣等感(以下,劣等感)」については,ミッチェル(4.42)が非常に高いのに対し,クリスティー(1.83)は非常に低く,その差が顕著であった。ミッチェルにとって母は完璧な女性であった(3-1)。特に,科学的思考や確固たる意志の強さなど,だれもが認めていた母の強みは,ミッチェルが苦手で自信のないことであり,それでも身につけなければならないと思ひ込んでいたため(3-27,34),母への劣等感は非常に強かったはずである。さらに,できないことに対して母が厳しく指摘していたこと(3-7,35)も劣等感を高める要因になったと考えられる。クリスティーの場合も,「肯定的評価」で見られたように,母を認め,母にはかなわないと感ずることもあった。しかし,母には誰もが知っている,明らかな欠点もあり,さらに,母の苦手なことがクリスティーは得意だったことで(4-27),母に対して劣等感と感ずることは少なかったと考えられる。さらに,父の死後,母がクリスティーを頼りにしたことも母に対する劣等感と感ずない要因になったといえる(4-35,36)。また,クリスティーの母は,娘に常に自信を持たせる養育態度であったため(4-43),劣等感そのものが低かったと考えられる。

「母との親密な関係(以下,親密な関係)」については,ミッチェル(2.88)がクリスティー(4.38)に比べて低かった。ミッチェルについては,ここでも葛藤がみられる。全て母の意向に従っていたということは,母に相談することが多かったはずで,近い関係であったと思われる。また,母を立派だと評価していたため(3-1),母との関係を悪く考えることはできなかったであろう。しかし,支配的な母に自分の気持ちは理解されない(3-11),という気持ちはあり,何でも相談できる相手ではなかったと推察される。一方,クリスティーは母に対して,常に味方でいてくれ,自分のことをだれよりもわかってくれる,という信頼感が高く(4-31),父の死後は実質二人暮らしで,密着した関係が続いていたことから(4-34),「親密な関係」は非常に高かったと考えられる。

以上のことから,ミッチェルの母娘関係は,母から受容されないことを恐れながら,母の押しつけと母への劣等感によって母に受動的に従属した関係であり,クリスティーの母娘

関係は、母から全面的に受容されている安心感のもと、押しつけや劣等感を感じることなく、能動的に従属した関係であったことが示された。

4) 有能感の様相についての比較

こうした母娘関係の違いが娘のアイデンティティ形成にどのように影響を与えたのであろうか。

漸成発達理論（(Erikson, 1959 西平・中島訳 2011)）では、それぞれの発達段階がより高次の発達段階の基盤になることを示しており、その段階の発達主題を解決することで活力が生まれ、次の段階の主題にスムーズに取り組んでいけるとされる。ミッチェルとクリスティーを比較すると、第4段階「勤勉 対 劣等感」で得られる活力である、有能感の様相が対照的であったことから、ここでは、第5段階のアイデンティティ形成に直接的な影響があると考えられる、第4段階の有能感の様相に着目して、母娘関係がどのように影響を与えたかを検証する。

将来、作家として成功するふたりには、子ども時代からクリエイティブな才能がみられていたが、小説やシナリオを書くなど、作家に繋がる能力を発揮する場面は、ミッチェルの方が多かったように思われる。しかし、第4段階の活力である有能感についてみると、以下のように、ミッチェルは低く、クリスティーは高かったことが示されており、それが次の段階のアイデンティティ形成に影響を与えたのではないかと考えられる。さらに、そこには母娘関係の在り方が大きく影響していたと推察される。

① ミッチェルの有能感と母娘関係

ミッチェルは幼少期から、文学的才能を発揮しており、小学校入学前から10代までに書いた小説がノートに残されている (Eskridge, 2010)。また、シナリオも手がけて、仲間を集め、家で上演会をしていたという (3-33)。さらに、女学院時代には演劇クラブの中心的存在となり (3-38)、短編小説が校内誌に掲載されている (3-39)。これらのことから、ミッチェルが書くことに対して、高い関心を持っていたことがわかる。さらに、その領域ではリーダーシップを発揮しており、評価されることによって、自信も持っていたと考えられる。それにもかかわらず、ミッチェルの日記には「私は誇れるものが何もない (中略) 私は怠惰で、勉強することができない。数学ができない」(3-34) など、自信のない言葉が散見される。Erikson (1968 岩瀬訳 1982) は、有能感について、「重要な課題の達成において、機敏な知性を自由に駆使する能力のこと」としているが、ミッチェルの場合、創作活動は重要な課

題と思うことができず、どんなに優れていても、有能感に繋がらなかったと推察される。なぜなら、母がそういうことに価値を置いていなかったからである。その一方で、ミッチェルにとっての重要な課題は、数学など科学的な学問であり、それは将来的に医者になるために必要なことであった(3-26)。そして、その重要な課題は母が価値を置くものであり、母は、女性が将来社会的に成功するためには、科学的な知識を身に着けねばならないと考えていて(3-26)、「あなたはアメリカで最初の女医になると言う未来がある」(3-29)という目標を娘に言い続けていたという。さらに、科学的なことについては、母が得意で、ミッチェルは苦手であり、母に対する劣等感に繋がっていたと考えられる。つまり、母はミッチェルの才能や価値観を無視して、自分が価値を置くものをミッチェルに押しつけていたのであるが、ミッチェルが母の価値観をそのまま受け入れていたのは、母の能力に対する絶対的な評価の高さが要因になっていると考えられる(3-1)。三好(2011)は、有能感が単に才能の高低についての認知ではなく、自分に適した場所で自分の能力を発揮できている実感にもつながっていることを明らかにしているが、ミッチェルには、その実感がなかったために、有能感が形成されなかったと考えられる。

このことは、ミッチェルの該当クラスと考えられる「葛藤従属群」において、漸成発達理論の第4段階の主題である勤勉性が非常に低かったことにも示されている(第2章)。

② クリスティーの有能感と母娘関係

クリスティーは、子どものころから言葉に強い関心を持っており、ひとりで庭遊びをすることが多かったが、空想上の友達を何人も作って物語性を持った遊びをするなど、想像力豊かで、将来小説家になる才能が芽生えていたと考えられる(4-16,17)。また、算数が好きで、20代なかばに調剤師の資格をとったときも、物理学や化学の根本原理をのみこむのになんの苦労もしなかったという(4-15)。そしてそれが、ミステリー小説を生み出す基盤になったと考えられる。しかし、たとえ才能があっても、クリスティーの場合、小学校に行かなかったため、同世代の友達がおらず、競争も経験していない(4-17)。いろいろな才能があっても、同世代の子どもの中で切磋琢磨しなければ、自信が生まれにくいのではないかと思われる。しかし、そういう環境の中で、有能感の生成に大きな役割を果たしたのが「常に自分の味方であり、どんなときでも、物事に対する能力が彼女にそなわっているように感じさせてくれた」(4-43)という母であったと考えられる。さらに、母は、うまくいかないことを娘の能力のせいとせず、家庭教師や学校のせいだと考えて、環境を変えるなどした(4-33,39,42)。その結果、クリスティーは自分の能力を信じ、うまくいなくても自信を失うこ

とはつながらず、劣等感是非常に低かったと考えられる。Erikson (1968 岩瀬訳 1982) は、自分には能力があるのだというあのすべての子が持っている感情を支持してやらなければならない、と述べているが、クリスティーの母は、まさにこれを徹底的に実践しており、クリスティーの有能感を高めることに貢献したと考えられる。

このことは、クリスティーの該当クラスと考えられる「親密群」において、漸成発達理論の第4段階の主題である勤勉性が高かったことにも示されている(第2章)。

③ ミッチェルとクリスティーの有能感の違いを生み出した母娘関係の比較

ふたりとも創作能力は高かったが、ミッチェルの母は、そのことに価値を見出さず、娘の能力を支持しなかった。その代わりに、娘が苦手なことを押しつけ、劣等感を助長した。一方、クリスティーの母は、娘が何をするにも能力があると信じさせた。失敗しても原因を外に向け、劣等感を持たせないようにした。

ふたりの母娘関係についての下位尺度別の特徴と有能感の様相との関係をみると、以下のことが示された。

まず、「肯定的評価」について、ふたりとも母の能力を評価していたが、ミッチェルの場合は、母の望む成果を出さなければ母から受容されないのではないか、という恐れが有能感の形成を阻害し、クリスティーの場合は、母が全面的に受容してくれたことが有能感の形成を促進したと考えられる。これは、母娘関係については母親が受容的か拒否的かが子供の自我発達に強く影響しており、受容性が高いほど自我確立の度合いが高く、各発達段階の達成度も高くなる(田中, 1997)という先行研究の結果とも一致している。

「従属」については、ミッチェルの場合は自分の興味、関心とまったく異なる母の価値観に受動的に従属していたため、能力が発揮できず、有能感を阻害したと考えられる。クリスティーの場合は、母が常に自分にとって一番よいことを勧めてくれる、と信じていた結果、能動的な従属であったため、従属しているわりには従属感がなく、有能感を阻害することはなかったと考えられる。

「押しつけ」については、母が自分の才能や興味を考慮してくれないと感じるミッチェルは、母の言うことを押しつけと感じ、それでも従うことしかできなかったため、有能感の形成が阻害されたと考えられる。一方、クリスティーは、母が常に自分の気持ちを考慮してくれると信じているため、母の言うことを押しつけと感じることはほとんどなく、有能感の形成を阻害することはなかったと考えられる。

「劣等感」については、ミッチェルの場合は、たとえ自分が苦手であっても、母が得意な

分野で成功しなければならない、という「べきの専制」(茂垣, 2005)にとらわれていたために、母への劣等感が増大し、有能感の形成を阻害する要因になっていたと考えられる。それに対してクリスティーの場合は、常に娘に能力があると感じさせてくれる母に対しては、劣等感を感じることは少なかったと思われ、有能感の形成を阻害することはなかった。

最後に「親密な関係」については、ミッチェルの場合は母への依存が強いが、母に理解されないという葛藤を抱えていたため、母親との結びつきが有能感を促進することには繋がらず、クリスティーの場合は、自分の気持ちをわかってくれて、いつも自信を与えてくれる母と親密であることが有能感の形成を促進したと考えられる。

4. 総合考察

母娘関係尺度の下位尺度別の評定結果を用いて、ミッチェルとクリスティーを比較検証し、ふたりの母娘関係の共通点と相違点を分析することで、以下のことが明らかになった。

- (1) ふたりとも母という存在自体は高く評価していたが、母娘関係においては、ミッチェルは母に受容されないことを恐れ、クリスティーは常に母から受容されていると感じていた。
- (2) ふたりとも、結果的に母に従属していたが、ミッチェルの従属が受動的であったのに対し、クリスティーの従属は能動的であった。
- (3) 母の自分に対する言動を、ミッチェルは押しつけと感じ、クリスティーは押しつけとは感じなかった
- (4) ミッチェルは、優れた母のようになれないという劣等感が強く、クリスティーは、母が能力を信じさせてくれたため、母に対する劣等感は生まれなかった。
- (5) ふたりとも母との結びつきが強かったが、ミッチェルには葛藤があり、クリスティーには葛藤がなかった。

これらのことから、従属の仕方の違いが母娘関係を特徴づけているのではないかと推察された。ミッチェルは、母の受容的ではない養育態度のもと、母からの押しつけと母に対する劣等感を強く感じることで受動的に従属していたと考えられる。一方、クリスティーは、母の受容的な養育態度のもと、母からの押しつけや母への劣等感を感じず、能動的に従属していたと考えられる。

そして、このような母娘関係が、ふたりを異なるタイプのフォークロージャーにした。ミッチェルは、母親の好みに逆らうと、愛を失う、あるいは別の形での罪を受けるのではと考

える「閉鎖型」(Closed foreclosure)となり、クリスティーは、疑いや葛藤なく、非常に早くから母をモデルにして自分をモデルに近づけようとする「早産型」(Premature foreclosure)となったと考えられる。このことから、母に受動的に従属している「葛藤従属群」タイプの娘は、閉鎖型フォークロージャーになりやすく、母に能動的に従属している「親密群」タイプの娘は、早産型フォークロージャーになりやすいということが示された。

さらに、有能感の様相については、ミッチェルのように、母からの押しつけと母への劣等感によって受動的に従属している母娘関係にある娘は、母から押しつけられた価値観の中では「勤勉」が低く、「劣等感」が強いため、活力である有能感の獲得が困難であることが示された。その場合、自分の才能を発揮することができる領域があったとしても、それが母親の価値観と一致していなければ、有能感につながらないと考えられる。一方、クリスティーのように、母からの押しつけや、母への劣等感を感じず、能動的に従属している母娘関係にある娘は、どんな領域であっても、母が常に自分を肯定し、自信を持たせてくれることで、活力である有能感を獲得していくことが示された。

以上のことから、母からの押しつけと母への劣等感によって受動的に従属している母娘関係は、有能感の獲得を阻害するため、その後、青年期のアイデンティティ形成に負の影響を与えると考えられる。一方、母からの押しつけや、母への劣等感を感じず、能動的に従属している母娘関係は、娘の有能感の獲得を促進するため、その後、青年期のアイデンティティ形成に正の影響を与えると考えられる。

以上のように、本章では、母親との結びつきが強かったミッチェルとクリスティーの比較を通してどのような母娘関係が青年期の娘のアイデンティティ形成に正の影響を与え、どのような母娘関係が負の影響を与えるのかについて明らかにした。また、ふたりは、母娘関係の4類型(第2章)における、「葛藤従属群」と「親密群」の典型であることから、両群の比較を質的に検証することができたと考える。

さらに、西平(1983)は、伝記研究法として、個別分析、比較分析の次の段階として主題分析を提唱している。伝記資料はあくまで質的なものであるが、研究の問題意識としては、そこから分析段階をふまえて個別性から人格形成の一般性の把握を行おうとする方向性であると考えられる(大野, 2011)。主題分析は、複数の人物のエピソードを布置させることにより、その人物に関する因果関係や、多くの人物に一貫する傾向を帰納的に説明できる理論を見いだす、もしくは、検証しようとする方法である(大野, 2008)。人格の生涯発達を検証するために非常に有効な手法であるが、多数の伝記を分析する必要があるため、膨

大な作業を必要とするうえ、多くの人物について質的情報を用いて比較する、という意味で難易度が高いという難点がある。それに対して、本章では、2段階めの比較分析を行うにあたり、第6章で構築した体系的折衷調査法を用いることで、量的研究による一般的特性と組み合わせ、本来、主題分析で行われる一般性、法則性を見出すことを可能にし、伝記研究法を発展させることができたと考える。

5. 今後の課題

本章では、青年期までの資料を用いた比較検証によって、青年期のアイデンティティ形成にミッチェルのような母娘関係が負の影響を及ぼし、クリスティーのような母娘関係が正の影響を及ぼすことを示したが、それぞれの個別分析（第3章、第4章、第5章）では、生涯発達の視点から、初期成人期以降のアイデンティティの様相についても分析している。したがって、比較分析においても、生涯を通して比較してみることで、新たな視点が見えてくる可能性があるだろう。青年期にアイデンティティが拡散したミッチェルは、夫の支援でアイデンティティを形成していき、青年期に将来を信じていたクリスティーは、結婚生活の挫折でアイデンティティが崩壊した、ということと比較することで新たな知見が得られると考えられる。

また、「葛藤従属群」の典型としてのミッチェルと、「親密群」の典型としてのクリスティーに加え、今後、「自立群」および「反発群」の典型の人物についての分析を行うことで、より全体的な理解が進むと考えられ、本格的な「主題分析」も可能となるであろう。対象人物が増える主題分析では、第6章で構築を試みた、「伝記資料定量化分析法」による共通の指標を用いることが非常に有効な手法になると考えられる。

第8章 全体総括

1. 本研究結果の総括

本研究では、親子関係の中でも母娘関係の繋がり深さに着目し、母娘関係が娘のアイデンティティ形成にどのような影響を与えるのかについて、量的、質的側面から明らかにした。母娘関係尺度を作成して、クラスタ分析により量的な側面から分析するとともに、アイデンティティという概念をより深くとらえるために伝記研究法による質的分析を行った。さらに、質問紙調査と伝記研究法を組み合わせ、新たな分析手法を構築し、異なるタイプの母娘関係の比較を、量的、質的に検証することを試みた。

第1章においては、青年期における親子関係という視点から親子関係研究について概観したうえで、親子関係の中でも特に繋がりが深いとされる母娘のアンビバレンツで複雑な関係性に焦点をあてた。さらに、母娘関係を類型化して検証した研究について、その意義と限界について述べた。次に、アイデンティティ研究の手法に着目し、量的研究、質的研究、それぞれの手法の長所、短所について概観した。

第2章では、大学生の女性を対象とした質問紙調査を実施した。母親と娘の関係性を多角的に検証するための尺度を作成し、その下位尺度を用いてクラスタ分析を行った結果、「反発群」「親密群」「自立群」「葛藤従属群」に類型化された。得られた類型について、分離と結合、および精神的健康の視点で分析した結果、「自立群」が健康な分離タイプ、「反発群」が不健康な分離タイプ、「親密群」が健康な結合タイプ、「葛藤従属群」が不健康な結合タイプとなった。さらに、アイデンティティ達成が高かったのは「親密群」と「自立群」で、どちらも母からの押しつけ、母への劣等感が低かった。逆に、アイデンティティ達成が低かったのは「反発群」と「葛藤従属群」で、どちらも母からの押しつけ、母への劣等感が高かった。以上のことから、娘のアイデンティティ形成および精神的健康にとって重要なのは、母との分離か結合か、ということではなく、母からの押しつけや母への劣等感を感じない母娘関係であることを明らかにした。

第3章では、フォークロージャーからアイデンティティ拡散にアイデンティティ・ステータスに変化した事例として作家、マーガレット・ミッチェルの伝記分析を行い、その要因を、母娘関係の特徴から検証した。第3章における母娘関係の分類で、不健康な結合タイプである「葛藤従属群」に該当すると推測されるミッチェルについて検証した結果、葛藤従属型の

母娘関係にある娘は、母に否定されること、見捨てられることを恐れる「閉鎖型フォークロージャー」(Archer & Waterman, 1990)になる可能性があること、アイデンティティ形成において、自らの主体性よりも母の意志に依存するため、葛藤を内在化させ、目標そのものではなく、母の意志に従う傾向があること、したがって、母の監視下ではフォークロージャーとしての目標に固執するが、母の監視がなくなると、目標を放棄して拡散に退行する可能性があること、さらには、青年期まで自らのアイデンティティについて母に依存し、目標を主体的に選択してこなかった場合、依存対象を失った後、新たな目標を主体的に模索し、選択することができない可能性があることを示した。

ここでは、量的研究で分類した「葛藤従属群」の典型としてミッチェルの事例分析をすることで、量的アプローチと質的アプローチを連携させ、「葛藤従属群」について量的質的両面から理解を深めた。

第4章では、親密で仲のよい母娘関係が娘の健康的な発達に寄与する面に着目し、母親との親密な関係によって、青年期に健康的なアイデンティティを獲得していったと考えられる作家のアガサ・クリスティーの伝記分析を行った。その結果、常に自分の味方であると思わせてくれるような母親の無条件の愛情は、娘の「基本的信頼感」を高め、また、どんなことに対してでも、娘に能力があると信じさせてくれる母親の養育態度は、娘の「有能感」を高めること、そしてそのことは、青年期においては、自分の将来を信じていることができるアイデンティティの形成を促進する可能性があることが示された。

また、ロールモデルとしての母を肯定的に評価し、母と親密な関係を持っているクリスティーは、母娘関係としては、健康的な結合タイプである「親密群」(第3章)の特徴を示しており、人格的特徴も「親密群」と共通していることから、「親密群」の典型と解釈された。ここでは、「親密群」の典型としてクリスティーの事例分析をすることで、量的アプローチと質的アプローチを連携させ、「親密群」の特徴について量的質的両面から理解を深めた。

第5章では、母親との親密な関係をもとに青年期にアイデンティティを形成していったクリスティーについて、初期成人期以降のアイデンティティの様相について伝記分析を行った。クリスティーは青年期に思い描いていた通りの結婚をし、母と同様に「幸せな結婚をした女性」というアイデンティティを確立したように思われたのであるが、夫との関係をうまく築くことができなかった。このことから、母親に守られている間は表面化しなかった不健康な人格特性が、母親の支えが得られない状況で、自分の思い通りにいけなくなったときに表面化したと考えられる。その原因として、すべてがうまくいく、自分は愛されてい

る、という「基本的信頼感」が強い一方で、思い通りにいかない、理解されない、という「基本的不信」が低すぎて、他者への共感性が高められなかった可能性があることを示した。さらに、このような人格特性は、娘に「基本的不信」という否定的な方向性を経験させないようにすることによって娘の「基本的信頼感」を高めようとする母親の養育態度によって形成されたのではないかということ考察した。このことは、漸成発達理論における否定的感覚が少ないことによる問題を提起している。

第6章では、量的・質的アプローチとして、伝記資料から対象人物の該当群を推定するための、より説得力のある方法として、質的データを定量化する「伝記資料定量化分析法」の構築を試みた。

具体的には、第3章、第4章で分析した青年期のミッチェルとクリスティーを対象に、母娘関係尺度（第2章）の21項目について対象者が青年期後期に回答したと想定して評定し、その結果を、クラスタ分析で得られた4群と比較して、該当する群を推定した。数値化して検討することで、質問紙調査の調査対象者ではない人物の質的データから、該当するクラスタを推定することが可能になり、さらに、研究者間が共通の基準を持って議論ができることから、蓋然性の検証に有効であることを示した

第7章では、青年期のミッチェルとクリスティーについて、個別分析による質的検証（第3章、第4章）と、母娘関係尺度を用いて評定した数値（第6章）をもとに、青年期のアイデンティティの様相と、その形成因と考えられる母娘関係について比較分析を行い、母娘関係が娘のアイデンティティ形成に与える影響について検証した。その結果、娘が、母からの押しつけと母への劣等感によって受動的に従属している母娘関係は、有能感の獲得を阻害するため、その後、青年期のアイデンティティ形成に負の影響を与えること、一方で、母からの押しつけや、母への劣等感を感じず、能動的に従属している母娘関係は、娘の有能感の獲得を促進するため、その後、青年期のアイデンティティ形成に正の影響を与えることを見出した。

2. 本研究の成果

1) 母娘関係を測定する尺度の開発と母娘関係の類型化

本研究の1つめの成果としては、青年期における母親との分離と結合について、それぞれ健康的な側面と不健康な側面があることに着目し、母親からの押しつけや母親に対す劣等感などの精神的不健康に繋がると推察される項目を加えた多次元尺度を作成して母娘関係

を検討したことがあげられる。尺度の作成にあたっては、先行研究に加えて、母親との不健康な結合が予測されたマーガレット・ミッチェルの伝記資料を用いた事前分析を参考にしたが、これは、量的・質的方法を交互に繰り返し知見を補完していく、体系的折衷主義（大野,2011）の考えを取り入れた方法であり、生き生きとした資料を用いることで、より具体的な項目が作成できたと考える。

作成された尺度を用いた質問紙調査によるクラスタ分析の結果、母との結合が特徴の群には、健康的な結合タイプと不健康な結合タイプがあり、母との分離が特徴の群にも健康的な分離タイプと不健康な分離タイプがあることが示され、母娘関係を論じるために、有効な類型を示すことができた。

また、親子関係において、昨今は分離と結合の両方が重要であるとする「統合モデル」が主流になっているとされるが（平石, 2014）, 母娘関係においては、どちらも高い状態にはならず、分離か結合のどちらかに比重が置かれる、ということが明らかにされたことで、母娘関係における分離と結合にアンビバレントな部分があることを実証的に示すことができたことは意義があると考ええる。

2) 量的・質的アプローチによる、一般性、個別性の両面からの分析

本研究の2つめの成果は、質問紙調査によるクラスタ分析と、伝記分析を相互補完的に用いて分析することによって、複雑な母娘関係と抽象的な概念であるアイデンティティとの関連をより具体的に検証できたことである。具体的には、不健康な結合タイプである「葛藤従属群」の典型としてミッチェルを、健康的な結合タイプである「親密群」の典型としてクリスティーをとりあげ、根拠資料を用いて分析することによって、統計的に示された両群の一般性を、具体的レベルで検証することが可能になった。つまり、量的分析結果を質的分析結果で補完することで、母親との結びつきが強い娘の特徴について、より具体的に理解が深まったと考える。また、伝記資料を用いた個別の人物の質的分析にあたって、該当すると考えられる群の特徴と照らし合わせることで、分析の蓋然性を高めることが可能になった。こちらは、質的分析結果を量的分析結果で補完している。

以上のように、母親との結合タイプである「葛藤従属群」と「親密群」について、量的分析と質的分析を相互補完的に用いて特徴を明らかにできたことは、関係の近さが特徴とされる母娘関係の分析として、一般性と個別性の両方を把握できるという意味で、非常に意義があると考ええる。また、質問紙調査では読み取れない、将来的に表面化する可能性のある

潜在的な特徴について、伝記分析によって示すことができたことは、全生涯の視点から検証できる伝記分析の長所が十分に活かされた結果であると考えられる。

3) 質問紙調査と伝記研究法を組み合わせた方法論構築の試み

3 つめの成果は、質問紙調査と伝記研究法を組み合わせる、新たな量的・質的アプローチとして、「伝記資料定量化分析法」の構築を試みたことである。これまでの体系的折衷調査法で用いられていた面接法の代わりに伝記研究法を用いたことで、情報量の少なさや守秘義務など、面接法の問題点が解決された。さらに伝記研究法は、生涯発達の視点からの分析ができるため、アイデンティティ研究には有効な研究方法である。

伝記研究法は、数量データを用いない質的研究であるため、解釈の確からしさ（蓋然性）を検証する研究である。したがって、仮説・解釈については、複数の伝記分析に熟達した研究者による検討を行い、最も説得力のある解釈を選択するが、これまで、数量データによる分析に比べて、客観性を示すことがむずかしいことが指摘されていた。そこで、本研究では、伝記分析の結果を、質問紙調査と組み合わせて定量化することを試みた。具体的には、質問紙調査で用いた項目について、対象人物が各項目に回答すると考えられる得点を、複数の研究者が 5 件法で評定し、その平均値を数量データとして用いて、該当クラスタを導き出した。この方法により、研究者が定量化された同じモノサシを用いて議論することが可能になり、論点が明確になった。また、「葛藤従属群」と「親密群」については、クラスタ分析による他群との比較が可能になり、より客観的で幅の広い分析となった。

さらに、第 7 章では、伝記分析の手法のひとつである、比較分析を行ったが、質的な解釈を定量化されたデータで補完したことで、より説得力のある比較が可能になった。

大野（2014）は、質的研究の欠点として、「得られたデータが多様で、広範囲に言及されているため、直接比較することは困難であり、これを可能にするためには分析枠組みを示し、客観的に比較できる根拠となる論理を示す必要がある」と述べているが、本研究では、質的データの比較を可能にする、有効な分析的枠組みを示すことができたと考えられる。

4) 漸成発達理論の対概念における否定的感覚の必要性についての検証

4 つめの成果は、アガサ・クリスティーの伝記分析を通して、漸成発達理論における否定的感覚が少ないことによる問題を提起したことである。Erikson (1959 西平・中島訳 2011) は、漸成発達理論において、肯定的感覚と否定的感覚の間にある一定の比率が重要であり、

否定的感覚との拮抗の結果、肯定的な感覚が勝っていくことで、より健康的な発達をしていくとしている。しかし、これまで、肯定的感覚の重要性について検証した研究は多いが、否定的感覚の必要性について検証されたものは見当たらない。本研究では、第1段階の「基本的信頼感 対 基本的不信」について、クリスティーの母親が、娘に基本的不信を感じさせないことで基本的信頼感を高めたという分析を行い、基本的不信を十分に経験してこなかったために、共感性が育たず、自分の思い通りにならない状況を受け入れられなかったのではないかと、という仮説を導き出した。また、第4段階の「勤勉 対 劣等感」についても同様に、クリスティーの母が、娘に劣等感を感じさせないことで勤勉性を高め、活力である有能感を持たせたのではないかと示した。このような、否定的感覚の必要性についての知見は、今後の漸成発達理論の研究に対して、非常に意義があり、本研究の成果であると考えられる。

3. 今後の課題と可能性

本研究で取り組んだ研究手法は、体系的折衷主義の考えに基づいて量的・質的方法を交互に繰り返し知見を補完していく方法である。具体的には、ミッチェルの伝記分析から、母娘関係における不健康な側面についての具体的特徴を見出し、それを質問紙調査の項目に反映し、クラスタ分析によって、母娘関係の特徴を明らかにした。次に、クラスタ分析によって抽出された4群のうち、母親との結合タイプの2群に該当すると考えられるミッチェル（葛藤従属群）とクリスティー（親密群）について、伝記分析を行ったが、該当クラスタの特徴と比較することで解釈の蓋然性を高めた。さらに、伝記分析によってそれぞれの群の特徴を質的に分析し、クラスタ分析の妥当性を検証した。このような方法で、量的・質的分析を繰り返すことで、説得力のある検証が可能になった。

今後、さらに相互補完的な検証を繰り返すことで、知見が高まると考えられる。たとえば、ミッチェルの伝記分析の結果、青年期にアイデンティティが拡散していても、結婚後、パートナーの力を借りて補っていくこと、つまり親密性という主題に統合していくことによってアイデンティティの問題を解決できる可能性が示されたが、今後は、そうした仮説を量的研究法で検証することで、新たな知見が生まれる可能性がある。また、クリスティーの場合も、伝記分析によって、「基本的不信」についての経験が少ないと「共感性」を獲得できないという可能性が示されたが、今後は、そうした仮説を量的研究で検証することで、やはり新たな知見が生まれる可能性がある。

また、本研究では、母娘関係の4類型のうち、結合タイプである「葛藤従属群」と「親密群」の典型としてミッチェルとクリスティーを分析したが、分離タイプである「反発群」と「自立群」についても典型としての人物を取り上げて分析することで、より全体的な理解が進むと考えられる。

これまで、質的研究の場合、客観性を示すことや、他の研究と比較することがむずかしい、という点が指摘されてきた。これに対して本研究では、質的データを数値化する、という方法に取り組んだ。伝記分析の場合、たとえば、3人の研究者が、「この人物は劣等感が強い」と評価したとしても、それがどの程度のものなのかが明確ではないため、ズレが生じる可能性があった。しかし、5件法で評定すれば、5か4か、場合によっては、3という可能性もあり、その基準を基に議論することで、より正確な特徴把握が可能になり、複数の人物の比較の場合は、さらに有効であろう。また、項目ごとに評価するため、全体の評価が何か大きな出来事の印象に引っ張られるというリスクも減らすことができる。このように、分析する研究者が、同じ基準を持って分析し、議論できる本研究の手法は、質的研究としての伝記研究法の信頼性を高めることに貢献したと考える。その一方で、伝記資料をもとに評定点を決めるのは研究者であることから、資料を客観的に読み取り、心理学的知見をもとに分析する力を養う必要があることはいうまでもなく、数値はあくまでも分析のためのツールであるということを認識する必要がある。そういうことを踏まえて、今後は、より説得力のある手順を模索していくことが重要であると考えられる。

引用文献

- Allen, J.P. (2008). The attachment system in adolescence. In J. Cassidy & P.R. Shaver (Eds.), *Handbook of attachment: Theory, research, and clinical applications* (pp.419-435). New York, NY, US: The Guilford Press.
- Allport, G. W. (1960). *Personality and social encounter*. Boston: Beacon Press,
(オルポート, G.W. 星野 命・原 一雄 (訳)(1972). 人格と社会との出会い 誠信書房)
- 天貝 由美子(1995). 高校生の自我同一性におよぼす信頼感の影響 教育心理学研究, 43, 364-371.
- Archer, S. L., & Waterman, A. S. (1990). Varieties of identity diffusions and foreclosures: An exploration of subcategories of the identity statuses. *Journal of Adolescent Research, 5(1)*, 96-111.
- Beyers, W., & Goossens, L. (1999). Emotional autonomy, psychosocial adjustment and parenting: Interactions, moderating and mediating effects. *Journal of Adolescence, 22*, 753-769.
- Blos, P. (1967). The second individuation process of adolescence. *Psychoanalytic study of the child, 22*, 162-186.
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss: vol.1. Attachment*. London: Hogarth Press.
- Cade, J. (1998). *Agatha Christie and the Eleven Days Missing*. HarperCollins.
(ケード, J. 中村 妙子 (訳) (1999). なぜアガサ・クリスティーは失踪したのか 早川書房)
- Chodorow, N. (1978). *Reproduction of mothering: Psychoanalysis and the Sociology of Gender*. University of California Press.
(チョドロウ, N. 大塚 光子・大内 菅子(共訳)(1981). 母親業の再生産 新曜社)
- Christie, A. (1962). *UNFINISHED PORTRAIT*. HarperCollins.
(クリスティー, A. 中村 妙子 (訳)(2004). 未完の肖像 早川書房)
- Christie, A. (1977). *ANAUTOBIOGRAPHY by Agatha Christie*. HarperCollins.
(クリスティー, A. 乾 信一郎 (訳)(2004). アガサ・クリスティー自伝 上下巻 早川書房)

- Edwards, A. (1983). *The road of Tara: The life of Margaret Mitchell*. Taylor Trade Publishing.
- (エドワーズ, A. 大久保 康雄(訳)(1986). タラへの道 ——マーガレット・ミッチェルの生涯—— 文藝春秋)
- Erikson, E.H. (1950). *Childhood and society*. New York: Norton.
- (エリクソン, E. H. 仁科 弥生 (訳) (1977). 幼児期と社会 みすず書房)
- Erikson, E.H. (1958). *Young Man Luther: A Study in Psychoanalysis and history*. New York: Norton.
- (エリクソン, E. H. 西平 直 (訳) (2002). 青年ルター みすず書房)
- Erikson, E.H. (1959). *Identity and the life cycle. Selected papers. In Psychological Issues. Vol.1*. New York: International University press.
- (エリクソン, E.H. 西平 直・中島 由恵 (共訳) (2011). アイデンティティとライフサイクル 誠信書房)
- Erikson, E.H. (1964). *Insight and responsibility*. New York: Norton.
- (エリクソン, E. H. 鑓 幹八郎 (訳) (1971). 洞察と責任 誠信書房)
- Erikson, E. H. (1968). *Identity: Youth and crisis*. New York: Norton.
- (エリクソン, E. H. 岩瀬 庸理 (訳) (1982). アイデンティティ 金沢文庫)
- Erikson, E.H. (1969). *Gandhi's Truth*. New York: Norton.
- (エリクソン, E. H. 星野 美賀子 (訳) (1973). ガンディーの真理 みすず書房)
- Erikson, E. H. (1974). *Dimensions of a new identity*. New York: Norton.
- (エリクソン, E. H. 五十嵐 武士(訳) (1979) 歴史の中のアイデンティティ—ジェファソンと現代 みすず書房)
- Eskridge, J. (Ed.) (2010). *Before Scarlet: Girlhood Writings of Margaret Mitchell*. The University of South Carolina Press.
- Farr, F., & Mitchell, S. (1965). *Margaret Mitchell of Atlanta: The author of Gone with the wind*. New York: Morrow.
- (ファー, F. 大久保 康雄 (訳) (1967). マーガレット・ミッチェル物語 河出書房)
- Fischer, L.R. (1991). Between mothers and daughters. *Marriage and Family Review*, 16, 237-248.

Forward, S. (2013). *Mothers who can't love: A healing guide for daughters*. Harper paperbacks.

(フォワード, S. 羽田 詩津子(訳) (2015). 毒親の棄て方 ——娘のための自信回復マニュアル—— 新曜社)

藤田 ミナ・岡本 佑子 (2010). 青年期後期における娘のとらえる母親との関係性 広島大学心理学研究, 10, 201-216

藤原 あやの・伊藤 裕子 (2007). 青年期後期から成人期初期にかけての母子関係 青年心理学研究, 19, 69-82.

Gripenberg, M. (1994). *Agatha Christie*. Rowohlt Tb.

(グリペンベルグ, M. 岩坂 彰(訳)(1997). アガサ・クリスティー 講談社)

Grotevant, H.D., & Cooper, C.R. (1981). Assessing adolescent identity in the areas of occupation, religion, politics, friendships, dating, and sex roles: Manual for administration and coding of the interview. *JSAS Catalog of Selected Documents in Psychology*, 11, 52 (ms. no2295)

Grotevant, H.D., & Cooper, C.R. (1986). Individuation in family relationships: A perspective on individual differences in the development of identity and role-taking skill in adolescence. *Human Development*, 29, 82-100.

橋本 やよい (2000). 母親の心理療法 日本評論社

畑野 快・杉村 和美・中間 玲子・溝上 慎一・都筑 学 (2014). エリクソン心理社会的段階目録 (第5段階) 12項目版の作成 心理学研究, 85(5) 482-487

平石 賢二 (2014). 親子関係 後藤 宗理・二宮 克美・高木 秀明・大野 久・白井 利明・平石 賢二・佐藤 有耕・若松 養亮 (編) 新・青年心理学ハンドブック (pp.304-314) 福村出版

Hollingworth, L. S. (1928). *The psychology of the adolescent*. New York: Appleton

Horney, K. (1950). *Neurosis and human growth*. New York: W. W. Norton.

(ホーナイ, K. 榎本讓・丹治竜郎 (共訳) (1998). ホーナイ全集: 6 神経症と人間の成長 誠信書房)

Gilligan, C. (1993). *In a different voice*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.

- 石川 利江・佐々木 和義・福井 至 (1992). 社会的不安尺度 FNE SADS の日本版標準化の試み 行動療法研究, *18*, 10-17.
- Josselson, C.E. (1973). Psychodynamic Aspects of Identity Formation in Collage Women. *Journal of Youth and Adolescence*, *2*, 3-52.
- Josselson, R. (1994). Identity and relatedness in the life cycle. Bosma, H.A., Graafsma, T. L. G., Grotevant, H. D., & de Levita, D. J. (Eds.), *Identity and development: An interdisciplinary approach* (pp.81-102). Thousand Oaks, CA: Sage.
- Josselson, R. (1996). *Revising herself: The story of women's identity from college to midlife*. New York, NY, US: Oxford University Press.
- Josselson, R. (2013). Love in the narrative context: The relationship between Henry Murray and Christiana Morgan. *Qualitative Psychology*, *1*(S), 77-94.
- Kerpelman, J. L., & Smith, S. L. (1999). Adjudicated Adolescent Girls and their Mothers: Examining Identity Perceptions and Processes. *Youth & Society*, *30*(3), 313-347.
- 落合 良行・佐藤 有耕 (1996). 親子関係の変化からみた心理的離乳への懸念の分析 教育心理学研究, *44*, 11-22.
- 小高 恵 (1998). 青年期後期における青年の親への態度・行動についての因子分析的研究 教育心理学研究, *46*, 333-342.
- 小島 慶子 (2014). 解縛：しんどい母から自由になる 新潮社
- Koydemir-Özden, S., & Demir, A. (2009). The Relationship Between Perceived Parental Attitudes and Shyness among Turkish Youth: Fear of Negative Evaluation and Self-esteem as Mediators. *Current Psychology*, *28*(3), 169-180.
- Kroger, J. (1995). The differentiation of "firm" and "developmental" foreclosure identity statuses: A longitudinal study. *Journal of Adolescent Research*, *10*(3), 317-337.
- Kroger, J. (1996). Identity, regression and development. *Journal of Adolescence*, *19*(3), 203-222.
- Kroger, J. (1999). *Identity Development: Adolescence through Adulthood*. SAGE Publications, Inc.
- Kroger, J. (2018). The epigenesis of identity: What does it mean? *Identity*, *18*(4), 334-342.

- 久世 敏雄 (1978). 青年心理学研究の動向 (2) 青年心理 10 (pp. 175-194) 金子書房
- Lamborn, S. D., & Steinberg, L. (1993). Emotional autonomy redux: Revisiting Ryan and Lynch. *Child Development, 64*(2), 483-499
- Mahler, S. M., Pine, F., & Bergman, A. (1975). *The Psychological Birth of The Human Infant Symbiosis And Individuation*. New York: Basic Books Inc.
- (マラー, S.M.高橋 雅士・織田 正美・浜畑紀 (共訳) (1981) 乳幼児の心理的誕生—母子共生と個体化 黎明書房)
- Marcia, J. E. (1966). Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology, 3*, 551-558.
- Mitchell, M. (1996). *Lost Laysen*. New York: Scribner
- 宮下 一博 (1987). Rasmussen の自我同一性尺度の日本語版の検討 教育心理学研究, *35*, 253-258.
- 三好 昭子・大野 久・内島 香絵・若原 まどか・大野 千里 (2003). Ochse & Plug の Erikson and Social-Desirability Scale の日本語短縮版(S-ESDS)作成の試み 立教大学心理学研究, *45*, 65-76.
- 三好 昭子 (2003). 主観的な感覚としての人格特性的自己効力感尺度(SMSGSE)の開発 発達心理学研究 *14*(1), 172-179
- 三好 昭子 (2008). 谷崎純一郎の否定的アイデンティティ選択についての分析 発達心理学研究, *19* (2), 98-107.
- 三好 昭子 (2011). 有能感の生成と、その後のアイデンティティに基づいた生産性についての伝記資料による比較分析 ——谷崎潤一郎と芥川龍之介の伝記資料を用いて—— 発達心理学研究, *22*(3), 286-297.
- 三好 昭子 (2014). 伝記研究法によるアイデンティティ研究 宮下 博・谷 冬彦・大倉 得史(編) アイデンティティ研究ハンドブック (pp.41-58) ナカニシヤ出版
- 水本 深喜・山根 律子 (2011). 青年期から成人期への移行期における母娘関係 ——「母子関係における精神的自立尺度」の作成および「母子関係の 4 類型モデル」の検討—— 教育心理学研究, *59*, 462-473.
- 水本 深喜 (2015). 母親への親密性が青年期後期の娘の精神的自立に与える影響——「母親への親密性尺度」による検討——. 青年心理学研究, *27*, 103-118.

- 茂垣 まどか (2005). 青年の自我理想型人格と超自我型人格の精神的健康——べきの専制の様相の観点から—— 教育心理学研究, 53, 344-355.
- 茂垣 まどか (2007). 青年期における, 志向性の自我理想的・超自我的あらわれ(5) ——志向性・べきの専制と, 幼少期の自我発達の様相や家風, 青年の親への態度との関連—— 日本教育心理学会第 49 回総会発表論文集, 32.
- Morgan, J. (1984). *Agatha Christie: A Biography*. HarperCollins.
- (モーガン, J. 深町 真理子・宇佐川 晶子(訳) (1987) アガサ・クリスティーの生涯 上下巻 早川書房)
- 西平 直喜 (1981a). 伝記に見る人間形成物語 (1) ——幼い日々にきいた心の詩—— 有斐閣
- 西平 直喜 (1981b). 伝記に見る人間形成物語 (2) ——子どもが世界に出会う日—— 有斐閣
- 西平 直喜 (1983). 青年心理学方法論 有斐園
- 西平 直喜 (1990). 成人になること——生育史心理学から—— 東京大学出版会
- 西平 直喜 (1996). 生育史心理学序説——伝記研究から自分史制作へ—— 金子書房
- 西平 直喜 (2004). 偉い人とはどういう人か 北大路書房
- 大野 久 (1983a). 現代青年の充実感に関する研究(4) : 面接法による充実感・生きがい感モデルの一検討 日本教育心理学会第 25 回総会発表論文集 388-389.
- 大野 久 (1983b). 現代青年の充実感に関する研究 —— 3 段階分析法適用の試み—— 青年心理学研究会(編) 現代青年の心理 (pp.137-144) 福村出版
- 大野 久 (1984). 現代青年の充実感に関する一研究——現代青年の心情モデルについての検討—— 教育心理学研究, 32, 100-109.
- 大野 久 (1996). ベートーヴェンのハイリゲンシュタットの遺書の「自我に内在する回復力」からの分析 青年心理学研究, 8, 17-26.
- 大野 久 (2008). 伝記研究により自己をとらえる 榎本 博明・岡田 努(編) 自己心理学 1 自己心理学の歴史と方法 (pp.129-149) 金子書房
- 大野 久 (2011). 量的研究と質的研究の長短所と補完的折衷 : 体系的折衷調査法の提案 岩立志 津夫・西野 泰広(編) 日本発達心理学会(シリーズ編) 発達科学ハンドブック : 2 研究法と尺度 (pp.174-185) 新曜社

- 大野 久 (2014). 青年心理学研究の方法論 後藤 宗理・二宮 克美・高木 秀明・大野 久・白井 利明・平石 賢二・佐藤 有耕・若松 養亮(編) 新・青年心理学ハンドブック (pp.26-37) 福村出版
- Peacock, J. B. (Ed.) (1985). *A Dynamo Going to Waste: Letters to Allen Edee, 1919-1921*. Atlanta: Peachtree Publishers, Ltd.
- Prichard, M. (Ed.) (2012). *The Grand Tour: Letters and photographs from the British Empire Expedition 1922*. William Morrow
- Rastogi, M. (2002). The Mother-Adult Daughter Questionnaire (MAD): Developing a culturally sensitive instrument. *The Family Journal: Counseling and Therapy for Couples and Families*, 10(2), 145-155.
- Rosenthal, D. A., Gurney, R. M., & Moore, S. M. (1981). From trust to intimacy: A new inventory for examining Erikson's stages of psychosocial development. *Journal of Youth and Adolescence*, 10, 525-537.
- 笹川 智子・金井 嘉宏・村中 康子・鈴木 伸一・嶋田 洋徳・坂野 雄二 (2004). 他者からの否定的評価に対する社会的不安測定度(FNE)短縮版作成の試み：項目反応理論による検討. *行動療法研究*, 30, 87-98.
- 斎藤 学 (2004). インナーマザー ——あなたを責めつづけるところの中の「お母さん」—— 新講社
- 関口 範子 (2019). 美空ひばり恋し——お嬢さんと私—— 主婦と生活社
- 信田 さよ子 (2008). 母が重くてたまらない——墓守娘の嘆き—— 春秋社
- 白井 利明 (1994). 時間的展望体験尺度の作成に関する研究 *心理学研究*, 65, 54-60.
- 杉村 和美 (2001). 関係性の観点から見た女子青年のアイデンティティ探求——2年間の変化とその要因—— *発達心理学研究*, 12(2), 87-98.
- 田房 永子 (2012). 母がしんどい KADOKAWA/中経出版
- 高木 紀子・柏木 恵子 (2000). 母親と娘の関係 ——夫との関係を中心に—— *発達研究*, 15, 79-94.
- 田中 正 (1993) 親子関係と自我の確立——青年期後期の女子を対象として—— *名古屋文理短期大学紀要*, 18(0), 7-14

- 若原 まどか (2003). 青年が認識する親への愛情や尊敬と、同一視および充実感との関連
発達心理学研究, *14*(1), 39-50
- Walker, M. (1993). *Margaret Mitchell & Jhon Marsh: The love story behind Gone with the wind*. Atlanta: Peachtree Publishers, Ltd.
(ウォーカー, M. 林 真理子 (訳) (1996). マーガレット ラブ・ストーリー 講談社)
- Waterman, A. S. (1982). Identity development from adolescence to adulthood: An extension of theory and a review of research. *Developmental Psychology*, *18*(3), 341-358.
- 渡邊 恵子 (2004). 母親と娘はなぜ親密か——青年期から成人期にかけて—— 柏木 恵子・高橋 恵子(編) 心理学とジェンダー——学習と研究のために—— (pp.31-36). 有斐閣
- 山田 みき・岡本 祐子 (2008). 「個」と「関係性」からみた青年期におけるアイデンティティ——対人関係の特徴の分析—— 発達心理学研究, *19* (2), 108-120
- 山岸 明子 (2005). 青年後期と成人期初期に記述された生育史と対人的枠組みの変化との関連——7年間の縦断的研究—— 青年心理学研究, *17*, 15-26.
- 山岸 明子 (2009). 成人期女性の現在の母親認知と青年期の母親認知の関連、及びその規定要因 青年心理学研究, *21*, 53-68.
- 山本 真理子・松井 豊・山成 由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, *30*, 64-68.

関連文献

赤木 真弓 (2016). 母娘関係が娘のアイデンティティ形成に及ぼす影響——クラスタ分析と伝記分析による検討—— 日本青年心理学会第 24 回大会発表論文集, 30-31.

赤木 真弓 (2018). 母娘関係が娘のアイデンティティ形成と精神的健康に与える影響——母娘関係尺度の作成を通して——発達心理学研究, 29(3), 114-124.

赤木 真弓 (印刷中). 娘のアイデンティティ形成を妨げる母娘関係の特徴——マーガレット・ミッチェルの伝記資料の分析から—— 青年心理学研究, 31(2)

赤木 真弓 (印刷中). 娘のアイデンティティ形成を支える親密な母娘関係——アガサ・クリステイーの伝記資料の分析から—— 立教大学心理学研究, 62

謝辞

本学位論文の執筆にあたり、多くの方々のご指導、ご支援、ご厚意をいただきました。この場を借りて、感謝の意を述べさせていただきたいと思います。

指導教員である、大野久教授には、ひとかたならぬご指導をいただきました。研究の基本から丁寧にご指導いただき、特に、先生が構築してこられた伝記分析について学べたことは、私の研究の核となりました。先生との出会いがなければ、今日の私はありません。

芳賀繁名誉教授には、長い社会人生活を経て、心理学の研究実績もないまま入学した私を柔軟に受け入れていただき、多くのご教示を賜りました。先生のおかげで前に進むことができました。

副指導教員である浅野倫子准教授には、折に触れ貴重なご助言をいただきました。特に第6章については、先生にご指導をいただいたことで、この論文が前進いたしました。先生の物事を見る視点、柔軟な発想に触れ、領域を超えて、大変多くを学ばせていただきました。

後期課程の前半まで副指導教員としてご指導いただいた大石幸二教授には、前期課程のころから様々なご助言をいただきました。いつも私の研究のよいところを指摘してくださり、本当に励みになりました。

本学位論文の外部審査員となっていただきました、筑波大学の佐藤有耕教授には、研究の進め方、研究姿勢についてご教授いただき、本論文についても非常に貴重なご助言を賜りました。

さらに、毎年、授業で研究報告をさせていただいた際には、専攻の先生方、先輩、後輩のみなさまから、貴重なご助言、ご意見をいただきました。日高聡太教授には、研究内容だけでなく、進路などについても常に温かいご助言をいただきました。また、嘉瀬貴祥先生には、いつも本当に丁寧にご指導いただき、分析方法について、大変貴重なご助言をいただきました。

また、調査に協力してくださった学生の方々には、貴重なお時間をいただきました。深く感謝いたします。

そして、大野研究室では、素晴らしい先輩方に恵まれました。茂垣まどか先生には、修士時代からひとかたならぬお世話になりました。どんなことでも親身に相談に乗っていた

だき、いつも労を惜しまぬご支援をいただきました。日本女子体育大学准教授の三好昭子先生には、特に伝記分析について様々なご助言をいただき、多くを学ばせていただきました。今井美智子先輩には、初めてゼミに参加したときから、本当に好意的に迎えていただき、いつもフォローしていただきました。また、後輩のみなさまとも、世代、文化を超えて交流させていただきました。大野研究室は、研究に真摯に取り組みなながらも、自由で温かい、素晴らしいファミリーでした。

最後に、突然学生を始めた私を応援してくれた家族、そして、私がチャレンジするきっかけを与えてくれた澤田雪絵さんに感謝いたします。

人生後半に入ってからゼロからのチャレンジで、思わぬ試練もあり、挫折しそうなこともありましたが、多くの皆様に支えられ、充実した日々を送ることができました。心より深く感謝いたします。

2020年1月 赤木真弓

付録

付録1 質問紙(第3章)

「青年の生き方と母親との関係」に関する調査ご協力をお願い

この調査は、青年の生き方と母親との関係に関する研究を目的として行なうものです。回答はすべて統計的に処理され、回答者の個人情報が特定されることや公開されることは、一切ありません。また、この調査の回答が本研究目的以外で使用されることもありません。ある回答が正解ということは全くありませんので、あまり考え込まずに直感的にお答えください。

以上の内容に同意の上で、調査にご協力いただけるという方は、以下の質問への回答をお願いします。

なお、途中で回答を止めなくなった場合には、放棄していただいてもかまいません。

この研究についてのご質問、ご意見などは、下記の連絡先にお寄せ下さい。また、研究結果につきましても、以下の連絡先にご連絡いただければ論文の完成後に要約をお送りいたします。

立教大学院現代心理学研究科心理学専攻
博士後期課程1年

赤木 真弓
makagi@rikkyo.ac.jp

青年の生き方と母親との関係についての調査

立教大学現代心理学研究科 心理学専攻 博士課程後期課程 1年 赤木真弓

I. 当てはまるところに○をつけ、空欄に記入してください。

性別 : 男 / 女

年齢 : _____ 歳

II. あなたのことについてうかがいます。あてはまる数字に○をつけてください。

(5-非常にそうだ 4-かなりそうだ 3-どちらとも言えない 2-あまりそうではない 1-まったくそうではない)

- | | |
|---|-------------------|
| 1 私の未来は明るいと思う..... | 5 - 4 - 3 - 2 - 1 |
| 2 私は必要以上に、人に申し訳ないような気がする..... | 5 - 4 - 3 - 2 - 1 |
| 3 自分の望みをかなえるためなら、あえて冒険してもよい..... | 5 - 4 - 3 - 2 - 1 |
| 4 自分には能力があると思う..... | 5 - 4 - 3 - 2 - 1 |
| 5 私って本当はどんな人間なのかわからない..... | 5 - 4 - 3 - 2 - 1 |
| 6 私は、自分自身にだいたい満足している..... | 5 - 4 - 3 - 2 - 1 |
| 7 私は自分の中に「こうしなければいけない」という声にしたがって生きている..... | 5 - 4 - 3 - 2 - 1 |
| 8 私は、自分自身を、ある程度信頼できる..... | 5 - 4 - 3 - 2 - 1 |
| 9 人がなんでしょうと、どうということはないとわかっているも、
自分のことを人がどう思うか気になる..... | 5 - 4 - 3 - 2 - 1 |
| 10 これまでに会ったほとんどの人は私によくしてくれた..... | 5 - 4 - 3 - 2 - 1 |
| 11 時々、自分はまったくダメだと思うことがある..... | 5 - 4 - 3 - 2 - 1 |
| 12 他の人が私の欠点に気づくのではないかとしばしば心配する..... | 5 - 4 - 3 - 2 - 1 |
| 13 今心から頼れる人にもいつか裏切られるかもしれないと思う..... | 5 - 4 - 3 - 2 - 1 |
| 14 私は、元気がないと思う..... | 5 - 4 - 3 - 2 - 1 |
| 15 自分で何かを決めた後、それが間違いだったような気がする..... | 5 - 4 - 3 - 2 - 1 |
| 16 私は人と競争(することで自分の能力を発揮)することを楽しむ..... | 5 - 4 - 3 - 2 - 1 |
| 17 何かをやろうと思っても、私にはそれを始めるほどのエネルギーがない..... | 5 - 4 - 3 - 2 - 1 |
| 18 私は、のけ者にされているように感じる..... | 5 - 4 - 3 - 2 - 1 |
| 19 私にはけっこう長所があると感じている..... | 5 - 4 - 3 - 2 - 1 |
| 20 そういえば私は、「～しなければならない」という判断基準のもとに行動している..... | 5 - 4 - 3 - 2 - 1 |

21 私は、自分自身の行動をある程度はコントロールできるという確信を持っている……………	5 - 4 - 3 - 2 - 1
22 他の人が自分のことを認めてくれなくても、あまり気にならない……………	5 - 4 - 3 - 2 - 1
23 一般的に、人間は信頼できるものだと思う……………	5 - 4 - 3 - 2 - 1
24 人生に望むものが定まらない……………	5 - 4 - 3 - 2 - 1
25 私は自分が計画したことを実行して、それを成功させる自信がある……………	5 - 4 - 3 - 2 - 1
26 私は生きている間には、自分がしたいことを成し遂げられると思う……………	5 - 4 - 3 - 2 - 1
27 私は、他の大半の人と同じくらいに物事がこなせる……………	5 - 4 - 3 - 2 - 1
28 どちらかという私は、「～したい」という気持ちよりも「～すべきだ」という判断によって行動するほど……………	5 - 4 - 3 - 2 - 1
29 所詮(しょせん)、周りは敵ばかりだと感じる……………	5 - 4 - 3 - 2 - 1
30 どんな印象を人に与えているか、ほとんど気にしない……………	5 - 4 - 3 - 2 - 1
31 私には能力がないので、人生で本当にしたいことができないような気がする……………	5 - 4 - 3 - 2 - 1
32 友だちから非難されるのではないかと心配になる……………	5 - 4 - 3 - 2 - 1
33 これまでの経験から、他人もある程度は信頼できると感じる……………	5 - 4 - 3 - 2 - 1
34 人に自分の欠点を、みつけられるのではないかと心配だ……………	5 - 4 - 3 - 2 - 1
35 私には誇れるものが大してないと感じる……………	5 - 4 - 3 - 2 - 1
36 私は人から信頼されていないように思う……………	5 - 4 - 3 - 2 - 1
37 私は好奇心や探求心が旺盛だ……………	5 - 4 - 3 - 2 - 1
38 私はいつも演技したり、見せかけの行動をしているように思う……………	5 - 4 - 3 - 2 - 1
39 時々、自分は役に立たないと強く感じることもある……………	5 - 4 - 3 - 2 - 1
40 状況が許せば、たいいてい人間はお互いに正直に、かつ誠実にかかわりあいたいと思っ ているだろう……………	5 - 4 - 3 - 2 - 1
41 誰かと話しているとき、その人が自分のことをどう思っているか心配だ……………	5 - 4 - 3 - 2 - 1
42 穴があつたら入りたいとか、人前から消えてなくなりたいと思うことがある……………	5 - 4 - 3 - 2 - 1
43 私は、何かやりとげられるような気がする……………	5 - 4 - 3 - 2 - 1
44 自分がどんな印象を与えているのかいつも気になる……………	5 - 4 - 3 - 2 - 1
45 自分で自分をしっかり守っていないと、壊れてしまいそうな気がする……………	5 - 4 - 3 - 2 - 1
46 つい、「なにになにしなければいけない」と思ってしまうほうだ……………	5 - 4 - 3 - 2 - 1
47 自分は少なくとも他の人と同じくらい価値のある人間だと感じている……………	5 - 4 - 3 - 2 - 1
48 私は、私であることに誇りを感じている……………	5 - 4 - 3 - 2 - 1
49 私は自分の能力を最大限に生かしている……………	5 - 4 - 3 - 2 - 1
50 人と競争するとき、私は勝つことに一生懸命になる……………	5 - 4 - 3 - 2 - 1

51 他の人が私のことを価値がないと思うのではないかと心配だ.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1
52 私は、自分の人生に対し、何とかやっていけそうな気がする.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1
53 誰かが、私の欠点に気づいてしまうような気がする.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1
54 人は信用できるものだ.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1
55 他の人が私のことをどう思うかはほとんど気にならない.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1
56 自分のことをもう少し尊敬できたらいいと思う.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1
57 過去に、誰かに裏切られたりだまされたりしたので、信じるのが怖くなっている.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1
58 人類って素晴らしいと思う.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1
59 私は意志が強い.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1
60 (日頃) 私はわくわくするようなプランを立てている.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1
61 私の中の「～すべきだ」もしくは「～すべきでない」というルールは絶対だ.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1
62 自分自身について、今は実現していないことでも、いつかこうなるだろうと 信じられることは多い.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1
63 他の人が私のことをどう思っているか、気にしすぎると思うことがときどきある.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1
64 どうせ失敗するだろうから、難しいことは避けてとおる.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1
65 私のことを人がどう思っているか、よくわからない.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1
66 私は多少のことがあっても、今の信頼関係を保っていけると思う.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1
67 他の人が私をどう思っているか気にかけないほうである.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1
68 よく、私は落ちこぼれだと思ってしまう.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1
69 気をつけていないと、人は私の弱みにつけ込もうとするだろう.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1
70 私は、自分に合った生き方をしていると思う.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1
71 私のしたことを(人が見たら)人ならもっとうまくできたのではないかと、 あまり悪い思いをする.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1
72 私はなぜか人に対して疑り深くなってしまう.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1
73 私は何かをする際に、新しい方法を試してみることにためらいを感じる.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1
74 人の意見に賛成できないとき、それを相手に伝える.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1
75 周りのほとんどの人は私を信頼してくれているだろう.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1
76 私の友達が自分をどう思っているかをあれこれ考えてしまう.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1
77 私の人生には何か足りないと思う.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1
78 私は、自分のことを前向きに考えている.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1
79 私は私で、決して他人にはとってかわることの出来ない存在だと思う.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1
80 私は自分自身が信頼に値する人間だと思う.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1

Ⅲ あなたの母親(もしくは母親代わりの人)について、あなたがどのように感じてきたかをお尋ねします。あてはまる数字に○をつけてください。

(5-非常にそうだ 4-かなりそうだ 3-どちらとも言えない 2-あまりそうではない 1-まったくそうではない)

81 母は温かみのある人だ.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1
82 私は何かを決めなければならない時、母の意見に従ってきた.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1
83 母は柔軟性に欠ける.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1
84 私は母には何でも話せると感じる.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1
85 私は母に対してしばしば劣等感を感じる.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1
86 母は優れた人間だと思う.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1
87 母は思いやりがある.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1
88 私は生き方について、自分の意見より母の意見を優先してきた.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1
89 母は自分の考えを押し付けることが多い.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1
90 私は母によく相談をした.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1
91 母は愛情豊かな人だ.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1
92 私は多くの点で母に引け目を感じる.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1
93 私は母を尊敬している.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1
94 私はこれまで母にずっと従順だった.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1
95 私は母を重荷に感じることもある.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1
96 私は母とよく話をする.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1
97 私は母を誇りに思う.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1
98 母に否定されると不安になる.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1
99 母は有能な人だと思う.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1
100 私の生き方に母の意見は関係ない.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1
101 私は母を見ていると自信を失う.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1
102 母は立派な生き方をしている.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1
103 母の言うことは間違っていることが多い.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1
104 母は私をいつも気にかけてくれた.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1
105 私は母と仲がよい.....	5 - 4 - 3 - 2 - 1

ご協力ありがとうございました。記入漏れがないか、もう一度お確かめください。

なお、本研究ではインタビュー調査を予定しています。実施時期は、9月以降で、所要時間は1時間程度です。本調査に関する秘密は必ず厳守いたしますので、ご協力いただける方は、下記に連絡先をご記入ください。後日、ご連絡させていただきます。

お名前: _____

お電話番号: _____

mail アドレス: _____

付録 2 マーガレット・ミッチェル年譜

<家族>

●父：ユージン・ミッチェル

弁護士で、アトランタ弁護士会会長、アトランタ歴史協会会長を兼ね、アトランタ市史やジョージア州史の権威として知られていた。学究肌で読書を好む。もともとは作家志望であった。冒険性はない。妻の行動力を高く評価していた。妻の死に大きなショックを受け気力を失う。晩年は気難しくなる。

●母：メイベル・ミッチェル

アトランタの婦人参政権運動グループのリーダーの一人。熱心なカトリック信者でジョージア州カトリック在家協会設立発起人のひとり（カトリックは少数派）。行動力、確固たる目標意識。社交感覚にも優れていた。一方で、家庭、妻の役割については保守的であった

●兄：スティーヴンズ・ミッチェル

ミッチェルの5歳年上。弁護士。アトランタ歴史協会会報の編集者で、アトランタ弁護士会会長、ミッチェルの著作権所有者。

●祖母（母方）

気が強く、市民意識が強い。市議会に押しかけて行政を動かしたりした。マーガレット2歳のときにメイベルと対立し別居。のちに、ミッチェルとも決裂している

<恋人・配偶者>

●クリフォード・ヘンリー（最初の婚約者）

ハーバード出の将校。痩身、色白、退廃的な印象。読書家で詩やシェークスピアを引用した。婚約後、戦地へ赴き、ミッチェルと手紙を交わしたが、戦死した。「風と共に去りぬ」のアシュレーのモデルとされる

●レッド・アップショー（最初の夫）

ジョージア州出身。海軍兵学校中退後、ジョージア大学入学。派手な生活を支えていた資金の出どころは不明だが、密造酒の運び屋だったらしい。周囲の評価は、「並はずれて魅力的」「セクシー」「気まぐれ」「放蕩者」「見栄っ張り」「道徳観が低い」など。ミッチェルと不仲になると、酒浸りになり、暴力をふるったとされる。後年、飛び降り自殺。「風と共に去りぬ」のレッド・バトラーのモデルとされる

●ジョン・マーシュ（2番目の夫）

アップショーのルームメイト。AP通信社、アトランタジャーナルで整理部の仕事。一度ワシントンに転勤するが、ミッチェルの希望でアトランタの電力会社宣伝部に転職。ミッチェルがアップショーを選んでも、友人として支え続け、後に結婚。極端に保守的で、冒険的な人間ではない。信頼できる人物。ミッチェルの才能を認め、生涯支えた。

<年譜>

西暦	年齢	出来事	心理的事象	世の中の動き
1900	0	・1902年 ジョージア州アトランタ市の母方の祖母の 家で生まれる		
1902	1	・ジャクソン・ストリートの家に移り越す。 * 祖母と母の不仲が原因	・強い祖母と強い母	
1904 ~ 3 ~5		・母は、礼儀に反する無口は許さなかった。 ・ストーブの火がスカートに移り大火傷 * 母は事故を避けるため、小学校に入るまでズボンをはかせる(女の子からのけものにされた) ・母の厳しい躰け(そむくとヘアブラシで叩かれる) ・大人たちの「南北戦争」の思い出話を聞きながら育つ ・母は、ミッチェルの腰にスローガン巻き付けて、婦人参政権運動の集会に行った ・童話を読み、お芝居や物語を書き始める	【母からの強要】 ・内向性は否定され、本人の個性は無視された ・厳しい躰け * 自律性<恥・疑惑 ・母は自分にはないものをすべて持っている偉大な人物だと感じていた。母の意見は絶対だった * 母=超自我	・40年前の南北戦争の影響が残っており、南部意識が強かった ・女性は淑女であることが重要
1907 ~ 6 ~9		<小学校入学> ・おとぎ話や冒険ものを好んで読む ・母は古典を読ませたがった ・トルストイなど退屈と言いつつ、出だししか読んでないのに「読んだ」と嘘を平気でついた ・多くの物語を創作した ・数学をやりたいくない、というミッチェルを母は没落した地域へつれてゆき、勉強しなければ、落ちぶれてまう、と脅した。それ以降、必死で勉強。	【母の期待する姿を演じる】 ・「よいこ」の振り ・母の示すルールからはずれると人生の落伍者になるという恐怖 【物語の内容】 ・王子に助けられる王女の物語など →ズボンをはかされ、女の子になりたい欲求を * 物語の中で昇華。 * 現実と離れた空想の世界で主導性を発揮	
1911	10	・母はズボンからスカートをはかせ、ダンスを習わせる(レディ教育を始める) ・南部が戦争に負けた事実を初めて知る ・乗馬中、左足に大怪我 ・父が新築した、19世紀前半のギリシャ復古様式の邸宅に移り越す。 ・母は宗教活動に熱心ではないミッチェルに不満だったが、これを「科学指向」の現れととり、「女医になる未来があるのよ」と言い聞かせ続けた。 ・誰かから「大きくなったら何になるの?」と聞かれると「お医者さん」と答えていた ・シナリオを作り仲間と劇を演じた	【母の価値観による教育】 「男の子」から淑女教育への移行 【母の決めた将来設計】 ・自分の興味と母の希望の違いを感じていたが、自分の進む道は母の意思に従うべき * フォークロージャー 【母によるダブルバインド】 ・淑女教育 ・賭博者であれ。時代の先端を行け(女医) 【シナリオの内容】 ・冒険もの。主人公の名前は常にマーガレット。リーダーとして危機を救う強い女性(母の望む姿)	
1912	11	・1年間ウッズベリー・スクールに通う。 ・コートニー(親友)、エンジェルとの交友が始まる	・母は、ミッチェルに「婦人運動」への興味を持たせるように仕向けるが、興味がわかず、母の世界からはみ出した気がした	
1914	13	・私立のワシントン女学院に入学 なじめなかった。多くの敵を作り、「おのれの敵を一生忘れなかった」(兄) 「お山の大将でいられる時しか幸せを感じられない女の子だった」(クラスメート) ・演劇クラブに入部し、短編小説が校内雑誌に掲載される。	【自分を脅かす人間に対する拒絶】 ・才能があり、魅力的な部分を持ちながら、敵と味方をはっきりさせる ・自分の安心できる世界だけを受け入れる * 評価懸念	
1916	15	『ロスト・レイゼン』を書き、ボーイフレンドのエンジェルに贈る (死後に発見。出版。魅力的で強気なヒロイン。彼女のために命を捨てる恋人。ヒロインは自ら命をたつて貞節を守る。)	・淑女だが、自らの価値観を持ち、強いヒロイン * 母の望む女性像(自分とは異なる)	
1917	16	若い将校たちとの交流(人気者) 恋愛ごっこを楽しむ	【自分の思い通りになる恋愛】 ・自分を決して拒絶しないとわかっている男性を振り回すことに喜びを感じる * 評価懸念を感じなくて済む	米国、第一次世界大戦参戦 アトランタ火災

西暦	年齢	出来事	心理的事象	世の中の動き
1918	17	<ul style="list-style-type: none"> ・ワシントン女学院を卒業 8月 クリフォード・ヘンリー中尉と恋に落ち、密かに婚約する。 ・9月 マサチューセッツ州のスミス・カレッジに入学（精神科医志望） ・10月 クリフォードがフランスの戦場で死去 	<p>【母の意向による学校選択】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スミスカレッジは学問的な評判だけでなく、女性の権利を尊重する（母が重視すること） ・級友たちは世界の出来事や音楽、芸術に詳しくあったが、マーガレットはそういう話題には口を出さず、自分の得意な話題（南北戦争等）については活発に話した <p>【物語のような現実味の無い恋愛】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・クリフォードとの結婚とアトランタで開業することをどう調整するかは考えず→現実感のない恋だった ・死によってクリフォードは理想化した 	
1919	18	<ul style="list-style-type: none"> ・母がインフルエンザで死去。 ・父はすっかりまいってしまう 祖母が家に来て、一緒に暮らし始める。 ・父の勧めで、いったんはカレッジに戻るが、もともと 	<p>【絶対的な存在のまま母を失う】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・母の遺言（手紙）「自分自身の人生を生き、余った分を他人に提供しなさい」 * 最期まで娘を支配 	アトランタで初の女性参政権
1920	19	<ul style="list-style-type: none"> ・公然と酒、タバコをやり、放埒な友人と付き合った。 ・祖母と喧嘩。母方一族から縁を切られる ・また落馬し、前と同じ足に怪我をする。 ・アトランタ社交界にデビュー。 	* 否定的アイデンティティ	
1921	20	<ul style="list-style-type: none"> ・ダンス・パーティーで、悪名高いアパッシュ・ダンスを踊り、その後、アトランタ・ジュニア・リーグへの入会を拒否される。 ・ジョン・マーシュとの出会い。毎晩会うようになる 	・この屈辱を生涯忘れず、有名になった後、仕返しをしている	・新しい文化思想（女性のキャリア、離婚の一般化）
1922	21	<ul style="list-style-type: none"> ・アップショーと結婚 （ジョンが花婿介添え人になったことに周囲は驚く） ・新婚旅行中に、クリフォードへの想いを語ったり、彼の両親に絵葉書を出す ・ミッチェルの実家での同居（アップショーは反対）がさらに関係を悪化させる ・不満をジョンや親友に書き送り、クリフォードとのロマンスについてもしばしば触れている ・アップショーは酒に走り、乱暴になる ・アップショーが家を出ていく ・ジョンとのプラトニックな交際が続く ・アトランタジャーナル社の記者となる 	<p>【否定的アイデンティティとしての結婚】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・極端に保守的でミッチェルを淑女として扱うジョンではなく、ミッチェルの「不良」の部分を好んだアップショーを選ぶ。 ・わざわざクリフォードの話をするなど、自ら結婚生活を壊すような行動。 ・ジョンの後押しで就職 	・ジャズエイジの始まり（享乐的な都市文化）
1923	22	<p><記者時代> 1923～26年</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ベギー・ミッチェルの筆名でインタビュー記事などを百数十回に渡って執筆 ・週60時間の激務であった ・人物描写にたけていたとされ、24年には花形記者の地位を確立していた。 ・記事のほとんどをジョンに校閲してもらっていた。 ・ある記事に対して、抗議の手紙が大量に届き、非難された。記事の正当性を伝える記事の掲載を拒否されると、その後、数日、執筆障害に陥った。 ・より格式の高い出版社に行くなどの野心はまったくなかった 	<ul style="list-style-type: none"> ・ミッチェルは記者の仕事を楽しむ。自分に関係なく、他人を観察し描写するという、彼女の天分に合った仕事といえる ・取材は楽しんだが、「記事」の完成度は気にしたため、ジョンの校閲で安心できた * 評価懸念 ・批判に対して過剰に反応する。 ・評価されてもより上は目指さない 	
1924	23	<ul style="list-style-type: none"> ・ジョン、ジョージア電力会社広報部に転職 ・アップショーが突然現れる→決裂。正式離婚 		
1925	24	<ul style="list-style-type: none"> ・ジョン・マーシュと結婚 	【不安なく依存できるジョンとの結婚】	
1926	25	<ul style="list-style-type: none"> ・アトランタジャーナル社を退社 ・ミステリー小説『ローバ・カーマギン』、冒険小説『パンジーの冒険』を書く。 ・落馬による怪我の悪化。読書三昧 ・ジョンのすすめで『風と共に去りぬ』執筆開始 ・ジョンが相談にのり、校閲していた。 ・仲たがっていた父との関係も改善 	<ul style="list-style-type: none"> ・「結婚した女はまず妻でなければならない。私はマーシュ夫人です」と生涯語っていた * 母による超自我 ・小説を書いていることは一部の友人が知っていたが、進捗を尋ねられても「人に読んでもらえるようなものにはならない」と言い続けた。ジョンにしか見せない安心感で書けた * 評価懸念、自己信頼の低さ 	

西暦	年齢	出来事	心理的事象	世の中の動き
1927	26	ジョン、電力会社で頭角を現し始める		
1932	31	広いアパートに引っ越し		
1933	32	「風と共に去りぬ」ほぼ完成		
1934	33	・母方の祖母死去 ・自動車事故で背中と脚に負傷する。		
1935	34	・新人作家発掘旅行中のマクミラン社のレイサムが、ミッチェルの噂を聞き、原稿を見せてほしいと頼むが頑なに断る。 (人に見せられるようなものは書いてないと言い切る) ・作家の卵の女性との会話で、マーガレットが「自分の原稿など見せられるようなものではない」と言ったのに対し、その女性が「あなたはすばらしいものを書けるような人だと思えない。時間の浪費だ。作家になる柄じゃない」と言われたことに、急に腹がたち、癩癩をおこしてレイサムに原稿を持って行った (友人のルイス・コールへの手紙より) ・マクミラン社、「風と共に去りぬ」の出版決定	【作品への評価懸念】 ・作品が批判されるくらいなら出さない * 評価懸念 【不信感、他者信頼の低さ】 ・自尊心を傷つける非難に過剰に反応 * 自尊心の高さと評価懸念の葛藤。	
1936	35	「風と共に去りぬ」完成 出版決定から半年かけて、原稿を整理。構成や文体だけでなく、歴史的事実の誤謬を指摘されないよう、再度資料を調べ上げた	・完成してからは、周囲の反響を気にし始め、友人に「アトランタの保守的な人にどう思われるだろうか？」と不安を打ち明けている * 評価懸念	
1937	36	・ピューリッツァ賞を受賞		
1938	37	・フロリダ図書協会からカール・ポーネンバーガー記念賞受賞		
1939	38	・母校スミス・カレッジから名誉学位授与 ・「風と共に去りぬ」プレミアショーでスピーチ		
1940	39	・「風と共に去りぬ」アカデミー賞10部門受賞 ・腹部癒着のため手術		
1941	40	・著作権関連の裁判が続く		真珠湾攻撃
1943	41	・腰椎と脊椎の軟骨を切除する手術		
1944	43	・父、死去		
1945	44	・第二次世界大戦後、再びベストセラーになる		第2次大戦 終結
1949	48	・アップショー、飛び降り自殺 ・ミッチェル、タクシーにはねられ、数日後死去 ・ジョンはミッチェルの遺志によって、彼女が書いたすべての原稿、手記、日記などをアパートの裏庭で焼却する。	【死後の評価懸念、不信感】 ・自分の死後、自分についていろいろ評されることに耐えられない	

付録3 マーガレット・ミッチェル 子供時代の小説

ノートに書き残されていたり、手書きの表紙で製本したもの（近年発見）

ワシントン女学院時代に年誌に掲載されたものと「ロストレイセン」以外は未発表

年齢	タイトル	内容	補足
7	Two little Folks	2匹のアヒルを擬人化した短編物語	家で多くの動物を飼っていた
8~9	The night and Lady	ヒロインに結婚を断られ、征服しようとする悪い騎士を、良い騎士がやっつけ、めでたくヒロインと結婚する。	美しいヒロインと白馬の王子の ハッピーエンド 勸善懲悪
	The green snake	相思相愛の王子と女王。横恋慕した女が魔女と取引し、仲を割こうとするが、最後は蛇にされてしまう。	
11	The little pioneer	アパッチにさらわれた少年を助けに行く。男の子たちは次々やられてしまい、マーガレットが活躍する	<ul style="list-style-type: none"> <自分が唯一のヒロイン> ・主人公の名はマーガレット 冷静で強い。 ・登場人物はいとこ、友達友達が 実名で登場 ・女性はマーガレットのみ ・冒険もの
	When we are Shipwrecked	船が沈み、子供たちだけで島に流れ着く。男の子たちが原住民につかまり、マーガレットが英雄的に助ける。原住民の少女との決闘も、男の子の助けを拒んで一人で勝つ。その後、敵をしりぞけ脱出するまで冷静なマーガレットがリーダーシップを発揮。みんなが称賛する。	
	Forest and Foothills	<ページ抜けが多い>	
12~14	Hugh Warren, A Spy for the Union	237Pの長編(60P紛失)。南北戦争の北軍スパイの話。	<ul style="list-style-type: none"> <南北戦争の小説> スパイを主人公にして、戦場ではなく、北部と南部の人間の間のことを描く。 男性主人公。
	Dan Morrison, A spy for the confederacy	南北戦争の南軍スパイの話。北軍につかまり危機一髪。以前助けた北部の人間に救われる	
	Big boy of the Sierras	過去の因縁がある敵同士。紆余曲折の末、誤解が解け和解。2組のカップルが誕生し、ハッピーエンド。	<ul style="list-style-type: none"> <ラブストーリー> ・困難を乗り越え結ばれる ・登場人物は知人友人を モデルにしているケース が見られる ・南北戦争の話と同じ期間 に執筆。
	The Arrow brave and the Deer Maiden	新大陸発見前。対立する2つの部族での、ロミオとジュリエット風展開。ただし、ハッピーエンド。	
	The Silver Match Box	軍の秘密文書運んだ男がスパイに拉致されるが、偶然同行していた恋人が勇敢に危機を救う	
	Steave of the X-B	女主人公が愛の告白を弄んだことで、傷ついた男が去り、メキシコ反乱軍に参加。その後、苦境に立った彼女のことを友人が知らせに行く。戻って復讐するが撃たれ・・・	
	The Greaser	国境の牧場の女主人に命を救われたメキシコ人。彼女を助けるが、負傷し・・・	
15	If Roosevelt Had Been President	ウッドローウィルソンのメキシコやリボート事件への中立性への批判があるが、もしルーズベルトだったらどうなのか？というエッセイ。	1910年～のメキシコ革命に影響された内容
16	Little Sister	両親が殺害され、姉がレイプされるのを目撃する幼い妹の話	ワシントン女学院の年誌に掲載
15	Lost Laysen	南太平洋の島で起きる悲劇。女主人公は、命をたって貞操を守る。風と共に去りぬに共通するテイスト。恋人であったラブエンジェルに贈られた話。	恋人であったラブエンジェルに贈られた話。死後発見。 日本語翻訳本あり。
17	Sergent Terry	戦場での兵士の内面を描く	第一次世界大戦 ワシントン女学院の年誌に掲載

付録4 アガサ・クリスティー年譜

<家族>

●母方の祖母　メアリ・アン

母の実母。4人の子供をかかえて未亡人になり、娘のクララ(アガサの姉)を姉の養子に出す。

●母の祖母の姉。祖母　マーガレット

機知に富み、個性が強い。クララを養女にする

●母　クララ

9歳のときに、父を亡くし、母の姉の養子となる。自分を養子に出した母(メアリ・アン)を許せない気持ち。男の子のほうを、娘の自分より大事にしていたためではないか、という思いで、深い孤独感とホームシックに苦しめられた。義母の夫と先妻の子であるフレデリックとその後結婚。気まぐれで、人目をひき、霊能者のような直観力があるとされていた。

●父　フレデリック

アメリカ人。NYの社交界でだれからも愛される存在だった。イギリスにいる父親の再婚相手の姪にあたる養子のクララと恋をし、結婚する。事業家だったが商才に乏しく、祖父の残した遺産を投資家に預けて、自身は働かずに暮らしていた。娘の成長をやさしい目で見守りながらも、独自の超然たる生活をおくっていた。奔放な妻を生涯愛し続けた。病気がちで55歳で死亡。

●姉　マッジ

クリスティーの11歳上。野性的で切れ者。話し上手で愉快的な人物で、クリスティーとは対照的。

クリスティーが探偵小説を書くきっかけを作る

●兄　モンティ

クリスティーの10歳上。家族の心配の種。学校を中退、軍隊に入るも、生涯放浪者的な生活をし、なぜか女性が面倒をみてくれた。クリスティーといっしょに暮した時期はほとんどない。若くして病死

●最初の夫　アーチボルト・クリスティー (結婚期間 1914年～1928)

空軍大佐。その後ビジネスマン。熱烈な恋愛をへてクリスティーと結婚。クリスティーとの関係が悪化し、他の女性と関係を持ち、その女性と再婚。

●二人目の夫　マックス・マローワン(結婚期間 1930年～1976年)

クリスティーより14歳年下の考古学者。考古学調査を評価され、ナイトに叙任されている。クリスティーの晩年には公然と愛人を持つが離婚はせず、アガサを看取る

<年譜>

西暦	年齢	出来事	心理的事象	世の中の動き
1878		・1878年4月 アメリカ人実業家の父フレデリック・アルヴァ・ミラーとイギリス人の母クラリッサ・ペーマー(クララ)が結婚し、イングランド南西部のデボンシャー州トーキーに住む。		
1979		・姉マーガレット(マッジ)が、トーキーで生まれる。		
		・父は家族をアメリカの親戚にするため、一家でアメリカへ		
1880		・1880年6月 兄ルイス・モンタント(モンティ)が、アメリカで生まれる。父の親友の名を貰う。		
1890	0	・ 9月15日、アガサ(アガサ・メアリ・クラリッサ・ミラー)誕生	・母は36、父は44で、姉のマッジとは11歳の、兄のモンティとは10歳のひらきがあった。 * 兄弟との競争などはなし。実質一人っ子	
1891 ～ 1894	1 ～ 4	・子供時代 裕福で幸福に暮らしていたが、姉と兄は寄宿学校に入っていて孤独だったので、空想の世界で遊ぶ。 ・母は8歳までは子供に字を読ませてはいけない、遅いほうが目のためにも頭のためにもよい、と主張したが、環境と才能でアガサは字を覚えた。 ・幼時から読書が好きで、特にチャールズ・ディケンズが大好きだった。 ・父が朝食後に算数を教えた。アガサは算数が好きだった	・仲睦まじい両親。まじめで長続きする使用者。 ・たいへんにかわいがられ、甘やかされていた ・周囲は大人で、ばかばかしい規則はいっさいなかった。 *基本的信頼感の獲得	
1895	5	・学校へは行かず、家庭で教育を受ける ・1895～1896年の冬 アメリカの財産管理人が投資に失敗して、一家の財政が傾く。	・家では母の意向が優先される	
1896 ～ 1901	6 ～ 10	・家を人に賃して、家族で生活費の安くてすむ海外へ行き、フランス南西部のポー町に半年間滞在する。 ・家庭教師につきフランス語を修得する。 ・帰国後、ドイツ人のピアノ教師からレッスンを受ける。	・庭で空想の学校と空想の友達を作り、想像の世界を楽しむ	
1901	11	・イーリングに初めて路面電車が走った事に触発されて詩を書き、地元の新聞に掲載される。 ・11月26日 父が肺炎で死去、享年55歳。 ・母の勧めもあり、この頃から詩や短編小説を様々な雑誌に投稿するようになる。	母とより親密な関係に * 一卵性母娘	
1902	12	・姉は裕福な工場主の息子ジェームズ・ワッツと結婚し、マンチェスターのチードル・ホールに住む。 ・ジュール・ヴェルヌ全集をフランス語で読破し、アンソニー・ホープの小説『ゼンダ城の虜』を読む。	初めて、本物の女の子の友達ができる 内気ではにかみやだった(終生変わらず)	
1903	13	・姉の息子ジャックが誕生。 ・母と共にベビーシッターとしてチードル・ホールで過ごす。 ・義兄の妹ナンと会い、生涯を通じての友人となる。 ・姉を通じてシャーロック・ホームズのシリーズを知る。		
1905 ～ 1906	15 ～ 16	・母はアガサを週二回、ミス・ガイヤーの学校に通わせる ・その後、母の意向で次々に学校を変える	・母の意志に従う * 能動的な従属 ・規律のために規律を守らせるということがあるのを初めて知る	
1907	17	・コンサート・ピアニストになりたいという夢は人前である性質のために断念 ・オペラ歌手になりたいという夢は声量不足で挫折する。	・アイデンティティ模索	
1908	18	・アガサがインフルエンザからの回復期で退屈していると、母から短い小説を書くように勧められ、「美女の家」という約30ページの物語を書いて祖父ナサニエル・ミラーの名前でいくつかの雑誌社に送るが、採用されなかった。	母の勧め	
1909	19	・「砂漠の雪」を書き、作家のイーデン・フィルポッツに批評を請う。 ・ガストン・ルルーの推理小説『黄色い部屋の秘密』に触発されて、短編小説「幻影」と「あまりに気ままなために」を書き、フィルポッツに批評を請うと、アガサの才能に折り紙を付けてくれた。	・次々にいろんな出版社に作品を送るが、ことごとく返される。しかし、あきらめなかった * 自己信頼の高さ ・フィッツポッツに相談するよう促したのは母。 * 娘の有能感を支援	

西暦	年齢	出来事	心理的事象	世の中の動き
1910	20	<ul style="list-style-type: none"> ・母の転地療養のため、カイロのホテルに逗留(約三ヶ月)し、カイロで社交界にデビュー。 ・海軍士官に求婚されて承諾するが、数年間イギリスを離れる事になった彼の不在を喜んでる事に気づいて婚約を解消する。 ・レジナルド・ルーシー少佐(レジー)に求婚されて承諾するが、彼は婚約期間を2年と決めて、香港の連隊に戻ってしまう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・女性のアイデンティティは結婚し妻になること、という当時の考えを信じ、自分もそうなれるという確信を持っていた * 幸せな結婚アイデンティティ 	
1912	22	<ul style="list-style-type: none"> ・ダンスパーティの席でアーチボルド・クリスティ少尉(アーチー)と出会う。 	理想的な相手との出会い	
1914	24	<ul style="list-style-type: none"> ・アーチーは戦争へ。アガサは篤志看護隊の一員となり、はじめは看護助手として、のち薬局助手として働く。 ・薬局勤務を通して毒薬の知識を得る。 ・12月24日、アーチーと二人だけの慌しい結婚式を挙げる。 ・姉から「あなたには探偵小説を書けない」と言われた事がきっかけで、探偵小説を書き始める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・結婚後、4年間は離れて暮らす。 	第一次世界大戦勃発
1916	26	<ul style="list-style-type: none"> ・『スタイルズ荘の怪事件』を脱稿し、名探偵エルキュール・ポアロを生み出す。複数の出版社に送るが、採用されなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本を書くなどということは、ほんの些細な気晴らしにしかすぎなかった 	
1917	27	<ul style="list-style-type: none"> ・最後の試みとして『スタイルズ荘の怪事件』の原稿をボドリー・ヘッド社に送る。 		ロシア革命
1918	28	<ul style="list-style-type: none"> ・アーチー、空軍省に職を得る。 ・9月にロンドンに引っ越す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ようやくふたりの生活が始まる 	戦争終結
1919	29	<ul style="list-style-type: none"> ・8月5日、アッシュフィールドで娘ロザリンドを出産。 	幸せの絶頂	
1920	30	<ul style="list-style-type: none"> ・最初の探偵小説『スタイルズ荘の怪事件』出版。名探偵エルキュール・ポアロの最初の事件。母に捧げられた初版約2000部を売り切るが、収入は25ポンド 	<ul style="list-style-type: none"> 3年前に送っていたものが突然採用された。 推理小説家としてのキャリアスタート 	
1922	32	<ul style="list-style-type: none"> ・二作目となる冒険小説『秘密機関』を出版。おしどり探偵、トミーとタペンスの初登場。 ・帝国博覧会の宣伝使館ベルチャー少佐に、財政顧問として同行を頼まれた夫と共に世界一周旅行に出発(約一年間)、南アフリカ、オーストラリア、ニュージールランド、ハワイ、カナダ、アメリカをめぐる。 * 旅行中、日記のように母親あてに手紙を送っている 	<ul style="list-style-type: none"> 夫が母の家を維持したいなら、もう一冊本を書けばいいとすすめた。 妻がものを書くことにたいして、必ずしも不賛成ではないのを示しているように思われたことで、2作目を書いた。 * アイデンティティはあくまでも、妻であった 	
1924	34	<ul style="list-style-type: none"> ・コリンズ社と出版契約を結ぶ。 ・詩集『夢の道』をジョフリー・プレス社から自費で出版する。 ・ロンドンから南西郊外のサンクデールに転居し、アーチーの提案で「スタイルズ荘」と名付ける。 ・アーチーは帰国後、職探しに苦勞し、結局、意に沿わないところで働く憂鬱な日々。 ・お金ができたので母のため近くに家を買う(アーチーの不満) 	<ul style="list-style-type: none"> ・小説家のキャリア確立 ・夫は仕事がうまくいかない 	
1925	35	<ul style="list-style-type: none"> ・冒険コメディ小説『テムニーズ館の秘密』を出版。 		
1926	36	<ul style="list-style-type: none"> ・探偵小説『アクロイド殺し』がコリンズ社から初めて出版されると、このトリックについてフェアかアンフェアかの論議を呼び、一躍有名になる。 ・早春、母クララが他界。精神的動揺。 ・アガサは両親の家アッシュフィールドで過ごす。 ・8月5日、アーチーがナンシー・ニールと結婚したいと離婚を迫り、関係に亀裂。 ・12月3日金曜日、有名な10日間の「失踪」事件マスコミ各紙がこの事件を報道。 	<ul style="list-style-type: none"> ・夫婦に溝ができ始める。アーチーはゴルフに逃避 ・夫に対し、自分がお金を稼いでいることを盾にコントロールしようとした ・陽気に励まし、一緒に旅行に行こうというアーチーの対応に不信感 * 共感性の不足 ・極度の不眠、食欲もなく、見る影もなく衰えていった ・失踪はアーチーを懲らしめるための狂言であった 	

西暦	年齢	出来事	心理的事象	世の中の動き
1927	37	・姉の家の主治医からロンドンの専門医を勧められて、ハーレー街の精神科医の治療を受けて過ごす。		
1928	38	・『秘密機関』をもとにした無声映画「Die Abeteuer GmbH (冒険会社)」がドイツで制作される。 <u>クリスティー作品のはじめての映画化。</u> ・イギリスでも映画『謎のクイン氏』が制作される。 ・4月、 アーチャーと離婚 。 ・5月、『アクロイド殺し』が舞台化され ・中近東にはじめて旅をする。ウルの発掘キャンプを訪問し、考古学の権威レナード・ウーリー博士夫妻に歓迎される。考古学への興味を感じ始める。 ・娘と共にカナリア諸島で過ごす(～1929年冬)。		男女平等選挙権
1929	39	・ロンドンのクスウェル・ブレース22番地にコテージ風の家を手に入れる。 ・このころ、「探偵クラブ」に加入する。		世界大恐慌
1930	40	・ハリー・クイン氏登場の短編集『謎のクイン氏』を出版する。 ・『牧師館の殺人』。ミス・マーブルというキャラクター誕生。 ・普通小説『愛の旋律』がメアリ・ウェストマコット名義で出版。 ・中近東への2度目の旅で、ウルの発掘キャンプを訪問し、助手で 25歳の考古学者マックス・E・L・マローワンと知り合い 、マックスの案内で小旅行に出かける。 ・娘が肺炎にかかったという電報が届き、マックスに付き添われてイギリスに帰国する。 ・マックス、大英博物館に勤務する。 ・夏の初め 15歳年下のマックス・E・L・マローワンと婚約 ・9月11日、スコットランドのエジンバラでマックスと再婚 ・マックスが、ウルの発掘キャンプで働く	・プロポーズを受けた際の条件 収入は全て折半する ゴルフはしないでほしい	
1931	41	・《アリバイ》映画化。 ・テムズ河畔ウォリントンフォードに家を購入する。 ・マックス、スコットランドの考古学者キャンベル＝トンプソン博士が指導しているニネヴェの発掘現場で働く。 ・冬、エジプトに滞在し、ルクソールのツタンカーメンの墓を訪れて以来、古代エジプトに多大な興味を抱く。		
1932	42	・アガサはニネヴェに旅行し、マックスの仕事場テル・コチュクで発掘シーズンを過ごす。		
1933	43	・マックスに勧められて幾何学の講座を受講する ・マックス自身によるはじめての発掘がイラクのニネヴェ近くのアルパチャでおこなわれる。アガサもマックスに同行する。		
1934	44	・『オリエント急行の殺人』出版。 ・きわめて 自伝的性格の強い小説『未完の肖像』 をメアリ・ウェストマコット名義で発表する。	・アーチャーと別れるまでの自分の人生を物語っている。女主人公は犠牲者。 *自分には非がないという気持ち	
1935	45	・シリアのチャガール・バザールでマックスの2番目の発掘 ・ジョン・レーンがペンギン・ブックス・シリーズを創刊する。		
1937	47	・代表作『ナイルに死す』出版。		
1938	48	・両親の家アッシュフィールドを売る。 ・デヴォンにジョージ王朝風のグリーンウェイ・ハウスを購入		
1939	49	・『そして誰もいなくなった』出版。		第2次世界大戦
1941	51	・娘のロザリンドが職業軍人のヒューバートと結婚する。 ・グリーンウェイ・ハウスは、疎開してきた子供達の住まいとして臨時に貸し出され、ロンドンに引っ越す。 ・マックスは近東の専門家としてカイロに派遣される。 ・アガサは、週3回、大学病院の薬局で働く(～1944年末)。		
1942	52	・ ポアロ最後の事件である『カーテン』 、 ミス・マーブル最後の事件である『巢のなかの卵』 (『スリーピング・マörder』)を執筆し、高い保険をかけて銀行の金庫に保管する。前者は娘に、後者は夫マックスに贈られた。	・人気シリーズを、自分に何かあっても完結させるように準備するプロ意識	

西暦	年齢	出来事	心理的事象	世の中の動き
1943	53	・『五匹の子豚』出版。 ・9月、娘ロザリンドがアブニーで息子マシューを出産。 ・11月『そして誰もいなくなった』を脚本化し、ロンドンの劇場で初演を迎える。これ以後、演劇活動を始める。		
1944	54	・メアリ・ウェストマコット名の小説『春にして君を離れ』と、紀元前2000年のエジプトを舞台にした『死が最後にやってくる』が出版される。 ・娘婿のヒューバート・ブリチャードが戦死。		
1945	55	・映画版『そして誰もいなくなった』が制作される。 ・5月、マックスが帰国する。		戦争終結
1946	56	・イラクとシリアでの発掘の回想録『さあ、あなたの暮らしぶりを話して』を、アガサ・クリスティー・マローワンの名義で出版する。		
1947	57	・メアリ皇太后の80歳の誕生日を記念してBBCがラジオの特別番組を企画し、皇太后の希望で執筆したラジオドラマ「三匹の盲ネズミ」が放送される。 ・マックスがロンドン大学の考古学の教授に任命	このころから夫と愛人の関係に気づく。生涯、頑なに見て見ぬふりを通した。	
1948	58	・イラクのニムルドの発掘に同行する。この発掘はマックスの最大の業績となった。		
1949	59	・ロザリンドが弁護士で東洋学者のアントニー・ヒックスと再婚。 ・『サンデー・タイムズ』が、メアリ・ウェストマコットがアガサ・クリスティであることを暴露 ・以後10年間、ニムルドでの発掘続く。	ペンネームの暴露に激怒。 小説の内容が生々しい内容であったから。	
1950	60	・王立文学協会のフェローになる。 ・ミス・マーブルものの『予告殺人』で、売り上げ記録をつくる。 ・ニムルドで自伝の執筆をはじめ(～1965年)。		
1951	61	・戯曲「ホロー荘の殺人」が初演される。		
1952	62	・ロンドンのアンバサダー劇場で「ねずみとり」が上演される。この劇は、世界で最も長いロングラン興業となる。		
1953	63	・《検察側の証人》のロンドン初演が好評を博する。		エリザベス女王戴冠式
1954	64	・アメリカ・ミステリー作家協会からグランド・マスターズ賞受賞		
1955	65	・アガサとマックスは銀婚式を祝う。 ・女王エリザベス二世とエジンバラ公がウィンザー・レパートリー劇場での《検察側の証人》に臨席する。 ・アガサ・クリスティー・リミテッド創立。		
1956	66	・大英勳章第3位 (CBE) 叙勲。		スエズ戦争
1957	67	・傑作『パディントン発4時50分』出版。 ・《検察側の証人》がピリー・ワイルダー監督により映画化される(邦題は『情婦』)。		
1958	68	・ドロシー・セイヤーズを継いで「探偵クラブ」の会長になる。 ・ニムルドでの発掘終了。		
1960	70	・マックス、CBEを授与される。		
1961	71	・エクセター大学より名誉文学博士号が授けられる。		
1962	72	・最初の夫、アーサー死去。 ・『パディントン発4時50分』をもとにした映画『Murder She Said (殺人と彼女は言った)』がイギリスでつくられる。 ・「ねずみとり」が10年目を迎える。		
1965	75	・『バートラム・ホテルにて』出版。 ・15年かかった自伝の執筆を終える。 ・宗教的な物語と詩を集めた『ベツレヘムの星』を、アガサ・クリスティー・マローワンの名前で発表する。		

西暦	年齢	出来事	心理的事象	世の中の動き
1966	76	・マックス・マローワンが『ニムルドとその遺物』を出版		
1968	78	・考古学分野での貢献により、マックスがナイトに叙せられる。アガサは「レディー・マローワン」を名乗れるようになる。		
1970	80	・80冊目のミステリー『フランクフルトへの乗客』を出版する。実際に起こったハイジャック事件を先取りしていたとして話題		
1971	81	・大英勳章第2位 (DBE) 叙勲。公式の称号は「デーム・アガサ」となる。		
1972	82	・マダム・タッソーの蝸人形館にアガサが並ぶ。 ・《ねずみとり》20年目。		
1973	83	・コリンズ社から二巻の詩集が出版される。 ・最後に書かれた小説『運命の裏木戸』出版。 ・10月、心臓発作に襲われ、創作活動に終止符。		
1974	84	・映画『オリент急行殺人事件』公開。世界中でヒットする。		
1975	85	・戦争中に執筆していたポアロ最後の事件『カーテン』出版		
1976	86	・1月12日、 アガサ・クリスティー死去 。 ・『カーテン』と同様に、戦争中に書かれていたミス・マーブルの最後の事件『スリーピング・マーダー』が出版される。		
1977		・『アガサ・クリスティー自伝』出版。 ・マックスの回想録『Mallowan's Memoirs』も出版される。		
1978		・8月19日、マックス・マローワン死去。		